日本文學梗概

東京

民友社刊行

明治文庫

日本文學梗概目錄

住吉物語梗概……一
とりかへばや物語梗概……三一
竹取物語梗概……八五
古事記梗概……一〇四

住吉物語梗概

昔し中納言にて左衛門を兼ねたる人、二人の女に通よひけるが、一人は時めく諸大夫の娘、其の腹に女君二人あり、今一人は宮腹の女にて、一人の姫君を産みけり、此の姫年月かさなりて八歳ばかりになり給ひける頃、母の宮例ならぬ心地に打臥し、日を経て重くなり勝さり、遂に果敢なくなり給ひぬ、扨て失せ給ふとき中納言に遺言しけるは、『われ果敢なくなりなば、此の幼なきものいため、後ろめたうなん侍るべき、われ無からん後なりとも、なほ〳〵ならぬ振るまひせさせ給ふな、いかにもく帝に奉らせ給へ、と娘たちにおぼし落すな』と呉れ〳〵も彼の姫君の後事を頼のみて絆断れたり、佛事も程なく済み果て、中納言は元の北の方へ通ひ給ふ、姫君は母宮のことのみ思ぼしつゞけて悲しさ遣る瀬なく、一葉の小萩露重むげなる風情なり、八八

中納言も姫が母宮を失ふて、今は一人の親をのみ、暮ふけしきを御覧ずるにつけ、果敢なくなりにし人の面影忍のばれて、歸り給ひても心にかゝることのみなれば、爭かで他の娘たちと共に住ませばやと思へども、生みの親子の中ならねば、乳母の手許に預け置きたり、

月日に關守なく、姫君も早や十おまりになり給ひければ、乳母中納言にいふやう幼けなきときは兎も角も今は姫君も年を召させ給ふに、故宮の遺言じ給へる、御宮仕へは如何にぞと、中納言もそは道理至極なりとて正月の十日に迎へ取りて己れの家に養ひけり、姫が腹がはりの女兄弟中の君、三の君と打ち語らひて遊ぶさまを見て、中納言は心に嬉れしく思ひけり、

中納言は西の對をしつらひ、之に姫君を住ませんと營みをなす、繼母は心の中に如何思ひけん、上べのみはいたく喜こびたるさまに持てなしけり、中の君には兵衛佐なる人をめあはせ、西の對にすまへば、中の君と三の君むつまじく明かし暮らし給ふ、こゝに姫が乳母例の故宮の遺言を云ひ出だし時々中納言に迫まりて早く宮仕へに奉らん由をすゝめければ、

中納言、われも忘れたるにおらねど、北の方に聞こえ合はせんと思ふに、我が子ならねば、遠かに云ひ出でずとて、思ひわづらふのみなり、

斯くて月日の經つまゝに、こゝに右大臣なる人の御子に、四位の少將とて世に勝ぐれたる人あり、朝夕思ふさまの美人を求めて心も空にあくがれけり、然るに右大臣の家の子に筑前と聞こゆる男あり、此の男元と中納言に仕へたるものなれば、朝夕彼の姫君を見參らせたり、嘗つて右大臣の北の方にて、姫の噂しけるを四位の少將立ち聞きて竊かに筑前を招き寄せ、詳しく姫君の事など尋ね給ひ、扨文を傳へ呉れとの事に筑前承知しければ、少將打ち喜こびつゝ、紅葉かさねの薄樣に

はつすぐれ今日ふりそむるもみち葉の色の深きを思ひしれとぞ

と書き認めて筑前によく計らへとて渡しけり、筑前は御文を預りつゝ、日の暮るほどに中納言のもとに參ぬりければ、人々皆珍しき人の來つるよとて、喜びあへり、筑前は心に一物ありければ、間を伺ひ待從を呼びて語らいけるは、吾は右大臣の子四位少將殿の姫君への御文を預りて來にけるなり、宜しく計らひ給ひねと、頼むに待從姫君にかくと通じ彼の文

廣げて見せけるに兎角の返答もなく顔打ち赤めてうつむきおたり、筑前かへりて此の由少將に傳へて、姫の有り樣を語りいふ、筑前參ゐりて其のむかしの事ども語らひけるに、母宮の御事どもを、歎げき給ひし御姿、女郎花の露重もげなる風情にて、美つくしさ限りなかりきなど話すに、少將愈よ思ひつのりて、此の事かなへ呉るれば生々世々の喜びぞと仰せらる、再び文書きて筑前に頼み、姫をかき口説かしめけり、筑前待從さま〳〵に言葉をつくして少將を婿にすべきよしを説き諫めしかば、姫も聊か心嬉れしく聞き居たり、筑前また姫に迫まりて彼の少將の文の返事を切きりに責めげるに『かやうのことも習はねば』とて聞入れず委細のことゞも歸りて少將に語るに、尙ほも説き呉れよ、此の戀ならずば、世にあらん心地もせぬなりと、思ひ込みたる氣色を見るにつけても、氣の毒なり、中に立ちける筑前は、其の後幾回となく搔き口説けども、其の甲斐遂に無かりけり

かゝる縁の由の彼の繼母の耳に這入りければ、繼母は早速筑前を招き、此の程對の君（姫君）に文使はす人は如何なる人ぞと問ふに、筑前包むに由なく遂に其實を語りぬ、繼母は其の相手の四位の少將なる由を聞き、いかで己が實子三の君の婿がねにせんとの野心を起

こし、筑前に謀りて我が子三の君を姫の代りとして逢はしめ給へといふに、筑前も辭するに由なく、幸ひ日毎に少將に責められ姫ははか〳〵しき返事もし給はねば、殆んど困り居ける折も折ゆゑ、繼母の頼みを承諾したり、

其の後筑前少將の許に至り、今一たび御文を給へ、御心のほどを聞こえ見んといふに、少將即ち歌を書く、

世とともに、烟絶えせぬふしのねのまたの思ひや、わが身なるらん

斯くて筑前之を受取りて少將の御文なりとて繼母に奉れば、繼母は之を三の君に示めし、此の御返へし參ゐらせよとの事に、三の君たばからるゝとは露知らず、顔打ち赤かめて料紙の上に

富士のねのけふりと聞けばたのまれず、上のそらにや立ちのぼるらん

と書きて渡すに、筑前受け取りて少將殿の許にきたり、姫君の御返へしぞと聞こゆれば、少將もたばかられぬるとは露知らず、急ぎ其文あけて見給へば、手跡もあまりめでたからざれど、正しく彼の君の御返へしなりと思へばいとゞ心嬉れしく喜び給ふこと限りなか

りき、

斯くて少將は三の君の許に通ふて、彼の姫君とのみ一心に思ひ誤やまり、僞はられしとは露知らざりけり、漸うやく日數も經るまゝに、晝もとどまり、御顏のほどよく〳〵見れば、聞きし程にあらねども、左りとて醜しといふにもあらねば、何心なくも通ひける、

少將の毎夜通ひ給ふは東の對なり、折々向ふ側なる西の對を見るに、よしある樣なれば、心の中には如何なる人の住めるにやと床かしく、己のが戀ひ慕へりし誠の姫君の住む所とは知らん由なく明かしくらす程に、『秋の夜のつれ〳〵と、長きねざめに悲しく物哀れなる小夜中に、閨ちかき萩の葉に、そよめき渡る風の音も、夜ごとに通ふ心地して、いと膚寒むき枕の下に、夜もすがら音なふきり〳〵すの聲も、そのことゝなく鳴くに、涙押さへがたき妻戸なる折りふしも、』箏の琴を彈ざる優さしげなる聲西の對に聞かれたり、少將枕を擡たげて側へに伏じける三の君に、あれ開き給へるやと問へば、先きの程より聞き居たり、といふ、扨て如何なる人か琴を彈き給へるぞといふに、三の君何氣もなく、吾が姉の彈き給へるなりといふ、少將左らば中の君のことなりと思ひ、兵衛佐殿のかと問ふ、否左にてはあらず、宮腹に出來たる姉上なりといふ、少將之を聞いて初めて己れがたばかられける由を知り、明け果てぬ中に歸りいそぎ筧前を呼びて恨らみをいへり。

少將は三の君をもあはれと思はぬにはあらねども、只管に彼の姫君のことを思ひ、いかで見奉らんと念じつゝ冬にもなりけり、雪の降りたる日少將待從に物いはんとて、彼の西の對のほとりにたゝずみ、蔀の下に立ち寄り聞けば、姫は例の琴かき鳴らして居たり、少將思ひに堪へでや、蔀を打ち叩くに、誰れならんと云ひつゝ待從立ち出づるに、少將は其の裝を提らへて文を渡して歸りたり、其の文を見るに、

白雪の世になる甲斐はなけれども、思ひ消えなんことぞかなしき、

侍從は姫君に之を示しつ、少將の心のほどをほのめかせども、姫はさすがに哀れに思ひながらも、『よそなりしそのかみだにも思ひよらざりし、今は愈よ人聞きわるしゆめ〳〵』と仰せて聞き入れざりき。

其の後少將は彼の宮腹の姫のことのみ思ひつゝけて、心の中も苦るしきまゝに、侍從に逢ひて、淺ましく人にたばかられて今は物思ふ苦るしさよ、などさま〳〵とかき口說き、今

はたゝ一言聞こえさすべきことありなど、度々侍従に迫まりけれど、中々に姫の志堅くして動かすべくもあらざりけり、少將は思ひ兼ねて神佛に祈のりてさま〳〵と心を苦るしめけるが、思ひあまつては侍従に逢ふて話すを幾ばくかの心慰さめとなし西の對の景色を見ざらんことの物うくて宵あかつきに過ぎ給ふに、古るき歌のいと哀れなるを歌ひつゝ行き過ぎ給ひけり、

斯くて姫君の乳母此の程より、例ならぬ心地に打ち臥し、五月のつごもり頃に果敢なくなりぬ、母宮を幼なくて失ひ給ひし姫君なれば、只乳母をのみ頼みに頼みけるが、遂に空しくなりにしかば、今は姫君心細く待従と共もに涙にのみ暮れ居たりき、

四位の少將七月七日あまりに姫君の許に來りけるに、初秋の月いと哀れなる夜端近かくいで、世の中の果敢なく哀れなることを云ひ出でゝ泣き給ふを、少將立ち聞きて、詞をほと〳〵叩けば、侍従は立ち出でゝ哀れに云ひ通はす程に、小夜も半ばは過ぎ鐘の音も聞えて哀れさはいとゝ勝さりゆきぬ、夜も明けぬ、少將は歸れり、

斯く過ぎゆく中にも、少將の思ひ愈よ深くなり勝さり、只一言の返事を給へとて、

秋の夜の草葉よりなほあさましく露けかりけるわがたもとかな、

など淺さからぬやうに聞こえければ、侍従はすゝめて返へしを書かす、

あさゆふに風おとづるゝ草葉より露のこぼるゝほどを見せばや、

とかきて打置けるに侍従とりて、

ゆかりまで袖こそぬるれ武藏野の露けきなかに入りそめてより、

と書き添へければ少將うち見て心嬉しく、一ことの御返へりごとに、世の中背きがたく侍従の心有り難しとて、

武藏野のゆかりの草の露ばかりわかむらさきのこゝろありせば、

斯くて又多くの月日重さなるまゝに愈よ思ひつのりて、堪へやらず、少將は又三の君の御方へ在はし給ふに三の君は少將の心の中を知らざれば何心もなく居たまふを、見るも又いとほしき限りなり、御物語りなどして、世の中の果敢なきことなど語りつゞけ、吾れ若し果敢なくなりなん後は、尙ほ思ひ出し給ふやなど聞こゆるに、三の君、時々聞こえ給ふさへ物うき限りなるに、況して然からんには、如何にせんなどの給ふも、流石あはれに捨て

がたかり、[illegible]

明けぬれば立ち歸らんとして、[illegible]

[illegible]たえなんと思ふものから玉鬘さすがにかけてくろしと知らなん、

三の君あはれと思ひ、[illegible]

[illegible]絶えはてんとぞかなしき玉かつらくる山びとのたより思へば、

暮れぬれば少將又西の對に至り見給ふに人はなし、三の君の方へおはしけれども、物うく

て立ち歸らんとし給ふに三の君、

[illegible]たまさかにみちくる潮の程もなく立ち歸りなんとをしぞ思ふ、

と恨らみ給ふも捨てがたし、少將三の君に語りて、何となく世の中心うく侍べれば深き山

にと思ひ立つ、其の時我が身を思ぼいでなんやといへば三の君、たまさかに待ちつけ侍べ

るだに心うきものを、況して然からんには如何に悲しきぞとて打ち泣き給へり、少將は西

の對なる彼の姫君の側を過ぎ給ふとき、[illegible]

君があたり今ぞすぎゆくいもし見よ、[illegible]いする人のなれる姿を、

と打ち吟ずれば、待從聞とがめて、窓を押し開けて此方を眺む、少將世の中のうき勝さり

ゆけば、深き山にもなど思ふなりとて戀むれて過ぎゆぎ給ふ、

今年も早や九月になりぬれば、中納言(姫君の父)北の方(繼母)に向かひ、二人の娘は各々

婿がねにありつきぬ、今は宮腹の對の君のみ殘こり居れり、よりて今年の五節の舞姫に彼

をまあらせばやと思ふは如何にぞと云ひけるに、繼母は心の中に妬たしと思ひながら然り

げなき體を裝ひつゝ、中々に覺えすくなき宮仕へよりは時めかん上達部などに婚はせんこ

とよかるべしといふに、並々の人に婚はせんは可惜しきことなりといふ、繼母然らば兎に

角もし給へと云ひ放ちけれど、心の中には妬たきこと限りなく、如何にもして姫に無き名

立たしめ、立身出世をさまたげ呉れんと打ち案じける、心のほどぞ恐ろしかりける、

扨ても繼母は姫に浮名立たしめ宮仕へのさまたげなさんものと、心に思案を廻ぐらしつゝ、

或る時瓦夫中納言に申しけるは、聞きながら申さゝらんは後ろめたしと思ふて申すなり、

對の君は我が生みける姫にあらねば如何にも勝ぐれて在はせよと願ひしことも空頼のめ、

この八月よりのこと露知らざりしぞ殘念よと、空涙をこぼして泣きけるに、中納言は驚ろ

き何事ぞと問はせ給ふに、六角堂の別當法師とかやいふ淺ましき法師の姫君のもとへ毎夜通ひけるが、此の曉もねすぐしたりけるにや、出でける姿を確かに見たり、と誠しやかに告げたるに、中納言は一應信せず、よもさる事はあらじ、女房どもの中なるやも知れずと、能く開きたる上ならでは受け取りがたしとて信ぜざりき、

『繼母、三の君の乳母に極めて心むくつけかりける女房に聞こえあはするやう、この對の君を我が女たちに思ひましたまへるがねたさに兎角いへどもかなはぬ、如何すべきといへば、むくつけ女、我も安からずは侍れども思ひながらうち過し候ひつるに、嬉しくとてさゝめき合せて、その後三日ありて怪やしき法師を語らひ、中納言に聞こゆるやうは、偽とぞ覺ぼしたりしに、唯今かの法師出づるなりと聞ゆれば、見給びける時に出でにける、あなゆゝしの事や、をなくては母に後くれて、また乳母さへにはなれてあはれ果報わろきものとは思へど、淺ましとて入り給ひぬ、さて宮仕の事はおぼし留まりぬ』

繼母の奸謀は既に行はれ、中納言の疑心は確かとなりぬ、哀れなる姫君は斯かるべしとは、露知らせ給はず、何心なく居給ふに、中納言對に在はして『いみじきことの出で來りし淺

ましさよ』と嘆き給ふ姫は驚き何事といふかるに、中納言侍從を呼びて立ちさまに、淺ましき事を聞けば、内まゐりはとまりぬと云ひて其のまゝ行き給へり、姫も侍從も何事とも心得ず、驚きまどひて、式部といふ女の對の方に心を寄せ居るものにあひて、中納言が云ひ給ひし仔細如何にと問ひけるに、初めて繼母の惡手段に謀られける由を聞き知り、『母なからんものは世にながらふまじきものぞ』と打ち臥して泣き給ふ、繼母とむくつけ女とは、仕てやつたりと竊かに笑ひ居けり、

中納言内まゐりのとゞまりたるは、是非もなけれど、如何にもして姫を方付けんと、心を廻ぐらしける中に、内大臣の御子に宰相なる人、左兵衛の頭にて、廿五六ばかりなるが人に勝ぐれたるに、此の人よけんと霜月と定めて、此の由を談し、繼母にも恐しき下心ありとは知らざりければ、云ひ合はせて萬づ相談をなしけり、繼母は上べにはそは極めて嬉しき事なりとて、喜こびたるさまを粧へど心の中には竊かに不快を感じ居ける、中納言は對にいたり侍從にむかひて、内まゐりの止まりたるは殘念なれど、左兵衛頭に參ゐらせんと思ふなり、と申入れければ、侍從此の由姫に語るに、姫はたゞ尼になりて、此の世を過ご

さんといふ、父君の斯くまでの給ふを背むき參らせんは如何かと、侍從は諫めまゐらせども、其の甲斐もなかりけり、

こゝに繼母は又姫が左兵衛頭に冊づくことの妬たましきに、如何にもして此のさまたげなし呉れんと、彼のむくつけ女と商議しげるが、きつと心に一計を案じ出だし、彼の姫君を下司の男に盗すませんと巧みけり、幸ひむくつけ女乳母が兄に、主計助とて七十ばかりなる翁の、目の内爛れたるが、この程最愛の妻に訣かれて倚は他の女を語らはんと思ふに、聞き入るものなく、思ひわづらふものあり、之れ屈强のものなりとて、彼の老翁を語らひければ、嬉び之を承諾せり、

姫を奪はんとの巧みごと、誰れ知るものなしと思ひの外、こゝに式部は如何にしてか聞き出だし、侍從の許に此の由を知らしめけるに、侍從は姫に語りて、繼母の無殘なる心根を嘆げきぬ、侍從は此の始末よく〳〵中納言に告げ給へと、勸めけるに、姫は更らに聞き入れず、此のことよしや父君に告げまゐらするとも他に又如何なる事を謀り給ふや知るべからず、今はたゞ野山に入り、尼となりて、此の世を安らけく暮らすべし、といふ、左らば

侍從も全じく尼になりて母の後世をも吊らひ侍べらん、如何にそのときは哀れに侍べらんと、兩人暫し涙に呉れ果てたり、かゝる時乳母だに死せず世にあらば、又よき思案のあるものを今は其の甲斐遂になしと、姫も侍從も倶にせん方盡きにけり、

とかく思案する程に侍從は故母室の乳母なる女、尼になりて住吉といふ所に住まひけるを思ひ出だし姫に此の由語り參ゐらすれば、兎にも角にも彼れに告げ遣るべしとの事に、侍從は人を使はし文を送くりていふ、

さても久しきなどは愚かなるにこそ、姫君の生ひ出でさせ給ひしとき、母宮も果敢なくならせ給ひながらも、いとおとなしくならせ給ひて、その後また侍從が母なりし人も隱くれにしかば誰も〳〵知る人もなくて其のかたのこひしさに、あなゆかし、さこそ世を背むきたまはめ、うらめしくも書き絶え給ふものかな、忘草のしるべとかや、さても〳〵人づてならで申し合はすべきになん侍べる、よろづを乘で、壹に參ゐり給へ、あなかしこ〳〵

彼の尼君此の文を見て扨て返へし、

まことに世をそむきて住吉のあたりに侍べりながらも、朝夕そのむかしの人の御事のみ心にかゝりて明かし暮らす中に、二葉にふり捨て給ひし折り、振り捨て奉りしかば、いかに扱ても生い出でさせ、給ふらんと、床かしく行ひの妨とならせおはしませば、忘草も名のみして片時もわすれ奉つることは無けれども、果敢なき世の中のくせにてよな、いま〳〵と思ひて過しつるほどに若き御心地ともにおぼし出でゝ、かやうに仰せられたることの御嬉れしさよ扱ても〳〵仰せのまゝに、急に御みづからあなかしこ〳〵

姫と侍從は此の返事を得て咿か心頼のみとなれりけるが、夫れにつけても文君中納言殿に離れ奉りなば、如何に嘆げき給はん、此の事露知ろしめさぬ御心根を察し奉つれば、哀れに悲しく涙のみはふり落ちけり、斯くとも知らぬ中納言は、姫か姿の殊の外疲せ衰ろへて涙のもり出づるを打ち見やり、三條（左兵衛頭と婚して住はん爲めに父君のしつらひたる家）へ渡り給はんことも近くなりたるに、何とて思ひに沈づみ給へると、色々に慰ぐさめ、弄びものさへ、多く送くりて遣はしければ、斯ばかり思もひ給へる親を、振り捨て、野山に去らば、後にて如何になげき給はんと早やかゝることども氣にかゝりて悲しきことと

限りなし、

然るほどに彼の住居なる尼君、約の如く上ぼり來つ、かくと告げゝれば、然らば今宵ぞ忍び出でんと暮るゝ程に忍び車を取り寄せつ、見苦るしきものども取りしたゝめけり、此の時中納言は何知らず姫君の對に來り給へば、姫はさる景色も見せずに在はしけれど、これやじばしの別かれかと思へば、忍へど色に現はれて、顔に振りかゝりたる髪のひまより、涙の洩れ出づるをふと見給ひ、『如何に母宮の事を思ぼすにや、乳母の事をゆかしと思ぼし出づるにや、また兵衛のことを心つきなく思ぼすにや、ともかくも何事にも思ぼさんやうに聞え給ふべきこそ、親の思ふばかり子は思はぬことの心うさよ、いかばかりにか哀れと思ひ侍べる』との給へば姫は猶ほ更ら涌かなしく『母宮のこと又乳母のことも思ひ侍べらず、只父君を見奉らで程經ることぞと、夫れが悲しく侍べるなり、』と泣く〳〵云ひ給へば中納言もうち泣きて『たとへ三條に在はすとも、父が生きたらん間は離るゝことあらじものを歎げくには及ばじ』とて立ち給ふを、今一たびと御顔ふり上げて見給ふに、目もくれ心も消ゆるばかりに侍從ともに泣き臥しける、

小夜ふくる程に、忍びの車出で來れば、櫛の箱と御琴ばかり持ち侍從と共もに車に打ち乘りつゝ馴れにし我が家を振り捨てゝ、世を住み吉の名を心あてに、主從二人は出でゆきけり、

『頃は長月二十日あまりのことなれば、有明けの月かげも哀れなるに、出てゆき給ひけん心の中、如何ばかり悲しかりけん、嵐はげしき空に、數絶えぬ音を、鳴き渡る雁も折しり顏に聞こゆ、雲間を出づる月の常よりも我をとぶらん心地ぞしける』

既に車は尼の宿れる許にいたり、仔細巔末を述べけるに、尼も道理と感じ入り『誠に思ぼし立つも御ことわりにこそ、今も昔も誠ならぬ親子の有り樣のゆゝしさよ、繼母ながらも何處をにくしと見給ふらん淺さまし』とて袖を絞ぼりつゝ語り合ひ。かくて夜の中に淀につきたり、

四位の少將は斯くとも知らず、其夜侍從を尋ねけるに、音もせず、姫君の所に臥したるかと几帳を見るに姫君も在はせざりけり、こはいぶかしとて人々に尋ねけるに、知らずと答ふ、扨ては中の君三の君の許にこそ在はすらめと尋ねけるにあらず、夜明けて後人々も斯く

と知りて、中納言に此の由聞こゆれば呆れ惑ふて悲しみなげく、中の君三の君も驚ろき泣けり繼母もあきれたるさまして空泣きに泣く、三の君はこゝかしこ尋ね給ふに、母屋のすみにて結びたる薄樣あり取り上げ見れば姫の手にて、

なき名のみたつたの山のうす紅葉散りなん後を誰かしのばん

となり中納言殿之を見給ひ、泣き臥しけり、繼母諫めて云ひけるやう、こは必定男などの家に在はしたるなり、痛くなげき給ふな、よも隱くれ果てじなど、憎くきことども云ひつゞけゝり、

然る程に姫君は彼の尼君侍從と供に、京を出でゝ河尻を過ぐれば『をかしくも行き違ふ船に乘りたるものどもの怪やしき、聲々して、つまも定めぬ岸の姫松と、歌ひて漕ぎゆくも、習はぬ心地して哀れなり、京の方は霧ふたがりて、そこはかとも見えず、比叡の山ばかりほのかに見えたる景色、物思はざらん空だに哀れなるべし、況んや有り難き親に引き別かれ、情けありし同胞を振りすて、何地と行くらんと思ひつゞけん心の内、如何ばかり

『なりけん』尼君、

すみよしのあまとなりては過しかどかばかり袖をぬらしやはせし

やがて住み吉に着きぬ、扨て住吉の景色は如何に、

住吉とて所々住み荒したるに海さし入りたるにつくりかけたれば、簀子の下に魚など遊ぶも見えて、南は一むらの里灰かに見えて、とまやどもにみるめかりまし、蘆の屋に心ぼそく烟たち上ぼる景色薄墨にかける葦手に似たり。東には天垣に傳ふ朝顔などかゝりて、岸にはいろ〳〵の花紅葉植立並べたり、西には海はる〳〵と見えわたりて、並みたる松の木の間より、帆かけたる船ども、淡路島をゆきかふさまも波に漂ふ、篝船はかなく見えて、日の入るは海の中に入るかと怪やしまれける、

姫君は爰に着きてより後は、明け暮れ佛の御前に經を讀み花を奉りなどし給ひける、やう〳〵冬にもなりければ、

いと淋びしさ勝さりて荒き風吹けば、わが身の上に、波立ちかゝる心地してける、沖より漕ぎくる舟には怪やしき聲にて、にくさびかけるなど歌ふも、流石にをかしかりけり、

住吉には霜がれのあし、氷に結ずぼれたる中に水鳥のつがひ、上毛の霜うち拂ふにつけ

ても、思ひのこすことなかりけり」

姫君住吉に在りけれど父中納言の我が爲めに物思ひ給はんことのみ心にかゝり、いかで生きて此の世にある由のみなりとも、告げまゐらせんと思ひければ、小童の京より具したりしものありしに、之を使ひとし何處よりとも云はで此の文をか〳〵の所に屆けくれよと持ち遣りけり、中納言の屋敷には彼の文を得て何處よりぞと問ふに答へず走り去りぬ、扨て如何なる文ぞと開き見るに姫の手にて、

あなゆゝし、世の忍びかたさよ、ゆくへも知らぬほどになりにしことを覺ぼし歎げく人も左はすらん、淺ましながらたびたつる心、たゞおぼしめしやらせ給へ、慰むかたとては、そなたの風の睦つまじくて、明かし暮らすになん、誰れも〳〵在はしますにや、あはれ昔を今になす世なりせばなど、さてもく殿いかにおぼし嘆げかせ給ふらん、ことに罪ふかくこそ、果敢なき命ながらへたりとばかり聞え奉つるになん、

と書き認め其の奥には、

あさがほの、　花のうへなる、　つゆよりも、　はかなきものは、

かけろふの、　あるかなきかの、　とゝちして、　世をあき風の、
くちなびき、　群れ居るたつを、　わかれつゝ、　たゞひとりのみ、
ありそ海の、　かひなき浦に、　まほたるゝ、　あまの羽衣、
わかごとく、　ほしやわづらふ、　日を經つゝ、　なげきますこの、
ねぬはなの、　くる人もなき、　あしびきの、　山下水の、
あさましく、　ながれ出でにし、　ふる里に、　かへらんとだに、
おもほえず、　いかにちぎりし、　いにしへの、　わが身なりとも、
うもれ木と、　身はなりはつる、　つるの子の、　くもゐはるかに、
たちわかれ、　行く方もまらず、　まらなみの、　よるのころもを、
かへしつゝ、　寢る夜のゆめの、　夢ならで、　こひしき人を、
みちのくの、　あふくま川を、　わたるべき、　わが身ならねば、
さゝがにの、　くもでにものを、　思ふかな、　とりの聲だに、
音もせぬ、　とをちの山の、　谷ふかみ、　人にまられぬ、

としをへて、　くちはつとも、　なりはてぬべき、
濱千鳥あとばかりだに知らせねば、なほたづね見ん潮のひるまを、

中納言は之を見給ひ聲を惜しまず泣き給ひ一たびは姿を變へんとし給ひしかど、人々今一度元の姿にて姫君に逢ひ奉らんは本意なるべしと諫めけるにてやう〳〵思ひとゞまりぬ、此の程右大臣は關白となり四位少將は中將になりて三位し給へり、此の中將姫の行く衛をのみ慕ひ居けるが、偏へに神佛を祈のりて、姫の在りか知らせ給へと念じけり、扨ても彼の三位中將(元の四位少將)は九月ばかりに初瀬にこもりて、七日目の曉がた、少し睡ろみける夢の裡に、やんごとなき女居たり、よく〳〵見ればこは思ひがけなき、意中の人なりければ、且つ驚ろき且つ嬉れしみ、今はいづくに居給ふぞと、と問へば、

わたつみのそことも知らずわびぬれば、住吉とこそあまは云ひけれ、

と答ふと見て驚き醒めたり、中將夢さめて、是れ必ず神佛の告げ給ひしならんと、歌の意によりて住吉を心あてに尋ねんと供のものをかへしつ、隨身一人を具し天王寺住吉參りに事寄せて立ち出でけり、

同じ曉住吉にては、姫君の夢見たりとて、侍從に語るやう、しばし睡ろみたる中に、少將來りわが袖をひかへて、

尋ねかね深き山路に迷ふかな、君が住み家をそこと知らせよ、

といふかと思へば夢醒めにきといふに、侍從げに如何ばかり歎き給ふらん、そは正夢にて侍るべしと語り合ひけり、

扨ても中將は住吉を心宛てに馴れぬ旅路を急ぎつゝ、酉の時ばかりに清げなる海邊に着きけり、遊べる童に此處は何處ぞと尋ねければ、住吉なりといふに、京の人の住み給ふ所やあると問はせ給へば、住吉殿と申ところは、京より來れる尼君の住み家なりといふに、即ち其の家に至りけり、江につくりかけたる家の、ものさびしき夕月夜、木の間よりほのかにさし入りて、中には人氣もなくものさびしき樣なり、扨て四邊の景色は、

さらぬだにも旅の空は悲しきに、夕波千鳥哀れに鳴き渡り、岸の松風物さびしき空にたぐひて、琴の音ほのかに聞えけり、この聲律にしらべて、盤涉調にすみわたり、之を聞き給ひけん心言へば愚かなり、あなゆゝし、人のまわざにはよもなと思ひながら、其の

音にさそわれて、何となく立ちよりて聞き給へば、釣殿の西面に若きひとり二人がほど聞こえてけり、

折りしも歌ふ聲哀れに、

たつぬべき人もなきさの住吉にたれまつ風の絶えず吹くらん、

と聞こゆるなるは、擬ふかたなき姫君なれば、扨ては佛の靈驗惜かに相違なかりきと、寶子に立ち寄りて戸をほと〳〵と叩けば、誰れぞと待從垣より覗くに、姿は夜目にも著るかりければ、少將殿の在はしたり、如何に申すべきやと問ふ、姫はあまりの意外に驚きけるが、妾は此處になしと告げ參らせよ、と命ずるに待從は僞はりて命の如く申しぬ、左れど中將は聞き入るべくもあらず、斯くも得堪へで忍び來しものを、今のさきまで御聲を聞きつるに、恨らめしくも情れなく隱くし給ふものかなと、怨ずれば、待從も實にもと思ひ、此の由尼君に語るに、尼君も哀れと思ひ、先づ入らせ給へと坐敷に請じ、いと懇ろに持てなしけり、

斯くて中將は年來の志空しからで、こゝに姫君と逢ふことを得て、暫らくは住吉の月に浮か

れて遊び居けり京よりは床りある人々、中將の住吉に詣ふで給ふと聞き、四位五位などの數此の處まで尋ね來たりぬ扨て打ち連れて京へ上ぼらんとするに、彼の姫君を田舍人の娘に、打ち粧たせて具し奉つる姫君は二歳までも住み馴れしところを、戀しき尼君にさへ離れて、捨てゆくなれば御心の中如何ばかりか悲しかりけん、

すみよしの松の木梢のいかならんとほざかるまで袖の露けき、

など思ひつゞけゝる、

姫は彼の中將に具せられて、京に上りけるが、二條京極あたりに住ませ給ふほどに、過ぎにし年の十月より、懷姙の氣色ありけるが、又の年の七月にいと美くしき若君を產み給へり、中將喜びかしづき給ふこと限りなし、斯くて中將は又も昇進して、中納言よりやがて右大將となり給へり、彼の中納言(姫君の父)は大納言となり給ひぬ、右大將は大納言と倶もに參內の折り、物語りの序にも、姫君のこと云ひ出ださんかと思へども、猶ほ思ひかへして謂はざりき、大納言は常に娘のことを云ひ出でゝ打ち泣くめり、姫君も待從も、かやうに多くの年月を過ごしながら、父上にも斯くとは告げ奉らでなげかするは勿體なくて空

おろし、あはれ女の身ばかり恨らめしきものはなしなど、折々歎げき給ふを聞き右大將も道理と思ひ、誠にことわりなり小供さへ出來たれば今は告げんかと思へども、尙ほ少しのほど、差し控ゆべし、まばし待たせ給へ、必ず告げ參ゐらせんと云ひける、

斯くて過ぎゆく程に、又美くしき女の君出來たり、若君七つ姫君五つになり給ひける八月、袴着といふことせん序に、大納言殿に知らせ奉つらんと決せり、扨て其の日にもなりぬれば緣りある上達部、殿上人等參ゐれり、大納言も日暮るゝ程に參ゐり給ひぬ、姫君待從近くよりて凡帳の綻びより、大納言の御面影をのぞき見れば、

若く盛に在はせし姿のあらぬさまに衰へて髮は雪を戴き、額に四海の波をたゝみ、眼は涙にあらはれて、光り少なく見え給へり、

之を見ける姫と待從が心の中如何ばかり悲しかりけん、大納言は、若君姫君の袴の腰結はんとてふと二人の小供を打ち見遣りつゝ、袖を顏に押しあてゝ打伏し給ふ、頓かて又顏を上げて云ひけるは、かゝる覗ひの席上に不吉の涙御免候へ、然かはあれども、今姫君の御有樣を見るに、吾が思ひなげく娘が幼なかりつる姿にさも似たり、恩愛の情忍びかねたれ

ばこそ、ゆるさせ給へやと、又も涙にむせび給へり、大將を初めとし、列座の面々涙流がさぬものこそなかりけれ、

大納言歸らんとし給ふに、右大將は兼ねて用意の、小袿を取りて奉つれば、怪やしみなから肩にかけて歸り給らぬ、扨ても大納言自宅に歸りて、繼母に向かひ、大將の我を睦つまじきものに覺ぼして持てなし給へり、若君姫君も美くしかり、あはれ若し吾が孫ならんには、如何に嬉れしく樂しからん、聞けば田舍人の娘の由なれど、幸ある人かな、扨ても其の娘は、姫が幼な顏によく似けるよなど語られけり、

大納言殿は彼の小袿を怪やしと思ひて取り寄せ見給ふに、對の君(姫君)に着せはじめし時の袿によく似たり、心の迷にやあらんと、尙ほよく〳〵見けるに擬ふ方なく夫れなりけり、之れには必定仔細あらんと、大納言は再び大將の許に在はせば、大將出で迎ふ、大納言いふ昨日賜はりし小袿は、慥かに我が失なひつるものと存ずるなり、老のひが目にや侍べらんか、心にかゝるまゝ走せ乘じたりと、こを聞いて姫君侍從は大將の言葉をも待たずに、次の間より辷べり出で、物をも得いはず涙に暮れて臥し沈づむ、大納言も胸先づ塞さ

がいてしばしは顏も得上げず泣き給ふ、

嬉れしき親子の對面に大納言を初め大將姫君侍從まで、一別以後の話に餘念もなく其の日を暮らしけり、扨て日も既に暮れぬれば大納言家にかへり給ひ、繼母に向かひ、今日は彼の對の君に廻ぐり逢ひぬといひけるに、繼母は心に驚きしが、左あらぬ躰にてあな嬉れしや如何やうに在はしつるぞといふ、大納言、『如何なる人の疎ましきことを謀計けるにか、思ひ餘まりて、住吉まで迷ひ行きたるを、大將殿物まゐりの序に求め逢ひて、年ごろ具して在はしましけれど、世の中のむくつけさに憚りて、斯くともの給はざりけるぞや、怪やしの法師に想してありしにや、よく〳〵聞き給へとの言葉に、繼母は胸に釘うたるゝ心地して顏赤らめてうつむき居たり、

其の後繼母は、世にも人にも疎まれて、朝夕嘆げきよ沈みしが、遂に敢果なくなりにけり、彼のむくつけ女も遂には淺ましき有樣にまどひありきけるとぞ、大將殿には關白をゆづり、若君は元服して三位中將の位に昇ぼり、姫君は女待にまゐりて末長がく榮へ給ひしとは目出たし〳〵、

とりかへばや物語梗概

何時の頃にや、權大納言にて大將を兼ね給へる人ありけり、北の方二人在はしけるが、一人は源宰相の娘にて男子を生めり、今一人は藤中納言の娘にて姫君を生めりき、男女二人とも美しう生ひ立ちて、何れを何れとも分ち難きのみか、容姿俱もに勝ぐれ、給へば、只同じ物どのみ見えて、ともすれば取り違ふべく見えけり、

若君はあでに香りけだかく、優柔しく、姫君は花々とほこりかに、愛嬌溢ぼるゝばかりなり、若君姫君何れも、次第に大きくなり給ふにつけても、こゝに一つの奇しきことには、若君は男子なるに其の性質、いたく婦人に類して、物恥ぢをのみし給ひ、召し使ふ女房などにも、少し離れて居るものには、恥づかしがりて顔さへ見せ給はず、父の殿にさへ恥らひて萬づ姫君の振るまひなり、書よむことゝも教へ參らせども唯だ恥かしとばかりにて、

御帳の中にのみ埋もれつゝ、雛遊び貝おほひなど、女の兒の遊びごとにのみ餘念なければ、父君あさましく思ふて、常に小言をのみ云ひ給ふを、若君は結句つらく覺ぼえて、父君を避げ、母上御乳母、扱てはちひさき童などにぞ見え給ふ、

姫君は又女にも似給はず、いとさうく〳〵しく、内に引き籠もることは得せで、多くは外にのみ出で給ひ、若き男女などゝ、鞠小弓などを翫び、文作くり歌うたいなどして萬事男の子と同じやうなれば、參ゐり來る上達部殿上人なんどは、誠の姫君とは思はずして、こを若君とのみ思ひ誤やまり居けり、父君の心の中如何にあさましく悲しかりけん、

斯くてもこは幼けなき時のことよ、生ひ立ちぬる後は、自づから其の本性に歸へるべしと、父の殿は尙ほ心便りとして、年月を過ごしけるに漸う〳〵姫も若君も十歳あまりになりけれど、若君の柔弱なる、姫君の荒々しげなるは、已むべくもあらざりけり、父君は心の中、こは如何にせんとなげくより外にせんやうも無かりき、

父の殿は御殿を廣く造くりなして、東西の兩對に、二人の北の方を住ませ、十五日づゝ恨らみなきやうに通ひ給ふ、二人の子達をも取りかへて、男君を姫君と呼び、女君を若君と

呼ぶやうになりぬ、《以下姫君といへば男、若君といへば女の君のことゝ知るべし》

父君は『春のつれ〳〵御物忌みにて、長閑やかなる晝つ方、姫君の御方に渡り給へれば、御帳の内にぞ、箏の琴をまのびやかに彈きすさび給ふなる、女房などこゝかしこに群れ居つゝ、碁雙六などうちて、いとつれ〳〵げなり』父君やがて姫君の側にさしより、など此く埋づもれてのみ在はするぞ、盛りなる花の匂いも、御覽ぜよかしと、云ひ給ふ、

姫君は御髮の長けに七八寸ばかりも餘まりたれば、『花薄の穗に出でたる秋の景色覺えて裾つきのなよ〳〵と靡きかゝりつゝ、物語りに扇を廣げたるなど、こちたく云ひたる程にはあらで、これこそ懷つかしかりけれ、いにしへのかぐや姫も、げにかくめでたき方は、かくしもやあらざりけん』と、見るにつけても父君は、胸まで塞さがりて、目には涙の事を浮かめ、『いかで斯くのみはなり果て給ふにか』と、御髮を、掻き遣り給へば、姫名は耻ぢ入りたるおもゝちにて、『御顏の色は紅梅の咲き出でたるやうに匂ひつゝ、涙も落ちぬべく見ゆる』に父君あはれとながめ給ふ、

父の殿は斯くて又、若君實は姫君の住み給へる西の對へ渡り給ふに、横笛の聲空に響きて

心も珍づらかなり、若君如何にと覗ぞき給へば、繭黄の織物の狩衣、蒲萄染の指貫着て顔はいと清らかに、凛々しき眼元鮮やかなるが上に、匂ひ滿ちて愛嬌は指貫の裾までこぼれ落ちたらんやうなり、父君は之を見給ふにつけても、元の女にて育て上げたらんには、如何ばかり美くしき姫君なりけんと、胸までつぶれ給へり、

扨ても二人の御子達は、才智容貌共もに、人に勝ぐれ給へること、やう〳〵世間に聞こえければ、内裏春宮にも、かばかりの公達を今まで殿上させざることはあるべからずと、大將殿(父君)へも屢々御氣色ありけれど、大將は今更ら事の仔細を打ち明けも出來ず、たゞ〳〵幼智弱年にして物の用にも立つべからざる由を奏して、出だし給はざりしを、早く元服なさしめて、參らすべき由切きりに迫まり給へば、大將も之れにはほと〳〵迷惑しけり、

左るにても默だすべきにあらねば、姫君には御裳着、若君には御元服とりかへたるまゝ爲させ給へり、扨て其の日ともなりぬれば、姫君(實は男)は美くしく飾り立てゝ裳着し給ふ、大殿(父君)は自づから御腰をゆひ給へり、若君の御ひきいれは右大臣殿(父君の兄)之を

仕給ふ、斯くて愈よ、男子を姫君となし、女子を若君となしければ、今まで風説を聞きて疑ひける人も之を信じて知るもの絶えてなかりけり、

扨ても若君(實は女子)は元服せさせ給ひける後は、大輔の君と聞こえけるが、やがて其の秋侍從となり給ひぬ、帝春宮を始め奉つり、天下の男女この君を一目見りて世に類ひなきに見とれぬは無かりき、然かのみならず此の若君は、文作くる業を初め歌道學問にも疎ろそかならず、才智衆に勝ぐれ給へば、父君の御大將も、心の中に女の身ながら斯くも才の勝ぐれたる上は、まづ此のまゝ男子になし置かんとも思ひたりき、

姫君(實は男子)の容貌いたく勝ぐれて聞こえければ、帝よりも春宮よりも宮仕へに參らせよとありけれど『いたく物耻ぢす、』といふことに託して、心困るしくも斷り參らせたり、扨ても崩ぐれ給ひし皇后の御腹に女一の宮一人在はしけるを、帝はいたく心ぐるしく覺ぼし給へり、然れば此の侍從の君(大將の若君は女子)の世に勝ぐれたれば、帝は心の中、この女一の宮の後見ともなさばやとも御ぼし給ふ、かやうの御氣色を洩れ聞きける大將は、胸まづ打ち騷わぎ、斯くと知りなば、男女正だしく養育し來りたらんものをと今更ら

心苦るしくは思へども、扨ても亦面目あることなれば、心のうちにはいたく喜び居給ひけり、

侍従の君は容姿勝ぐれて麗はしかりければ内裏の女房達竊かに心を焦がすものも多かりけり、扨ても其の頃帝の御伯父に、式部卿の宮と聞こゆるあり、此の宮の一人子の君、彼の侍従の君よりは二つばかりの年上なれど、容姿殊に美るはしくなまめかしかりけり、時に大將殿の姫君(實は男子)と右大臣の四の君とは、美人なりとの噂さ高かければ、何れをとも思ひ定めずに、あぐがれ居たり、然るに此の侍従の君の姿を見るに、見るめかたちの似るものなく、愛敬こぼれて美くしきさまの、斯かる女も世にあらばと、思ふよりふと考ふるに、此侍従の妹こそは似たるらめ女は今一際(しときわ)勝さりたらんと思へば、早や矢も楯(たて)も堪まらず、侍従の君に語らひて、妹の姫君(實は男子)のことかき口説きて、思ひあまるときは、涙もつゝまず泣き給ふ、侍従の君も他人よりはなつかしく思ひけれども、あまり睦つましく語らへば本性の女なること發覺せんと恐れて打ち解け給はざりけり、

かゝるほどに帝は御心地例ならざりければ、位を春宮に讓づり女一の宮を春宮となし親づ

からは朱雀院に在はし給ふ大將も御年七十に及びければ御髪下ろし給ひ、左大臣となり遂に關白し給ふ、侍従の君も三位して中將となれり、

右大臣殿の姫君、先きに女御となりて、ありけるが、后とはならせ給はざりければ、父の大殿、心の中にて思ひけるは、左大臣殿の若君中將の君(實は女子)は、人柄と云ひ才氣と云ひ、人に勝ぐれて浮きたる振るまひもなければ、姫が婿がねには至極よかるべしと、かく思ひ定めつゝ、此の由左大臣に話し給へば左大臣は心の中に可笑(をか)しく思ひ、中將は世づきたる心なく、夫婦の交らひせんとの心は侍べらざれど、仇だめき浮きたる心無ければ、姫君を預づけ給ばんにはよかるべしとぞ答へける、扨て此の由中將にも話しつ、結婚の日を定めて中將は(女子)右大臣の婿となりけり。

式部卿の宮の中將、此の時宰相となり給ひけるが、内々右大臣の姫君に心を寄せ給ひけるが中將之れが婿がねとなり給へば、心の中には本意(はい)なく思ひ給へり、中將の君は此の時又もや昇進して權中納言にて左衛門督を兼ね給へり、

權中納言は十六、姫君は十九にてありけり、二人の中らひは只いと哀れげに打ち語らひ、

『夜の衣も人めには打ちかはしながら互みにひと〳〵のべたては皆ありて、打ち解くるに力なきも深くはいかでか知る人あらん』

權中納言は右大臣の婿となりけるなり、右大臣も殊の外大切にし、中納言も大殿内裏の御遊びより外、他にて宿泊することもなく萬づつゝましくふるまひけれど、唯月ごとに四五日は必ず物の怪の起ればとて御乳母の里にはひ隱くるは如何なることぞ仔細を知るものなかりけり《こは中納言實は姫君なれば月毎に月經あるを悟られじと里にかくれ給ふなり》

扨て又彼の姫君(實は男子)の御身の上につきては、内參あり、聟取り等を物耻ぢに托して辭し參りけるに、或る時大殿帝の前にて御物語など、せさせ給ふに帝、中納言の妹は如何にしなさんと思ふぞと問はせ給へり、大殿(左大臣殿)は例の内參ありに奉つれとの事なるべしと、胸先づつぶれて奏しけるは、如何にしなさんとは無けれど、親にたりとも物耻ぢのみして淺ましきものから、尼などにして此の世を送らしめんと存するなりとて、打ち泣けり、帝御覽じて哀れに思ひ給ひ、尼にするとはあるまじき事なりかし、春宮も今ははかく〳〵しき人なければ、其の姫遊敵に參らせよ、との餘義なき求めに今は辭むべきにもあ

らざりければ歸りて北の方中納言に相談しけるに、中納言も贊成し給ひ、そは思ひの外にめでたき事なり斯くては后の位に定まり給ふこともありなん、同じくは疾く參らせ給へなどすゝむるに、然らばとて十二月十日頃に奉りけり、これとて御名も別に無ければ只尙侍と稱して參らせけり、時に春宮は梨壺に在はしければ、姫の御局を宜耀殿と定められけり、

其の年も立ち歸へり、朔日ごろの霞める空は、春の氣色とのみ、見えなから、まだ舊年に通ふ雪のこゝ彼處に打ち散りけり、宰相中將(式部卿の宮の御子)は宜耀殿に參ありけるに中納言も候ひけり、紫の織物の指貫、紅の色ふかく艶こぼるばかりなるを出だして、鮮やかについ居給へる容貌の、常よりは花々しくて愛嬌あり、

御帳の内をさし覗けば、尙侍は、紅梅のうへ薄く匂ほひたる御衣どもに、濃き掻練櫻の織物の御小袿を着て、紅梅襲の扇をも持ち給へる御容貌、中納言の顔を生寫しにしたらん如く、何づれを分きがたく似通ひけれど、尙侍は今小こし艶に香りなまめきたるさまなり、

日も暮れて月いと明らかに差し出でたる夜、大殿は尚侍にすゝめて、中納言の笛の音に琴の音を合はせ給へり、宮の宰相は此の合奏を聞きて、四邊を去りもやらず立ち聞きけるに、琴の音も笛の音も優にすぐれて、魂を奪ふばかりなるに感に入りて聞き給へり、

扨て宰相の君は霞み渡れる月の景色に、心のみ空にあくがれたるを詠がめ詫びて、例の中納言殿に語らひ慰さめんと思ひ、忍びやかに中納言に至りけるに、内裏の宿直に參ゐらせ給へりとの樣子なり、こは訪ひ來し甲斐なしと内裏へ參ゐらんかなど思ふうち、箏の琴の音ほのかに聞こえければ、とかくして紛れよりつゝ、垣間見ければ、階近かく簾を卷き上げて彈き出で給ふは、正さしく左大臣の四の君にて、今は中納言の妻なる、姫なり、御姿細そやかに疲せ給ひて衣にも堪へぬ風情の、艶に美はしき、を見て、宰相の君、心の中に乘ぬては美人の名のみ聞けどかくばかりとは思はざりきと、魂は此の人の袖に入りぬる心地して、立ち歸へるべき心地もせず、

斯くて宰相の君は、深く想ひあまりて今宵こそは忍ばんと心の中に定めけり、扨て夜となりていたく更けゆくに、人々はとかく寄り臥し、あるは庭に下りて花の影に遊びなどして、

御前(姫の)には人もなかりき、姫は琴の上に傾きかゝりて、

春の夜も見る我からの月なればこゝろづくしの影となりけり、

と獨りごちけるに、宰相の君、何事の心づくしにやと、愈よ堪へがたくて、押し開けて忍び入り給ふ、人々は中納言の在はせるなりと、思ふて驚かず、宰相は寄りそひて、

わすられぬ心や月にかよふらん心づくしのかげと見ける哉、

姫は中納言の來給ひしと思ひの外、他の人なりければ、淺ましと呆れて顔をひき入れ給ふを、搔き抱きて帳の内に率て入りぬ、姫は耻づかしさ恐ろしさに堪へで、泣き給ふを、近く侍らひける御乳母子の左衛門といふが聞きつけて、宰相の忍び入りて亂行に及べる由を知りけれど、此の事人にだに知らせじと思ひ、若き人々に月をも花をも見明せとて出だしやりつゝ、

姫と中納言との中らひは、名は夫婦たりとも、さる交らひとてあらざれば、姫はたゞ男女たるもののどやかに打ち語らふことより外には無きものとのみ思ひけるに、淺ましき持てなしには泣き沈づみ給ふ、然れば宰相の君もこれには大に閉口して、且つ中納言のさる色

どいろの在はさいるを悟とりて怪やしと思へり、思ふさま逢ひける夜なりとも、尙ほ飽かぬものを、況してこれは敢果なく明けぬるなり、宰相も是非なく歸りぬ、

扨ても姫は淺ましく夢か現と心まどひ、消えいる心地に起きも上がり給はねば、人々も御病氣にやと騷ぎけり中納言は、宿直も果て婦り來れるに、姫は尙ほ佗しき心地して引きかづき給ふ、母上も如何なる心地ぞと愛れひ給ひ、祭祓など騷きあへり、中納言も立ち出でず、籠もりけり、

宰相の君は彼の夜より、物思ひ愈よ堪へ難く、斯くては世にあらん心地もせず、左衛門が許へ日に〳〵御文持ち參り給ふに、左衛門よりは『いと夢のやうなることの後、そのまゝにいみじく思し入らせ給ひて御心地例ならず物し給へば、殿の隙なく添ひ在はしてかひなきまでも、そこの文を引き出でぬ』由を云ひ越しけり、宰相の君は最もとは思へど、免角に彼の君のことばかり心に想ひて、悩つかしく、思ひ絶つべうもあらねば、如何にもして盜すみ出だして隱しまつらんとは、思へど露の言葉も交はさいるに、こも無益なることなり、左りとて外にせんやうもなし、定めて姫の我を情なきものと思ぼ給ふらんなど、思ひ

つゞけて涙も留まらず、[illegible]

姫が例ならぬ心地に、中納言暫らくは內裏へも參らざりしが、斯くてあるべきにもあらねば、頓かて參ゐりぬ、尙侍の女房など、珍らしがりて日頃の物語などする序でに、宰相の君、は此の頃音もなきこそ不思議に侍べれといふ、側への女房辨の君といへるが、宰相中將は近頃腦やみ給ふことあり夫れが爲めに音づれざるにや、と云へば、日頃はうるさきまで音づるゝ人のこの日頃音なきは實に宜べなりけりと、側への女房は笑らひげり、

此の事を聞きける中納言は打ち驚きて、さらば見舞はんとて、內裏より罷り出で給ふ道にて立ち寄りけり、中納言は入りて宰相に對面し、日頃は例ならぬ病者にかゝりて閉ぢ籠りけるが、今日內裏に參ゐりて君の腦ませ給ふ由を聞き、直ちに馳せ參じたる也、見れば御面色もたゞならず、頓みに痩せ給ひけり如何なる心の亂れぞやと、打ちほゝ笑みて問ひ給ふに、宰相は胸に釘打たるゝ心地して、面も自然に赤らみけり、扨て中納言も歸へり給ひぬ、[illegible]

宰相の君は、夕暮のたゞ〳〵しき霞の間より、香ひこぼれたる櫻の花も、匂ほひ押さるゝ

までめでたき中納言の姿をつくづくと見送りつかゝる人に朝夕なれて、居給へば、姫君の吾につらきも道理かなと、思ひつゞけく涙ぐまれ給ふ、

左衛門は心弱く語らはれて、中納言例の内裏の御宿直なる折々夢のやうに引き入れ奉つるを、姫は其のたび涙に暮れて、露中納言に聞こえては、生き永からふべくもあらずと泣きまどふ、左れど中納言は人目ばかり情あるさまにて、よそ〳〵しかりけれど、宰相は死ぬばかりも思ひ入れゝば、心の中には志深かき人とぞ思ひける、此の事もし漏れ聞こえたらんには、恐ろしう耻かしなど、姫の心は千々に碎けてあはれなり、

斯くて思ひ明し暮らすほどに、姫君は宰相の胤を宿して、只ならぬ身とはなりけり父の大臣母上などは、姫が懐姙の由を聞き、正さしく、中納言の子なりと思へば喜ぶこと限りなく、あはれ中納言の御顔に似たる人さへ出で來なば、我が家の面目之れに過ぎじと、喜こび勇みて、御祈禱などせさせ給ふ、姫は心の中物なげかはしく消えも入りたき思ひにて、若し此の事中納言聞き給はゞ、如何に思ぼさんなど心苦しきこと限ぎりなし、

中納言内裏より還へり給はゞ、姫君懐姙の由告げ參らせよと、父君の委細を知らねば女

房などに命じけり、扨て中納言は歸へり來りぬ、中務の乳母、この由大臣の命によりて、中納言に語りぬ、中納言は思ひがけなき姫が懐姙の話しを聞き、胸つぶれて淺ましと、御顔の色さと赤かみたり、姫君はいとわびしく汗も涙も一つにて引き被づきて臥し給ふ、中納言も例のやうに臥し給へども、心の中にいろ〳〵の事思ひつゞけては寢られ給はず、世に似ぬ不具の己のが身は、早く世を逃がれて山林に入るべかりけるに、生ま中世に立ちて、かゝる心苦るしきにも出で逢ふなり、一生は一人にてはあらんと思ひしを、妻持ちたることの今更ら口悔しかりけり、扨ても姫と密通したるもの誰れなるらんなど、思ひ廻はせば露まどろまず夜を思ひ明しに明しつ。

斯くて斯の秘密は他人の知るべきにあらねば、況して大殿の耳にも入れず、中納言は一人心の中に憂悶したりき、かゝれば月頃は、深く契ぎりて起き臥しもなつかしく、内裏の御宿直の夜などにも、姫のこと思ひつゞけけるが、此の事ありてより以來は、心の中は何となく隔りたる心地して、むつび給はざりけり、姫も亦耻しく悲なしとのみ思ひ屈して、今までありつる程にもむつび給はねば、忍び男とは實の契り仕給へば、吾よりは心を深かく入れ

けるなるべしと、中納言の思ひ取るも道理なり、既に斯くの如くなれば、中納言は外出がちにて只佛の行なひにのみ心を入るゝやうになりぬ、

中納言近が頃は稱進がちに、夜離がちになりければ、父の殿母の上は如何ならんと歎き給ふを聞くにつけ姫君は身を八ツ裂きにせらるゝ思ひして、いかで身を無きものにせばやなどおぼし給ふ宰相の中將姫が有り樣を聞きていとゞあはれに思ひ給ふ、

扨ても中納言はかゝることより、只管世を味氣なく思ひ、塵の浮き世も見えぬ山路を尋ねまほしき心切きりにて、世を遁がればやと思ひけり、然るに此の頃吉野山に宮と聞こゆる人在はしけり、今其の來歷を尋ぬるに、此の宮は先帝の三の御子に在はして、萬の事に秀いで給ひ、陰陽天文夢人相の道にまで達せし御方なりけり、昔しは遊學生とて、十二年に一度づゝ然るべき人を遣はして唐土の文物を習はしけるが、世は末世となるに從がひ、彼の土に渡らんといふ人も無くなりにければ、此の三の御子(即ち吉野宮)は金枝玉葉の御身をもて自づから渡らんと切に乞ひ申して唐土に渡り給へり、此の皇子才智衆に勝ぐれさせ給ひにければ、唐土の國人大に驚き貴とみて、其の國の一の大臣、己れが一人女の婿となし、程なく女二人を生みて其の母遂になくなりぬ、父の大臣も悲しみに病みつき相次いで去りぬ、時の大臣公卿等も亦此の皇子を婿にせんと欲する心しきりなりき、左れど皇子は再び妻を見るべき心を持たねば、彼の大臣公卿等は、妬ましく思ひ、到底己れがものにあらざれば、寧ろ殺さんと計かるものさへあるに至れば皇子は惜しからぬ命なれど、知らぬ他鄕に非命の死を遂げんより、故國に歸へるに如かずと思案し、遂に逃げ歸へりぬ、

斯くて皇子は難なく日本に逃がれ歸へりたれど、唐人の腹に宿ぜし子供など、人に言はれんは後ろめたしと、此の姫君たちを深かく隱くして養ひけり、然るに此の皇子謀叛の企てありとの讒誣を被むり遠流にもなされ給はんとせるを、やう〳〵ゆるされて、髮を削づり吉野の麓に庵を結び、二人の姫達を具して、人にも見え知らで埋もれ給ふ、

扨ても中納言は、世を味氣なく思ひなし、花紅葉につけても、人には知らで隱くれ入るべき、谷の隈峯の上を尋づね給ふに、彼の吉野の宮の上の事を委しく語り聞かするものありければ、中納言大に喜こび世を捨てんにはこれ屈强の所なり、とて、彼の語れる人につき、

何が故に此の宮の消息を詳はしく知りたるにぞ問はせ給へば、さん候ふ伯父なる人、彼の宮の弟子にして夜晝御あたりも離れで仕うまつり候ふが、時々は自づからも參ゐり候ふなりと申す、中納言は渡りに舟を得たる心地して、其の人をして伯父なる人に語らしめ、宮の意見を伺はせけり、彼の人伯父の許に至りて仔細を語るに、宮は世を忍び給ふなれば、凡べて人を謝絶じ給ふ、左れど某が甥を使にて賜はせたると申せば、受け引かざることも無からん、とて此の由宮に申せば然ばなり螢耀に暮らさせ給ふ中納言殿の、如何におぼしてか、深き山路を思ぼし立てけん、立ち寄らせ給へと告げよと、御心に入りたる氣色なり、中納言は思ひかなふて心嬉れしく、七八日ばかり山寺に籠るべき由に言ひ紛らはし、伴をも多くは見せずに出で給ふ、

今までなりせば、姫君(妻君)と三日ばかりの隔たりにも、哀れに懐つかしく打ち語らひ、億からぬ御中なりしが、懐姙のことありてよりは、左る事はなくて、打ち出で給ふ、御供もには乳母と近臣四五人及び吉野の物語りせし人とのみ、極めて靜づかに立ち出でけり、扨ても中納言は吉野の宮にいたりて御物語りやう〳〵解けゆくまゝに、宮は昔よりの來歴話

しなどし始めつ、其の夜はくさ〳〵の物語りに夜を明かしぬ、

翌日より世にも傳へざる珍づらしき書物など出だして、試めし給ふに此の中納言の才氣あるに、珍らしき人かなと舌を捲きけり、題出して文を作らせ見るに、名文立ろになりて、古人も及ばぬやうなりければ、宮は驚きて變化にやあらんと疑ふ程なりき、

中納言は斯くてあること數日にして、又京へ歸へり給ひまづ左大臣の殿へ參ゐるに、二三日のほどとこそ思ひしに、日頃見え給はねば、何處に在はしけるぞ、私かに案じ參ゐらせつるなりとて、諸共に食事などし給ふ、左大臣の殿へは四五日と云ひ置きて、十餘日も音づれせざれば、怪やしき事に思ひなげきて食事も碌々すゝめ給はず、姫君(中納言の妻)は之を見るにつけても、元の起りは吾れゆゑに斯くも人々に物を思はすと、いとゞ悲しくつらく、心細そげなる有りさまなり、左れど宰相の中將は、中納言の御留守こそ、願ふても無き幸ひと、夜な〳〵通よひ給ふに、姫は尙ほ更ら心亂れてあるにもあられぬ心地なり、

扨ても月日は敢果なく過ぎて、姫君御産の時も近づきけり、不斷の御讀經、修法なんど騒

ぎ立てけるに、頓がて女を平産し給へり、父の大臣喜ぶこと限ぎりなく、御産屋の儀式にも、心を添へてなし給ふ、然るに生れぬる兒の御姿は彼の宰相の宮の貌にいたく似たれば、中納言は見て胸先つぶれ、姫の産後に臥し給ふ所にいたり、もの受け給はらんと呼はれば、常の時だに耻づかしき限りなるに況して之れは心に深かく思ふ所あり、中納言は打ちほゝゑみて、

この世には人のかたみのおもかげを我身にそへてあはれとや見ん

姫は悲しさと耻づかしに包まれて苦しう消えまほしく覺えけるぞ道理なる、左れど余所目には睦まじき夫婦のことゝのみ思へば、誰れとてこの事知らぬなりけり、

七日の夜大將殿の御産所にて、上達部殿上人、殘りなく參ありつどひたるに、宮の宰相の中納言は心の中にて扨ては必定密夫の今宵忍び入りたるなんめり、我が無き閑も多かるに、今宵のやうに人騷はがしき折り來たりて、人目にもかゝらば、吾を初め姫の爲にも宜しからず、世の面目もあるものを、など思ひめぐらしていとゞ心を苦しめけり、

み、病と稱して參會せず、竊かに左衞門が局に在はしてかばかりの契り思ひ知らぬにはあらじ、今宵は是非に逢はして呉れよと、責め給へば左衞門も辭するに由なく、姫君の御方に至り見るに、人々はみな殿の方に至りて一人も添い居らねば、宮の宰相を引き入れんには、屈强の時節なりと思ひ、燈火を薄暗くして、彼の宰相を入れ奉つる姫君はいとゞ折り

わるしと思ひ給へど、あながちなる契の、今は遁がるべくもあらず、宰相の言の葉けしきもなつかしく哀れ深かければ、岩木ならぬ身の、などて情れなく持てなすべけん、哀れに打ち泣きて立ち別かるべき氣色もなかりき、殿の方には今宵酒宴の最中に、良夫中納言拍子とりて、催馬樂歌ふ聲をもしろう洩れ聞こゆれば、かばかり優に勝ぐれて在はしける人を良夫に持ちながら、吾は何とて此の宰相に通じけんなど、心の中には思ひ亂れつゝ、いとゞ迷ひに迷ひける、

中納言は衣着かへんとて、姫の御方に忍び入り給へるに、中には既に人あるけはひして、物音聞きつけ驚きまどへる有樣なり、怪やしと思ひて差し覗ぞくに、今しがた驚き惑ひて人の逃げたる跡分明に、扇疊紙など落ち散りあり、中納言は立ち寄りて、姫が枕邊に差し寄りつ、彼の扇を取り上げて、仔細に見給ふに、赤紙に雪竹を書きたる塗骨の扇なりけり、

事情既に斯くの如くなれば、宰相中將は、中納言の北の方と、忍ぶ戀路の、逢ふこと難きに、いと〻心を亂だしけるが、例の好色かくて止まず、宜耀殿の尙侍（實は男にて中納言の兄）は限りなく美くしと聞きければ、宰相の君（女房の名宰相中將と混ずべからず）を密かに語らひ、如何なる紛ぎれにかありけん、御物忌かたうて、梨壺にも上ぼり給はぬ夜、密かに彼の局に忍び入りけり、尙侍はいと淺ましく覺ぼえて、泣く〳〵恨み詫び明かしぬ左れど宰相中將は夜も明けぬれど歸へり給はず、尙侍も困じ果てけれど、今更らせんやうもなく、堅き御物忌みに事寄せて、帳の帷子引き下ろし、人など入れずに居たりけり、

宰相中將は音に聞きつる尙侍は如何なる、御姿やらんと見給ふに、御顏は中納言の今少こし艶に香り澄みたる氣色添ひて、心にくゝなまめきたり、宰相中將は心も空に思ひあくがれ給へども更らに靡びくべくもあらざりき、其の日も暮れ、其の夜も亦明けぬべきに、歸り給はず、尙侍の君は、物忌み果てぬれば、殿も參ゐり、中納言も在はさんものを、斯くて在まさば、首尾わるし、又も逢ふ瀨はあらんにと、言ひ給ふ、物越し格向は、たゞ中納言そのまゝなり、宰相中將は、

のちにとて何をたのみてちぎりてか、斯くては出でん山の端の月、

といふに尙侍、

志賀の浦とたのむることになぐさみて、後もあふみと思はましやは、

と聞ゆれば、宰相中將は後の逢ふ瀨を契ぎりて立ち出でけり、扨ても其の後宰相中將は、矢の如く御文を遣はすに、絶えて返事もなかりければ、扨てはうま〳〵後に逢はんと謀かられけるにかと、今更ら妬たく悲しく口惜しく、此の頃は又もや物思ひに心亂れて籠もり居けるに、中納言の參ゐり給ふ、中將つら〳〵中納言を見るに、扨ても兄弟とはいへ、斯くも尙侍によく似給へるものかなと、今更らのやうに胸つぶれて、思はん所も忍ばれず、涙をこぼして、果敢なきことゞも語らひけり、

宰相中將尙侍に欺ましすかされて後は兎角に心亂れて氣も浮き立たず、爭で似通ひたる中納言を見て、なりとも心を慰ぐさめばやと思ひたち、いと暑き日に中納言の對に至りたり、此の頃の暑さいと堪へがたかりければ、中納言は衣など解き散らして、打ち解け居たりける（此の際宰相中納言の女なる由を發見したり）

中納言は宰相の入り來れるを見て、いたく驚きたるさまにて、こは無禮仕りぬと、いふに此の暑つさに苦しきは誰れも也、其の儘に居給へ、吾れも打ち解けなんとて、裝束解きければ、然らばとて其の儘に語らひけり、扨ても中納言は『紅』の生絹の袴に、白き生絹の單衣きて、打ち解けたる形の暑つさにいと〻色はにほひ勝さりて、常よりもはな〳〵とめでたきをはじめ、手つき身なり袖の腰ひきゆはれてけざやかにすぎたる腰つき色の白さなど雪をまろかしたらんやうに、白うめでたくをかしげなるさまの似る物なく美くしかりけり、

宰相中將は中納言の美しき姿にほれ〳〵として、心遽かに迷ひければ、亂れ寄りて臥したるに、中納言は暑くろしきに堪へ兼ねて、五月蠅がれども聞き入れず、其の中にも日は既に、暮れぬるに、宰相は更らに引き別るべき心地もせず、中納言をつと捕へて、わりなう亂るゝを、こは如何にと驚きたれど、もとより中納言は外目こそ男なれ、根は女性のことなれば、取りこめられて詮方なく、心弱はくも淺ましく悲しきことなど思ひつゞけたり、夜は既に明け放なれたれど、宰相は起き出づべき氣色もなし、今は其の無禮を責め呉れん

と思へども、我が身の女なる由を既に知られたれば、心を荒たつるわけにも行かず、吾が身の世づかぬ有樣（女性なること）をつゆ人になる語りそと賴のみ聞こえて、穩やかに持てなしけり、

其の後宰相の中將よりは文など持て來つ中納言はいとうるさけれど、荒だてなば我が身の秘密（女なること）を發ばかれんと疵持つ足のいと弱はく、そこ〳〵にあしらひけるに、宰相中將は尙ほ飽かぬ心地に中納言を音なへば中納言はこの人に見えんこと、今更ら恥づかしければ、事にかこつけ外にも立ち出で給はず、中將は日々に空しく立ち歸へり、恨らみつ佗びつ、暮らし居けるが、辛うじて中納言內裏へ參り給ふと聞きつけ、中將は心も打ちさわぎつゝ、內裏に至りて見給ふに、年頃戀ひ慕へども未だ逢はざらん戀人を見る心地して、心惑ひのする中に、中納言も顏見合せて、顏は自づから赤らみ今までの如く馴れ寄るべくもあらず他所〳〵しくも持てなすけはひなり、

扨ても中納言は御前ま近かく召し寄され、けるが帝には中納言の容姿の香ばやかなるを御覽じて、實にこれぞ尙侍に似たりと聞く、今少こし髮長がく假粧したらんには、天晴れ天

下の美姫となるべしと、わりなき御心地せられけり、中納言は先きに既に宰相中將にて懲りたれば、御門の御景色のいと馴れ〳〵しきに、又もや近づかれて、身のありさまを見顯はされんかと心に懼れをなしければ、畏こみてのみ居たりき、

御門は中納言の容姿を、飽かず見まほしくて、容易には御前を去らしめざるに、辛相中將は獨り氣をもみ、御門のもし吾が如く彼の本性を見留めたらんには、ゆゝしき大事なりと、胸のみつぶれて、案じわづらひ居たりけるが、辛うじて御前を立ち出でけるに、待ちうけて例の休息所に連れ行けり、今宵は諸共に宿直にて內裏に泊まりぬ、

宵の程は殿上人など多く宿直所に集つまり來りて物騷がしければ、靜めやかに物語りも出來ず、扨て人々も既に寢にとて去りたれば、宰相中將は例の如く、此の程のこと云ひ出でゝ、恨らみ泣き給ふさまいと哀れなり、中納言も哀れと思はぬにはあらねども、身の秘密も顯はれぬべければ、人目見苦るしからぬ程にと契ぎる、中將はいと心苦しく覺えけり、

斯くて宰相中將は、影の如く中納言に立ち添ひて離るゝべくもあらねば、中納言は堅くもてなし大かたは懷かしうち侍らひ、時々は北の方(宰相の通ぜし姫君)のことをほのめか

し、彼方へ氣を移つらして自づからは逃がれ給はんとせり、

中納言例の月毎の汚がれあるより、六條あたりなる乳母の家に隱くるゝことあり、宰相は尋ね來りて垣根の外より中納言の御有り樣を見けるに、『打ち志ぐれつゝ、曇りくらしたる夕の空の、氣色あはれなるを、簾まき上げて、紅に薄色の唐綾重ねて詠がめ出でたる夕映、常よりも隱なくはれ〳〵と見えて、頬杖つきたる腕つきなど、物をみがきたるやうてに涙を押しのごいて』

志ぐれする夕の空のけしきにも劣らずぬるゝ我たもとかな、

と口ずさみたる姿は、繪にも及ばぬけしきなれば、宰相は心まどびて止まらず、即ち、

かきくらし涙志ぐれにそぼちつゝ、尋ねざりせばあい見ましやは、

と歌ふ思ひ掛けなきに中納言は打ち驚きて、

身ひとつに志ぐるゝ空とながめつゝまつとはいはで袖ぞぬれぬる、

扨ても宰相は、中納言の隱れ家に尋ね來りて、つく〳〵見るに、年頃は男の姿にて見奉るに、今は忍びて女のさまに籠り居給へば美くしき姫君そのまゝにて、宰相中將の心にはか

ゝる姫君を我物に籠め置きて花の眺めにせまほしなど思ひけるも理りなりけり、

斯くて宰相中將と中納言はいつしかわりなくなりければ、宰相は年ごろの思ひも遂げ嬉しきこと限りなく、千代まで命を延ぶる心地して、起き臥し遊び戯れけり、其の後十月ごろより中納言は音無の里といふ所に籠りて心地例ならず、これ正しく懐姙の兆と知られけり、此の頃又中納言の妻(姫君)も同じく懐姙と聞こえけり、

宰相中將は如何にしけん、この頃は兎角打ち沈づみがちにて、顔色常ならず面疲せ嘔吐などし給ふを、中納言は心の中、斯くの如きは懐姙せるものの病ひにこそあれ、と思ふにつけても己のが懐姙のことを思ひ合はするに、云はん方なく心憂さ限りなく、左りとて此の事人に告ぐべきものにもあらず、誰れとて相談すべきものだになし、責めて彼の人(宰相)になりとも談合せばやと、六條あたりに宰相と忍び合ひて、此の由を告げければ、宰相中將も今更ら淺ましく驚かれぬされどいと淺からざりける契りなれば、此かる上には中納言をも女の風に變へしめて長く契ぎりを變へじなど思ひ廻ぐらしけり、然れば中納言にも此の由語り聞かせて、男のさまをやめて、女になり給へかしと勸むるに、中納言、初めより

我が身の男ならずして、男に生長せることを思ひ知りたる後は、此の世ならず、いかで山奥にも籠らばやと思ひけるが、父上母上の歎き給はんことのみに、心引かれて怪やしきありさまを、人に御覽ぜられぬる事、心憂の限ぎりやと泣き給ふ、宰相も哀れに思ふて泣く〳〵さま變へて籠り居給へと切りにすゝめしかば、中納言も道理と思ふに、扨ても馴れたる世の思ひ出のみぞ多かりける、

中納言は宰相と語らひ初めてより、今はわりなき中となりけるが、宰相中將とて、あまり上等なる人柄にもあらず、斯ばかりの人に身を任かせて、契ぎりけんこと、いと飽き足らぬ心地しけり、殊に此の中將は浮き草の浮きたる心多きのみか、世に頼もしげなきことのみあり、今こそは深く語らひ交はせども、何時しか外に增す花出來て、つらき心の見えんときは、いかばかりかは物悔やしう、人笑はれなるべきと、思ひつゞくるに、心は糸より細そ〳〵として、世に永がらへんとは思はず、頓かて散りゆく身なりなど、思ひつゞけて親達を見、又は内裏に參り出でしも、今一月二月世にはあるべきぞと思へば、物悲しう心細そきこと限りなし、

十二月晦日がた、中納言は父の大殿に参ゐり給ふ、大殿は中納言を一夜見ぬだに、いたく心許なく思ぼし給ふなれば、中納言を迎へ喜びて見給ふに、盛りに香ひ深かりける中納言の花の姿は、今は全く痩せ損じたるに、いたく驚きて、御心地苦るしきやと問はせ給ふ、中納言は左あらぬ躰にて苦しと思ふ所あらねども、久しう侍べりし名殘りにやと何氣なく答へ給ふに、大殿は深く心配して急ぎ御修法、祭はらへなどし給ふに、かくも深き御心なるに、果敢なく消え失せば、如何に嘆き給はんなど思へば、實に涙のみぞはふり落つる。

其の年も暮れて正月ともなりければ、中納言は死に近づくの心地して、何時まであるべき身ぞと思へば、正月には御車、下簾、搨などを新調し、隨身までも色を整のへ裝束を賜はせけり、扨て自づからは綺羅を飾ざりて輝やくばかりに打ち立ちつゝ、先づ殿にまゐりて殿を拜し、内裏に至り給へるに見る人ごとに目覺むる心地せざるは無し、かばかりの有り樣、世に持て囃やされたるものを、今更らいかで身を變へ姿を變じ女とならんやと、胸つぶるゝも道理なり、

其の年の三月朔日ごろ、南殿の櫻花常よりは、盛りなりければ、御覽せばやとて觀櫻の宴

を開らき給へることあり、世にある諸博士を召し集どへて、題賜はり文を作らしめけるに、中納言の作り出で給へるものは、この世は更らにも云はず、唐土にもかゝる類なかりけりと、御門の御覺え殊にめでたく、御前に召されて舞蹈し給ふ、容貌優ぐれて花の薫ひも消おさるべう見えたり、暮れゆくまゝに御遊始まりければ中納言は、頓がて世を遁がるゝ身の、これや此の世の遊び收めぞと思ひにければ、笛取り出でゝ日頃は人にも聞かしめざりける秘曲をさへ、思ふ存分吹きすさぶに、響きは雲井を分けてのぼり、其の面白きこと云はん方なし、御門御感斜ならず、即ち左大將の宣旨を下ださせ給ふ、宰相中將も同時に權中納言とななられけり、(以下中納言を大將と呼び、宰相中將を權中納言と呼ぶ讀者混ずる勿れ)

扨ても大將は再び彼の吉野の宮に參ゐり給ひけるに、姫宮たちの御うへまで、喜こび迎へて、かばかり遁けき道のほどをも、ふりは一つゝ參ゐり通ひ給ふさま、いと心深きを、さばかり若かく、花やかにものし給へる人の、有り難かりける心の御さまぞと、淺さからず思ひ給ひて、萬づ打ち語らひ給ふ、右大將は泣く〳〵も、『かゝる容貌を替へても必ず之を

つひの住家と打ち頼のみ、參ゐり侍らんとなんするを、其の程おぼし忘るなよ、今三月ばかりなん、元參ゐり音づれ聞えさすまじく侍べる限ぎりにつきぬる命ならばこれこそは限りに侍べられぬ、もし思ひの外に永がら〳〵侍べらば、必ずかゝる容貌ならで、今少こし疎からず、思ほされぬべきさま(即ち尼となりて)にて參ゐり侍べりなん』など語り給ふに、皆諸共に打ち泣きぬ、大將は歸りても、日に〳〵父上母上の御前に候ひて居給ふを、嬉れしと覺ぼして、見奉り給ふごとに、大將悲しさは先づ胸を塞ぎて、涙は隙なくこぼれけり、心の中や如何なりけん、

其の後大將は又宜耀殿に入り給ひて、尙侍を訪ひ給ふに、折りしも御前に人候はず、大將よき折りぞとて語らせ給ふ、去年の秋つかたより、みだり心地例ならず(懷妊したれば)物心ぼそく思ふなり、これや世の限ぎりならんと思へば、數も少なき兄弟の御身、如何に心許なく思ぼされんとて、涙を浮かめて語りける 尙侍も同じく哀れなることのみ云ひ出で〻、諸共に泣き給ふ、尙侍のつく〳〵と大將の御有樣を見奉つるに、花々と香ひ限りなき容貌のいたく面痩せたるしも、いとゝ美くしうらうたけなるに、面むきこそ雄々しくも見

ゆれ、かばかり思ひ屈しては、いとゝ哀れにのみ見ゆるを、扨ても兄弟共に不幸のものかな、我れぞかくてあるべきと、互みに見交はし給ひて、同じことのみ繰り返へしつゝ、共もに涕に伏し沈づむ、大將はこれぞ暫しの別かれかと、思へば胸は塞さがりて、離れがたなく暮るゝまで、候ひて、頓がて別かれぬ、尙侍は例ならぬ、大將の御氣色やと、心に思ひつゝ見送くりぬ、御供の人、御前などに、今宵は宜曜殿に候ふべきぞ、早朝車人々も參ゐるべしと皆々を歸へし遣りたり、

中納言(宰相)は、右大將を迎へんとて、いつしか網代車にやつれ乘りて、北の陣まで在はしたりければ、今はとて右大將は、忍び出づる御心地、夢のやうに思ぼされながら、車に乘り給ひて、宇治へおはする道すがら胸の有耶無耶に心も魂も亂れゆくめり、折りから『月澄み上ぼりて、道のほどもをかしきに、木幡のほど何のあやめも知るまじき山樵のあたりを打ち解け、幼なくより手馴れ給ひし横笛ばかりぞ、吹きわかれん悲しさ、いづれの思ひにも劣らぬ心地して、身にそへ給ひけるを、物の心細きまゝに、吹きすまし給へる音、更ちにいふ限りなし、』

宇治に至りける翌朝中納言は年頃の思ひかなひて、大將を女の姿に變へしめんとて、頭洗はせ髪も搔き垂れて、眉ぬき、鐵醬つけなど、女びさせたれば、いとど香ひ勝さりて美くしきことゝ云はん方なし、大將はかゝる姿に變へしことゝ、淺さましと思ふて、悲しがるを、中納言は慰ぐさめて、これこそ世の常とはいふべけれ、年頃の男の御姿は、あるべきことならば、斯くて女の姿にて在はさんことは誠といふべしと、さま〳〵に云ひこしらゆれば、大將も理にせめられて、言葉もなかりき、女の姿凡べて整ひけるが、こゝに一つの難義といふは、髪の短かくて見苦るしきことなり、幸い吉野の宮より賜はりし藥の中に、夜に三寸髪必ず生ぶといふ靈藥あり、即ち日毎に髪を洗て此の藥をつけゝり、

扨でも京にては、斯かることありけりとは露知らず、翌朝命の如く、御車なども迎ひに參ありたるに大將は宜耀殿には居給はず、聞けば夜更けて出で給ひぬといふに、左らば例の月毎にこもり給ふなる六條乳母の家ならんと尋ねけるに、之れにもあらず、父の大殿はかくと聞き給ひて、いたく嘆き給ひける、去年の冬頃より、怪やしきことゝもたび〳〵ありけるに、何とで之れに意を留めざりけんと、今更ら悔やしく思へども既にせんなし、院の宮

も大將の行く衛知れざるを、歎げかせ給ひ、山々寺々に、修法讀經をはじめ、祈禱をなして、騷ぎ給ふ、右大臣は心の中に、姫と中らひ悪しきが故にかくはなり給へるならんなど思ふに、消え入るやうに覺ぼえて悲しきこと限りなし、

かゝれば世の取り沙汰もまち〳〵なりけるが中にも、權中納言の女君に密通し給ひしを、大將の厭はせ給ふて隱くれける也、生まれ給へる子も、權中納言の子なりなど、噂さするものさへあるに、父の大殿はこを聞き給ひ、實に左もあらん、世づかぬ有り樣（其の實女なれば）なれば、いかで交はらんとて隱くれ給へるならんかし、と悲しく哀れに泣きこがれ給ふ、

かゝる處に姫君の父右大臣殿來たりにければ、父の大殿中納言と密通の件を委しくかたり、世の取り沙汰或は實ならんかしと語るに、右大臣も驚きて、歸りて此の身にもしか〳〵の由を語たりけるに、北の方も淺さましとも愚かなりと、怒かり給ひぬ、然るに落書ありて右大臣の見給ふ所に落ちありたるを、取り上げて見給ふに、『大將殿は權中納言の事に倦むして失せ給へるなり、子の生まれ給へる姫君もその人のなりける、我御子とおぼして、い

みじく喜び給へりしほどに、生れ給へりし御さま、違ふ所なくものし給ふに、見あやめ奉り給へりけるに、七日の夜入り臥し行ひたりけるを、見つけ給へりし』などの文言ありけるに、彼の姫君を見奉り給ふに、違ふ所なく能く似たれば、夫れなりけりと、云はん方なく大に怒かり、遂に娘を勘當したり、

宇治の方にては、大將女の姿に變へしより既に二十日にもなり餘りぬれば、父上母上の如何におぼさんなど思ひつゞけて、いとゞ心苦るしさを增し居れり、藥の驗いちゞるしく、髪も引き伸ぶるやうに美しく成長し、眉なども刈り拂はせて、女の姿花々と美しう香ひこぼるゝばかりになりぬ、女君勘當の事左衛門より中納言に云ひ遣りければ、中納言も我れゆゑかくなりしは氣の毒なりとて、宇治を出で立ちぬ、道のほどもしづ心なく、大將の面影離れずながら、おはしつきて、左衛門に對面しけるに、左衛門は女君の勘當されじ有り樣をしか〳〵と、涙ながらに語りけり、女君も今此の家に居給へり、早く對面して慰ぐさめ給へとの左衛門が勸めに、中納言は入りて見給ふに、ほのかなる火影にはいと哀れげなるさまにて、髪はいと長がく打ち添へ、腹はいとふくらかにて、打ち臥し給へり、中納言

見るに目もくれ心も暗らみ、そと添ひ臥して腕を捕らへて驚かせば、女君は打ち見上げて息も絶えつゝ、涙を流がし給ふ中納言も涙にくれ、命だにあらば勘當ゆるされん時もあるべし、此の儘失せて、懷姙のまゝ死したらんには、罪いと深かし、心を慥かに持ち給へなど慰さめ透かして、其の夜はこゝに添ひ臥しけるが、明けぬるも別かれ出で給ふべき心地とてはせず、宇治の君(大將)へは此の由文をもて云ひ遣りつ、己れは五六日添ひ居て介抱し給ふ、

斯くて中納言は五六日は左衛門の家なる女君の介抱して、頓がて又宇治の女君の許に立ち歸へり見ればこれも同じく、腹ふくれて苦しげに、思ひ亂れ臥し給へるさまは、暫時の隔たりを恨らむらん心の中は道理に覺えて、哀れなれば又もやこゝに、乾きもあへぬ袖をぬらす。

斯くとも知らぬ大殿には、大將の忍びありきし給ひしぞと思ひければ、今日やく〳〵と待ち給ふに、既に二月の餘を過ぐるに、何の便りも無かりければ、假令世を背むくとはいへ、尋ね求むれば分からぬことよもあらじ、今まで求めつゝ、其の行く衛知れざるは、必ず遁

世せるにもあらず、中納言は彼れの妻と密通しければ彼れ或は竊かに大將を殺害したるにやあらんなど、疑ひけり、

かゝりける程に尙侍は、大殿に罷かり出で、母上に對面して右大將の世を遁がれんとし給ひし前夜のことなど、語り出で斯くと知りたれば、其の夜は出ださざりしものを、返へすがへすも殘念なり、此の上は命にかけても尋ね求むべし、男の姿にて此の君を尋ね見んに、いかなるさまにても尋ね出でたらば、諸共にかへり來ん、尋づね得ずなりなば、頓がて我身も容貌をかへて、深き山に跡を絶たんといふに、母上とは淺ましきことかな、假令男とは云へ、今までは女に育ち給へる柔和の御身にて、何處を何處と尋ね給ふべきぞと、泣き給ふ、尙侍、必ず心配し給ふな、暫時は我身內裏に居ずとも、知るものあらじ、唯在り顏におはしませ、父上にも知らし給ふな、問はせ給ふ折あらば、心地例ならずと申させ給へ、ゆめ〳〵人に悟られ給ふなと、流石は男だけに決心堅かりき、

斯くて尙侍は愈よ、妹君搜索の事に決して、狩衣指貫を着け給ひ、長き御髮をむざと打ち截り、凡べて男の姿となり給ひぬ容貌風姿右大將と少しも違ふ所なし、男女姿を變へ給ひ

居し時だに顏は瓜二つに見え給ひけるを今は同じ男のさまなれば、恰も其の人の歸りたらんが如くに思はれぬ、六月ばかりの夜深き月に、御乳母のかぎり三人其の他少し許りの人を召し具し、立ち出で給ふ、今までは母屋の外までだに出でしことなき尙侍の、何處を宛となく立ち出で給ふことのいと哀れに淺ましくて、人々涕に見送りけり、

日盛りのいと暑つくなりける頃、宇治のあたりに着き給ふ、『そのわたりに大なる木の影の川面近きに立ちよりて涼み給ふに、川近くていと面白しき所のあるを見るも知らず、をかしく覺ぼして、』尋ね入りけるに、彼方の方に經の聲ばかりして、殊に人も見えず、尙侍は小柴垣の許に立ち寄り窺へば、中には人あり、誰人なるらんとよく〳〵見るに、美くしき人なり、見しやうなる人かなと、尙ほ克く〳〵見れば、大將なりけり、如何にして斯くはおはするぞと、問はんとしけれど暫時は忍びて居たりけり、內にも怪やしく思ひけん、簾を打ち下ろして、見出し給へるに、清らなる男の外面に立ち居るを見れば、吾が姿の昔思はるゝに、扨ては尙侍かと思へども、遽かに姿の變はれるに、打ち惑ひ居たり、尙侍の君の從れ給へる、女房共は內なる人を一目見て、こは尋ねまゐらする大將なりと、云ひあへ

るに、内なる人は奥に入りぬ、尙侍はしばし此處にて休すらへども、内より入も出で來ねば問ふべきよすがも無く、こは誰が住む所ぞと、立ち出でゝ問はせ給へば式部卿の御領なりと申す、尙侍は『心にかゝる面影は身に添ひぬる心地して、』このあたり過ぎがたく心を迷はせ居給ひける、

扨ても尙侍は更らに、吉野の宮に尋ねおはして『大將殿の御許より參ゐりたる人ありや』と問はせたり、吉野の宮には先きつ頃、大將の失せ給ひし由を聞き居ければ、御使ひの來れるならんと喜こび勇さみつゝ、呼び入れ給へば、唯大將と同じさまに清らなる人の入り來たるに、こは如何にと驚けば、『大將しか〳〵世に失せ給ひて、二月ばかりにあまりぬる、この宮になん時々參ゐり通ひ給ひけり、つひの世のとまりと思しの給ひしと、告ぐる人の侍べりしかば、もし申し置き給へる事や侍べりけんと、承はらまほしくて、その兄弟に侍る人』なりといふに、吉野の宮、扨ては大將の御兄弟にて候ひつるにか、大將とは一昨年の秋の頃より、この世ならず契り給ひて、立ち寄り問はせ給ふことありたれども、この四月朔日に入らせ給ひしまゝ、御影さへ見奉らず、とて更らに手がゝりもなく、大將の昔しありしことゝも語らひて其の儘に歸りぬ、

扨ても宇治には大將懷姙して月も次第に經ちぬれば、今は苦しげにて、中納言片時も側を離れず、己のが身に代へても此の君を、安產せしめばやとぞ思ぼしける、思ひの神佛に屆きけるにや七月朔日いと安らかに光るやうなる男君を生ませ給へり、固より忍びて產ませたることなれば萬づ不自由がちにて、母の君も手づから扱かひ給ふさまいと哀れなり、これが天下晴れての安產ならんには、如何に世に顯はれて、嬉しく面白からんに、今は其の甲斐もなく、萬づ忍びたることとこそ口惜しけれと、思ふにつけても、先だつものは涙なりけり、

吉野の宮にては彼の男君こゝに逗留し、學問などして、妹の音づれを聞かんと待ち居けり、或る日のこと、一人の使者來りて書を吉野の宮に奉つれり、何處よりぞと問はせ給へば、大將の御文なりといふに、扨ては大將の手紙なるかと、此の由彼の男君に告げ奉つり、急ぎ使者を召して、大將は何處におはすぞと問ひけるに、宇治のあたりにお在すとの事なり、更らに宇治は何處のほどぞと問はせ給へば、式部卿の宮の御領なりとぞ答へける、

大將の所在既に分明なりければ男君今は一刻もためらはず、頓がて文認めて送り遣る、六月その日思ひ立ちて都を離れて宇治の方に立ち宿りて侍りしより、この宮に尋ねまうで來て、御消息聞こえんとありしと、聖の宮の給ふを頼むことにて、そのまゝに、この山に跡を絶えて過すさま、いかなるさまにてかおはします、爭でか對面は給はるべき、參りぬべき所にや云々、

使者宇治に返りて此の由を申しければ、女君も今更ら驚き給ひ、扨ては尙侍の君の我れを尋ねんとて姿を變へて世を出で給ひけるかと、初めて事の仔細を知り、夢の心地に泣く〳〵返事を書き給ひ委しくは御目にかゝりて申したければ、此のあたりに來り給はんとき、此の便をもて知らせ給へと云ひ遣りけり、男君即ち宇治に至りて、近きほとりの家にありて消息し給へり、

京の女君は懷姙の月滿ちて今は苦しげに御產の御氣色なりと、知らせあれば、中納言は即ち京へ登り給ふ、彼の男君は此のほど近きあたりに來りけれど、家人の人に知られずに忍びて兄弟の對面せばやと思ひければ、夜更けて忍び入らんと定め給ふ、其の夜も既に更

けて人は皆寢靜まる頃となりければ、男君は乳母をしるべに、女君の許に至り見るに、月いと明きかげに、髮はつや〳〵と間なくかゝりて美くしくなつかしげなるが、泣き居たり、不思議の兄弟再會に兩人暫時は涙に呉れけるが、斯くてあるべきにもあらねば、一別以來の事などを述べ、互み交はりに語りけり、男君は扨ても如何なれば、斯かる所にお在するぞと問ひ給ふに、女君も今は包み隱くすべくもあらずと思ひ、中納言と通じて懷姙となりにしことの仔細を斯く〳〵と語りければ、男君も打ち驚ろき、左らば歸りて殿には如何に申すべきぞと問ふ、女君扨てもその事なり、兎にも角にも永らくべき身ならずと、子を產まん程は思ひしが、今此く生き殘こりては又せんなし、さりとて今更ら又元の身に爲し變ふるべくもあらず、世づかぬ身の今は亡置き所なければ、吉野の山に容貌を變へて、跡を隱くさんと思ふなりと、涙ながらに語り給ふ、

男君聞いて又女君を諫むるやう、斯かるいまはしきことの給ふな、父上も御身の失せるより心を痛めて日夜これのみに腦やませ給へり、御身若し姿を變へて何れへも隱くれ給ふと聞かば、父上母上の如何に嘆げき、如何に悲しみ給ふやらん、先づ忍び父上の殿に渡らせ

給へと、諫むるに女君はいと耻らひて『殿(父上)にかくこそありけれと聞こしめされば、唯世づかざりける身を、もてわづらひたりけるさまを』と云ひ給ふも、彼の男裝なりしときの御振るまひとは打つて變はりて、女の本性顯はれけり、

扨ても二君の父の殿は、大將の行く衛知れざるより、心をいためて、御祈禱の限りをつくして、なしけるに、今宵の夢に、いと尊き清らかなる僧來りて、告ぐることあり『かくな思し歎きそ、この御事どもは、いと無事に明けんあしたりに、その案内聞き給ひてん、昔の世より、さるべき違ひめのありし報に天狗の男は女となし、女をば男のやうになし、御心に絶えず、歎かせつるなり、其の天狗も刼盡きて、佛道に許多の年を經て、多くの御祈禱どもの驗に皆事なほりて、男は男に女は女に皆なり給ひて、思ひのごと榮へ給はんとするに、かくおぼし惑ふも、いさゝかの物の報なり』といふかと思へば夢醒めたり、

あまりに奇異なる夢なりければ、殿は覺めての後、北の方にしか〳〵と見し夢を語るに、北の方も扨ては尙侍の男裝して、妹を尋ねんとて出でたりしは、或は吉の前兆にあらずやとこゝに初めて尙侍の出で給ひしことを語るに、殿も嬉れしく打ち喜こび、左ちば正夢

に相違なしとぞ嬉れしみける、

夜も明けぬれば尙侍は歸り來れり、父上は起き上がりて、見給ふに御大將の姿と少しも違はず、これはとばかり驚きしが、尙侍は右大將と再會の仔細を語り、之より迎へまつらんとて、出で給ひぬ、宇治にては兼ねて約束の如く迎ひ來りにければ、女君(大將)即ち若君をこゝに置きて頓がて殿に參ゐり給ふ、

斯くて右大將の女君は、京に暫ばし留まりて頓がて吉野に在はし給へり、吉野の宮には、即ち姫君達の御方をしつらひて、こゝに住まはせ給へり、左れど右大將は明暮れにも、宇治に殘こし置きける若君のことのみ思ひつゞけて、第一の心掛りとはなりけり、俄かにかゝる女の姿に變はりしも今更ら恥づかしく、姫君たちにも對面せず、つく〳〵と思案に暮れて、打ち臥し給へるさまの哀れさを、兄君(男君)の見給ひて、さま〳〵に慰さめ給へば無心にいわけなき宇治の若君を、見捨てつる心苦しさ忍びかたしとて打ち泣き給ふ、親子の愛情まことや道理せめて哀れなりけり、

去る程に宇治にては、若君の御乳母、明くるまで待てども歸り給はねば怪やしと思ふて尋

ぬるに、何處にお在しけるにや影も見えず、人々呆れまどひて、尋ね覓むる中に、中納言も京より歸り給ひければ、しか〳〵と告げゝるに胸つぶれて驚きまどひ、扨ても如何なる故なりしぞ、日頃如何なる氣色か見え給ひし、古郷より音づれ寄る人のありしや如何にと問ひけれど、乳母はさるべき氣色は知らずと答ふ、中納言も思案につき、扨ては吾が京の君の許に屢々通ひ、都がちに浮かれあるきけるを恨らみ給ふての故にやあらんと、戀しさ勝さりて、御心地もかき亂れけるに、若君の無心にかくとも知らせ給はず、笑ひ給ふ美くしき顏を見るにつけても、思ひの種ならぬはなし、左れば中納言のなげき一方ならず『かばかりの事を夢に見んだに、覺めての名殘ゆゝしかるべし、かたちけわひの云ふ方なく愛敬づき、香ひ滿ちて、憂きもつらきも哀れなるもいと憎からず、心美くしげに打ち言ひなし給ひし戀ひしさの、更に譬へて言はん方なく、胸よりあまる心地して、人のをこがましと、見給はん事もたどられず、見ずりといふらん事もしつべく、泣きてもあまる心地して、』伏し沈つみ給へり、

中納言は尙ほ心も靜づまらず、何れにや書き置きなどやうのものもあらずやと、尋ね求む

るになし、道にて聞けば、いと清らかに美くしき殿の、女君を車に乘せて行き給ふを見たりといふ人あり、こを聞きける中納言はいとまどひて、佗しく明かし暮らしけり、

右大臣の姫君は、いと美くしき姫君を生み給へり、されど御心地はか〳〵しからず臥し給へり、父の殿はいたくなげかせ給ひ佛身に祈りて、我命にかへても、此の姫を助けよと、聲も惜まず泣き惑ふ、姫はやう〳〵物心覺ゆる氣色になりて、聲もかすかに、尼になし給ひてよと、息の下にの給ふに、悲しさ更らに增して、涙にあやもなかりけり、

斯くて吉野に在はす兄弟の二君は、互みに男女の姿を變へつゝ、京に上ぼりて、女君（右大將）を尙侍の局に入れ奉つり男君（尙侍）は御前に伺候したりけり、容貌風姿一つとして異なることなければ各々心違ひなく、此の儘にて仕ふべし、容貌違へば悪しかるべけれど、斯くも相似たる上からは、毫も差し支ゆる所あらず、今は大將にて交はれとの仰せあり、

遂に兄弟元の姿に取りかへられぬ、

中納言は獨り若君を養育して、月日を過ごしけるに、若君は次第に成長し給ひ、美くしげになりけるを見るにつけても、女君（宇治の）の事を思ひ出だし、明暮れに搔き抱きて、思

ぼしかしづきけるものを、今は何處におわすらん、かゝる可愛ゆき子を見ず知らずに打ち過ぎ給ふいぢらしさよと思ひつゞけて嘆げき給へり、然るに世の風説にて、右大將京にありて、再び内裏に仕ふとの事隠くれなければ、扨ては再び世に出で給ひけると覺ぼし、斯くまで女び給ひしものを、如何なれば又昔のさまになり給ひけんと、思ふにつけても、又見まほしく、辛うじて思ひ定めつ、若君具して京へ上ぼる、陳の評議には右大將必ず參あり給はんと思へば、其の折り内裏に出でけるに、案の如く右大將は美々しく參あり給へり、中納言心の中には、大將吾を見て、如何ばかりか驚き給はんと、思ひ居たりしが、右大將は左りげなき有り樣にて、立ち留まり物いふべくもあらぬに、中納言案に相違し、かゝれば愈よ吾を思ひ捨てたるものと覺ぼし、吾は兎も角彼の若君を、可愛ゆく思はざるにやと、歸りても心の中夜もすがら思ひ明かして恨らみけり、

爰に又尚侍(妹君)は春宮に參ありけるに、春宮も以前の尚侍とのみ思ひて、兄弟取りかへたるを知らざりき、其の夜は打ち讃らひて日頃の物語りなどせさせ給ひ、明けぬれば右大將より忍びて春君宮に奉つれとて文あり、春宮いぶかしみながら開らき見れば擬うことなき

尚侍の手跡にて、

見馴れにしその面影を身にそへてあはれ月日を過しけるかな、

とありいと怪しけれど、仰せらるべき方もなければ、唯打ち泣きてお在すなり、扨てもこゝにいと不思議なるは春宮の懐姙し給へることにて、今はやうやく腹もふくらかになり給へる御有り樣なり、宮の宣旨(女房)は之を見て不審に思ひ、さま〳〵に苦心して、懐姙のことの由を知らばやと思ひけり、宣旨はこれ正しく尚侍どそ知りたらめとて、さま〳〵に問ふ今の尚侍は固より妹君なれば、かゝることと知る筈はなけれど、さりとて知らずといふも宮の御爲の悪しかりなんと、心に思案なしつゝも、宣旨に向かひて答ふるやう、自づからも怪しく見奉つらざりしにあらねど、思ひ寄らぬことは、誰れにも告げられず、右大將家出し給ひしと聞きけるに驚きて、里に罷かりたりけるが、頓がて病の爲めに、打ち臥して空しく明し暮しつるも、心にかゝりて候ひしが、右大將の忍びておわし、若しさる事もやと、夢を見けるが、疾く參ありて其の程のこと、伺ひ參あれと申されけるに、て參あれるなりなど兎角に言ひ紛らはし給ふ、宣旨今は何頃の産月に當らせ給ふやと問ふに、尚侍、

左らば十二月とぞ大將の申せしとぞ答へける、

側へに伏し給ひける春宮の、之を聞き給ひ、不思議にも心得ず、日頃宣旨は打ちなげゝと、今に尙侍の參ゐりなばと、思ひけるに、心得ぬことをいふものかな、大將には夢にだに見えつる事なきを、如何なれば斯くはの給ふぞと、心の中に思ひけるも、流石は打ち出で云ふべきならねば、罪を大將に負はせ給ふなりと、思し召しけり、

暮れぬれば大將(元の尙侍)參ゐり給ひて尙侍(元の大將)に對面するに、尙侍は宮の御有樣を初めとし宣旨憂へしことまで、事落ちもなく語るに、大將も打ち泣きて、宵の過ぐるを待ち居たり、夜もいたく更けぬれば、忍びて宮に對面させ奉つる、互ひに夢の御心地して聞こゆべき言の葉も覺えねど、かくてあるべきにあらねば、大將は事の仔細を委しく語るに、春宮もこゝに始めて其の取りかはりたる由を知れり、

春宮の懷姙遲々產時の迫まりければ、今は堪へがたくて臥し給ふ、內裏院あたりへは、御腦と披露してさりけなき躰にもてなす、御門は之を聞き給ひ、兼ねて尙侍に御志ふかゝりければ、御腦にことよせて、梨壺に渡らせられける、御門はがて、御帳の後にやをら

立ち隱くれて御覽ずれば宮は引き被づきて臥し給へり、少し引き下がりて、尙侍は添ひ臥し給へり、愛敬はあたりに散りて、大將の御顏と少しも違はず、みかどは愈よ深くおぼされけり、

春宮には愛ひしよりは平安に、美くしき若君を擧げたり、御顏は大將にそのまゝなり、公けに持て出づべくもあらねば、忍びて尙侍の女房の出づる躰にもてなし、竊かに大將殿に參りたれば大將やがて、母上に仔細を語りて預けゝり、母上は忽かせに出來ずと、御乳母など撰りに撰りて、養ひつゝ世間躰には、忍びたるあたりに出來たる子なりと、云ひ傳へり、

夫れは扨て置き彼の中納言は、右大將に逢ひて一言なりと交はさんと、心に思ひ、京に上ぼり、內裏に至りて右大將に對面しつれど、大將の案外にもよそ〳〵しき躰裁に心亂れて恨らめしく、如何にもして一言云ひかゝらんと伺ひ給へども、其の隙なくていと心を苦しめ居たり、單へに大將の行く衛なくなり給ひしものなれば、斷念もつけて念ずるものを花やかに世に交らひ給ふを見ては何とて思ひ切るべきや、只だ若君を夜晝側へに遊ばせ

て、涙にくるゝのみなりき、あまりに物思ひの遣る方無かりけるにこゝに又奇怪なる疑問起これり、

世に奇怪なる疑問とは、大將の妻君(姫君)が此の程又もや懐姙しけりと聞きけること即ちこれ也、中納言の心の中には、大將は男裝を爲せども其の實女なれば固と〳〵夫婦の交らひは出來ざるべきに、正しく大將の子を姙らみたりとの風説あること、第一了解出來ざる也、こは甚だ心得がたしと、中納言は猶ほ更ら一たび大將と語り交はさんの心切にして、夫より日毎に内裏へ參りて、大將にのみ目をつけ給へども大將はわざとに威儀を備へて近づくべくもあらざりけり、

四月二十日の頃、右大將は兼てより語らひ居れる、麗景殿の女の許に至りけるが、中納言は見え隠くれに跡を尾けたり暫し休すらふ程に、やがて忍びやかに男のものいふが聞こえけり、物の隈より聞き給ふに、慥かに大將の御聲にて、「年ごろ何となく過ぎにける中の、たま〳〵逢坂超えにけるが、今より後も、互みに人目を包むべければ、心にも得任すまじ」と語る、女も泣きて懐つかしう打ち語らうさまなり、中納言はこの有樣を目擊して、愈よ

不審に堪へやらず、大將はかく女と語らうこと決してあるまじきに、如何なれば、かくの有りさまぞ、と中納言は殆んど烟に捲かれたらん心地なり、

夜もやう〳〵明けゆくに、立ち出で給ふを見れば正しく大將なり、あまりのことに中納言も差しよりて大將の袖をひかゆれば、立ち留まり給へども、馴々しき顔だにせず、中納言は袖を捕へたるまゝ心のたけを怨ずれば、大將は打ち笑ひて取り合はず、中納言捕へし袖を尙ほ離さず、つく〳〵と大將の御ありさまを見るに、姿貌こそ塵一點の違ひはなけれ鬚のあたり少しばかり、氣色ばみたるに、こは誰れぞ、誠の大將は何れにおわすらんと、更らに驚き疑へり、斯くて其の後中納言は大將(男君に)逢ひて事の始終を知り、中の君を得て遂に之れと婚したり、

後の尙侍は遂に御門の御胤を宿し、玉のやうなる儲君を産みぬ、御覺えの程いとめでたし大將は内大臣を兼ね給ひ、中納言又大納言となり給ひぬ、今までは若宮の在はさゞりしかば、女の身にて立ち給ひし春宮、御腦にことよせ打ち臥し給ひしが、尙侍の腹に儲君出でさせ給ひしかば、女院は春宮を退ぞき、若宮は春宮に立ち給ひぬ尙侍は女御の宣旨を被む

り幾程もなく、后に立たせ給へり、大納言(前の宮の宰相)は中の君との間に二三の姫宮を産み給ひ、大將は四の君との間に、若君三人をぞ擧げける、

年月束の間に過ぎて、大將は御髪下ろし、右大臣、太政大臣、左大臣を經て關白し給ふ、宮の大納言は、内大臣にて大將を兼ね給ふ、若君達も皆元服し給ひて、中將少將となり給ふ、帝は位を春宮に讓り、關白(前の右大將)殿の娘大姫君藤壺に參ゐりて女御となれり

とりかへばや物語梗概終

竹取物語梗概

竹取物語は我國物語中の最も古きもの也、先人の考證によれば、延喜以往大同以後のものなるべしといへり、著者は何人なるやを詳かにせず或は源順朝臣ならともいふ、

一部竹取物語を案ずるに、記する所所謂古代志想の純潔なるものにして、着想亦優に凡ならざるものあり、主人公赫耶姫に一種の性格ありて、凛然犯かすべからず、五個の貴公子を掌中に翻弄して懊惱せしむるが如きは靈筆自在なりと稱すべし、

昔或る處に竹を取りて生業とせる一人の翁あり、名を讃岐造麿と呼べるが、或る時多くの竹の中より本光る竹一條を見出しけり、彼れ心の中に怪やしみつゝ、近か寄りさまに之を見るに、筒の中光り滿ちゝて、三寸ばかりの美くしき見住み居たり、即ち之を取りて己

が家に持ち歸へり、妻の老婆に命じて養育せしめけるに、既に三月ばかりを經て、世に類ぐひなき美くしき美人となりけり、

翁この美人を得けるより、次第に家富み榮へて、世を安らけく送くるやうになりぬ、扨ても彼の美人年月立つに從ふて成人しければ、名を赫耶姫と呼びけり、此の程三日の間彼の翁多くの老幼男女を集つめて宴遊を催しけるが、貴賤この赫耶姫の姿を見て、均しく恍惚たるばかりなりき、『いかで此のかぐや姫を得てしがな見てしかなと、音に聞きめで惑ふ』もの多く、おたりを離れぬ公達多かり、此の公達のうち別けて色好みなる五人の男、思ひ止む能はざりけん、夜となく日となく通ひ來りぬ、其の名を悉く擧ぐれば、石作皇子、車持皇子、右大臣阿部御主人。大納言大伴御行、中納言石上麿の五人なりき、

五人の公達、吾れこそ口説き落して功名せんと、色々に品を悉くして言ひ寄れど、其の甲斐遂に無かりければ、今は只明らさまに翁に迫まりて姫を請ふに至りぬ、翁も元とはと謂へば我が生みたる子にあらねば心に任かせず、然れば五人の公達ども只戀ひあくがれて、思ひ斷ゆる能はず、翁に請ふこと尙ほ瀕りなり、强がちやさしき志を無にせんもいかゞと

翁は心に思案しつゝ、或る時姫に向ふて云ひけるは翁の申さんこと一とわたり聞入れ給はるべきやと、姫は何事とも知らねば、何事にまれ云ひ給へといふ翁喜こびいふ、翁の年既に七十に餘りぬ、此の世の人は男は女に合ひ、女は男に合ふことをする也、これ人間の大法なり、然ること無くて在はすべきにはあらざるなり五人の內一人を定めて逢ひ給へと勸めければ、姫いはく、善くもあらぬ妾が姿を、深き心も知らで逢ひまつらば、後悔することあるべき也、深き志の知れざる內は、容易に逢ひ難しとぞ答へける、

恁くて翁は更らに赫耶姫に迫まりて、如何なる志あらん人に逢ひ奉るべきやと問ひけるに、五人の內ゆかしき物見せ給へられん人には御志勝りたりとて仕へまつらんと答へけるに、此の由五人に傳へけり、五人の公達之を聞き、かくては互みに恨らみなかるべしと、早速に之に贊同し姫が注問に從ふて整へ見せんと決したり、扨て姫が五人の公達に請ひけるところのものは、悉く世に稀れなるものにて、石作皇子には、天笠に佛の御名の鉢といふものあり、其を取りて給へ、車持皇子はに東海に蓬萊山あり、それに白銀を根とし黃金を華とし、白玉を實としたる木あり、これ折りて給はらん阿部御主人には唐土の火鼠の裘、大

伴大納言には龍の玉、石上中納言は燕の子安貝を求めたり、五人の公達至極の難事と思へども、姫を得んとの心願りなれば、皆々之を諾して歸へりぬ

石作の皇子心に思ふやう、天笠にすら覺束なき鉢を、百千萬里も行いて尋ねんは思ろかなりと、心に一計を案じ、姫の許には今日より天笠へ罷るべしと云ひやり、三年ばかりも經て、大和國十市郡の山寺より、賓頭盧の前なる鉢のひた黑に、煤げたるを取り、錦の袋に入れ赫耶姫の許に至りて、鉢取り來つる由を告ぐ、赫耶姫怪やしみつゝ其の鉢を取り、光おく露のひかりをだにもやどさまし、小倉の山になにもとめけん

石作の皇子謀敗ぶれて歸りぬ

次に車持皇子は、公けに筑紫に入湯せんとて暇を乞ひ、姫の許には玉の枝取りに出でたりとて告げやり、船にのりて陸を出でたり、見送りの人々多く難波まで見送くりぬ、斯くて皇子海に居ること三日ばかりありて竊かに漕ぎ歸へり、人知れず家を作くり工人を雇ふて之に容れ、自からも同じくこゝに在りて、彼の玉のを枝作りたり、頓がて玉の枝姫がいふ

如く寸分違はず、出來上がりたれば、皇子心に喜びつゝ、竊かに難波にもてゆき、船に乘り歸り來れるさまして、苦しげに疲れたる態を裝へり、彼の玉の枝は長櫃に入れて恭しく持ち運こべり、誰れいふとなく車持の皇子とそ優曇華の花持ちて上り給へりと傳へ語るに、之を聞きける赫耶姫、胸先つつぶれて、此の皇子には云ひ逃がるべからずと憂ひ居たり、かゝる程に車持の皇子は、旅の裝束にて姫の許に訪づれ來り彼の玉の枝をぞ差し出しける翁之を見て姫に向かひ斯かる上は、早や此の皇子に仕へ給へといふ、左れど姫は只何の答へもなくいたく歎げきに沈づみたるさま也、翁は此の枝何れにか在はしけん、此の國にはなき珍らしきものなりと云へば皇子得たりと巧みに言を作くりていふ。一昨年の如月十日の頃なり難波より船を出だし、何處とも知らず、風に任かせて行きしほどに、或る時は浪荒れて、海底に沈づまんとし、或る時は風に吹かれて知らぬ他國に流遇し、千辛萬苦海上に漂ふこと、既に五百日を經けるに、辰の刻ばかりに海中遙かに山を望ぞみたり、これ我が求むる蓬萊ならんと、心の中に喜こびつゝ、山の周圍を三日ばかりも廻ぐり歩るきけるに、天女の裝ひしたる女、山より來り銀椀を以て水を汲めり、舟より下りて山の名を

問へば蓬萊なりと答ふ、扨て其の山を見るに、更らに上ぼるべき道なし、山の側には世の中になき花の木ども數多あり、金銀瑠璃色の水流れ出で、此の流れに玉の橋多く渡たせり其のあたりに照りかゞやく木あり、即ち此の木なりきと誠しやかに語りけり、

とたびこそは如何にいなむとも能はざるべしと、姫は心を苦しめつ、嘆きにのみ打ち沈づみ居けるが、かゝる程に六人の男連れ來たり、一人の男文挾に文さし挾さみて、申すやう『作物寮の工人漢部内麿申さく、玉の木を作りて仕うまつりしこと、心を碎きて千餘日に力を盡したること、少からず、しかるに祿未だ賜はらず、これを賜はりて分かちてげこ(家子)に賜はせん』と云ひつゝ彼の文をさゝげたり、赫耶姫彼の文を取りて見けるに、

皇子の君千餘日賤しき工匠等と諸共に同じ所に隱くれ居給ひて、かしこき玉の枝を作らせ給ひて官も賜はんと仰せ給ひき、之を此の頃案ずるに、御つかひとおはしますべきかくや姫の要し給ふべきなりけりと承りて此の宮より賜はらんときをして給ふべきなりとあり姫は之を見て嘆きに沈づみける心の一時にすが〳〵しくなり、急ぎ翁に語りいふ、誠に蓬萊の木かとのみ思ひしに、かゝれば疾く歸へし給へといふ、翁も彼の枝虚事なること

と顯はれければ辭むによしなく玉の枝を歸へしけり姫が歌

まことかと聞きて見つればことの葉を、飾れる玉の枝にぞありける、

玉作皇子も亦こゝに失敗したり、

次ぎには右大臣阿倍御主人は火鼠の裘を得んとて、其の年渡りける土、唐土船の王卿といふものに文を遣り小野房守を使者として、請ひ求めしめげり、其の後唐船渡來し來れるに王卿房守によりて書を送くり曰く、

火鼠の裘からうじて人を出して求めまつる、今の世にも昔の世にも、此の皮は容易くなきものなりけり、むかしかしこき天笠のひじり、この國にもて渡りて侍べりける、西の山寺にありと聞き及びて公に申してからうじて買ひ取りて奉る價の金少しと國司使にまをしゝがば王卿が物加へて買ひたり金五十兩たまはるべし船の歸へらんに附けてたび送くれもし金賜はぬのもならば、裘の質かへしたべ云々

右大臣之を見て大に喜こび、唐土の方に向かひて伏し拜がみけり、扨ても此の裘を入れたる箱を見るに、彩色いとゝ美麗にして、中には金青色の裘を入れたり、毛の末には金の光

輝きたりければ右大臣吾が望み達しぬと、いたく喜び、急そぎ之を持ちて姫の許に至る、赫耶姫之を見て曰く此の裘は火に焼けぬを以て寶とするなり、左らば試みに焼いて其の信僞を檢せばやと、大臣答へてこの皮は唐土にもなかりけるを辛うじて尋ね得たる也、何の疑ひかあらん、焼きて見給へといふに、即ち之を火に投ずれば、めら〳〵と焼けたり大臣は見て驚ろき、赫耶姫は見て怡びぬ、

なごりなくもゆと知りせばかは衣、おもひの外に置きてみましを、

彼の箱に此の歌添へて返へしければ、大臣はすご〳〵と歸りけり、

次ぎに大伴御行大納言は多くの家人を集めて、龍の首に五色の光ある玉あり、其を取りて奉りたらんものには願はんとを何なりとも惜へやらんといふ、家人等恐しとまりて其の玉を取らんとて出でゆきけるが、各々旅費粮食を持ちたるまゝ、己れの家に歸るもあり、思ふ所に遊びゆくもありけり、大納言は斯くとも知らで、早や姫を得たる心地して、赫耶姫を据ゑん料にとて、新たに家を築きなどして、彼の使者の歸へるとのみ待ち居けるが、年を越ゆるも一人とて復命するものあらざりければ、心もどかしく、此たびは自づから玉を

取らんとて筑紫の海の方に舟を出だし給ひぬ

折りしも『早やき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく、いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべくふき廻はして、浪は船にうちかけつゝ、捲き入れ、神は落ちかゝるやうに、閃らめきかゝるに、大納言は慼ひて、まだかゝるわびしきめは見ず、如何ならんとするぞとの給ふ、楫取答へて申す、こゝら船に乘りて罷りありくに、まだかくわびしきめを見ず、御船海の底に入らずば、神落ちかゝりぬべし、もし幸ひ神の助けあれば、南海に吹かれ在はしぬべし、うたてある主の御許につかへて、すゞろなる死をすべかんめるかなとて、』舟人等大に愁傷狼狽せり、且つ曰く、これ君が龍を殺さんと思ひ給へば海神の祟るなり、早や神を祈り給へと勸むるに、大納言最もと思ひければ『楫取の神きこし召せ、をちなく心幼く龍を殺さんと思ひけり、今より後は毛一筋をだに、動かし奉らじ』と祈り給ふこと、千たびばかりに及びてやう〳〵波風靜づまりぬ、三四日ありて船は陸に附きたり濱を見れば明石の濱なりけり、

左しもの大納言も此の危難に懲りてや、『龍は鳴る神の類にてこそありけめ、それが玉を取

らんとて、そこらの人々を害せられなんとしけり、況して龍を捕へたらましかば、またこともなく、我は害せられなまし、よく捕へずなりにけり、かぐや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さんとするなりけり、家のあたりだに今は通らじ』とて、再び姫を訪はざりき、

次ぎに石上麿は家につかはるゝ男どもの許に子安貝取らんほどに燕の巣くひたらば告げよと命じけり、大炊寮の飯炊しぐ屋の棟に燕多く巣くひたりと告ぐるものあり、二十人ばかりつかはして取らしむるに、餘りの多人數なりければ燕畏れて近か寄る能はざりき、此の大炊寮に居けるくつら磨と呼べる翁此の由を聞き、中納言をたばからんとて御前に出でゝ申すやう、子安貝を取らんと思ぼし召さば、多人數を用ゆべからず、一人を撰らみ之を籠に載せ綱をもて釣り上げ、鳥の子産まん時に早く子安貝を取り給へと誠しやかに敎しへけり、中納言又問ふて曰く燕如何なる時に、子を産むぞ、と、翁答へて曰く燕は子を産まんとする前に尾をさゝげ七度廻りて産み落すなり、此の時子安貝を得給へと、

斯くて中納言自から彼處に至りて試みさすに、誰れとて得るものなかりければ、大にもどかしがり、我れ上ぼりて探ぐらんとて、自つから籠に乘り、窺ひ見るに、燕尾をさゝげて

廻はること幾回もせり、中納言こゝぞと思ひて、手を入れて探ぐり給ふに手に觸るゝものありければ、確かと握ぎり、疾く吾を下ろせ確かに得たりと命ずれば、人々いそぎ集つまりきたりて、下ろさんとしけるに、如何にしけん綱絶えて、中納言は鼎の上に仰けざまに倒れけり、人々驚ろき寄りて介抱するに、暫ばしは氣絶したりけるが、水吹きなどする内に漸く蘇生したり、御心地如何ぞと問へば、息も絶え〳〵に、物は少こし覺ゆれど腰痛たくして動ごかれず、されど確かに子安貝を握ぎりたれば嬉れしく覺ゆるなり、先づ如何なる貝か見んものと、彼の握ぎりける手を廣げたるに、こは其もいかに燕の古糞を確かと握ぎりたるなり、中納言も人々も皆吊れまど（り、

斯くて中納言は、馬鹿げたる事の爲めに、病むことを人に知られじとし給へど、之れより病ひにていと弱くなり、貝を取らざるよりは、今は却つて世の物笑ひとならんことをのみ恐れ耻づるやうになりぬ此の由赫耶姫傳へ聞て吊ひにやれる歌

年を經て涙立ちよらぬすみのえのまつかひなしと聞くはまことか、

既に五人の公達姫が難事の注文を整ふる能はず、悉く畵餅とはなりけり、時の帝は赫耶姫

の容色凡ならざる由を聞こしめし、内侍房子に向かひの給ひけるは、多くの公達が云ひ寄れるに辭みて逢はざりきと聞こゆる赫耶姫は、如何なる器量ぞ見て參ゐれとの勅定にふさ子承りて竹取翁の家に詣り使命の趣傳へけるに姫は辭みて對面せず、帝王の仰せ背くべからずと諭せども聞き入れず已むなく此の由内侍に申すに、房子のいふやう、國王の仰せ此の世に住み給はんものは、背くべきやうなし、左樣のこと歸りて復奏すべからずといふ然れど赫耶姫は國王の命に背かば、早く殺ろし給へと聞き入るべうもあらざりき、内侍歸りて此の由を奏す、帝強いてといはずに止みにけり、左れど猶ほ心や殘こり給ひけん、竹取翁を召して、汝が娘を奉つれ重く恩賞を與へんとの事に、翁喜こび家に歸りて、姫に事の仔細を述べて勸めけるに、ほと〳〵聞き入れず強いて勸むれば、消えて失せぬべしといふに、翁も殆んど困し果て、自づから宮中に參ゐりて、申すやう、仰せのことのかしこきに、かの乙女を參らせんと存ずれど、宮仕へに出だしなば死ぬべしと申すなり、彼れ元と某の生める子にあらず、其のむかし竹の中より見出だせるものなれば、凡べて世の人に似侍べらぬなりと、帝已むなく思案して、然れば汝の家山に近かければ、一日の狩りく

らを催さん、其の時こそ姫が姿を垣間みんとぞ仰せられける、

扨て其の日となりぬれば、帝期の如く御狩に出で給ひて、赫耶姫の家に入り、四邊を見給ふに、〇光り滿ちて清らなる人ありとれなるべしと思ぼし給ひ、近か寄り給ふに、逃げて這入る、『袖を捉らへ給へば面をふたぎてさふらへど、初めよく御覽じつれば、類なく覺えさせ給ひて、許るさじとすとて率ておはしまさんとするに、かくや姫答へて奏す、己のが身はこの國に生れて侍らばこそつかへ給はめ、いとゐておはし難くや侍べらんと奏す、帝なほどかさあらん、猶ほ率ておはしまさんとて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫きと影になりぬ』斯かれば帝もせんやうなく『然らば御供には率てゆかじ、もとの御かたちとなり給ひね』との給へば、元の美くしき姿となりぬ、

帝は飽かぬ心地に歸へらせ給へども、赫耶姫の面影忘るべくもあらず、御方々へも渡らせ給はず、文など通はせ給ふて心を慰ぐさめ給へり、斯くて其の後三年ばかりありて、春の初めつかたより赫耶姫は、月の面白う出でたるを見て、常よりは物思ひに沈づめる樣子となりぬ如何なる仔細のありけん、月を見てさめ〳〵と泣くことさへ多くありき、七月十五日

月を見るに及びて姫が物思ひのさま猶ほ更ら堪へがたき樣子ありければ、近く使はるゝ人斯の由を翁に話しけるに、翁もいとど不審く『月な見給ひそ、これを見給へば物思ぼすけしきはあるぞ』と諫めけるに赫耶姫はいふやう、『いかでか月を見ずてはあらん』と其の後も月見るたびに打歎きけり、翁を始め人々等は、其の何の故たるを知らざりき、

斯くて八月十五日の月出づるに及び、赫耶姫の例の物思ひ今は堪ふべくもあらずなりけん、聲を惜しまずさめ〳〵と泣き出だしけり、今は人目もつゝまず、歎げくさまなり、翁あまりの不審さに其の仔細如何にと問へば、姫は涕を拂ふていふ、『さき〳〵も申さんと思ひしかど、必ず心惑はし給はんものぞと思ひて、今まで過ごし侍べりつるなり、さのみやとて打ち出で侍べりぬるぞ、己のが身は此の國の人にもあらず、月の都の人なり、それを昔の契りなりけるによりてなん、この世界にはまうで來りける、今は歸るべきになりにければ、この月十五日に彼のもとの國より、迎ひに人々まうでとんず、さらず罷かりぬべければ、思ぼし歎かんが悲しきことを此の春より思ひ歎き侍べるなり』と云ひ〳〵いみじく打ち泣きけり、翁之を聞いていふやう、此の年月吾れ心を勞して斯くも育て上げ參らせつ

るものを、今更ら何んぞ迎へに來らんや、設令迎へに來るとも、必ず渡たし申さじ、と罵りけり、

赫耶姫又いふやう、妾は月の都の人にて、父母もあるなり、片時の間とて暇乞ひして來りけるに、此の國にては既に數多の年月を經たり、左れば生れぬる國よりも却つて此の國は懷つかしく思ふより、こたび歸らんとするも決して妾が心ならず、年月住み馴れつるに、今別かれんは悲なしとて、翁と諸共に泣き叫ぶ、

帝此の由を聞かせ給ひ、急ぞぎ竹取の家に勅使を立つ、翁出でゝ勅使に逢ひけるに『いと心苦しく物思ふなるは誠にか』と問はするに、翁仔細を包まず言上しけり、勅使、左らば其の月の十五日に兵士を賜はりて迎へに來たらんものを捕へさすべきとて歸りけり

十五日は來たりぬ、帝即ち六衛司に仰せあり、兵士二千人を撰らみて竹取か家に使はされけり、扨てこれ等の兵士は二手に分かれ、築地の上に千人、屋の上に千人を置き、風洩るすき間もなく家を護衛し、人々皆弓矢をもつて今にも天より迎ひ來らば射て取らんとぞ待ち搆へける姫(翁の妻)は塗籠の内に赫耶姫を抱きて居り、翁は塗籠の戸をさして戸口を堅め

たり、翁心丈夫となり、かばかり嚴重に守らば天の使者なりとも奪ひ去らじといひける、姫は之を聞いて、こは無用のことよ、如何に堅く守るとも、彼の國の人來たりなば、戸は自づから開き、人は皆戰はん心の失ぬるなり、相見る軍も今暫ばしの中ぞ順がて罷からんことの悲しさよと歎げき居れり、

斯かる程に宵打ち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり望月の明かさを十合せたらんばかりにて人の毛のあなさへ見ゆるほどなりき、折りしも明々たる大空より、人多く雲に打ち乘りて地を離るゝ僅かに五尺の處に立ち連なりたり、之を見ける警固の人々等しく物に襲はれたる心地して、相戰はん心自然に失せけり、辛くも氣をはげまして、弓を彎かんとすれば、手も足もなえしびれ居れり、

雲上の人々は裝束の美くしきこと譬へんに物なく、飛車一つに羅蓋さしたり、其の中に一際すぐれて王とおぼしき人聲を上げ、造麿これに出でよと命ずるに流石翁も酒に醉ひたらんが如く、すべり出でけり、王とおぼしき人いはく、汝聊かなる功德ありけるを以て、汝が助けにとて姫を遣はしつるなり、姫も罪をつくりたるをもて暫ばしが程賤やしき汝の

許に住まはせつるなり、左れど罪の限り果てぬれば今は率て歸らんにはや返へし奉れといふ、翁答へて申すやう、翁の姫を養ふこと二十年片時にて候はねば、他に同じ名の人の候ふべき、此處なる赫耶姫は、重き病ひに臥し給へば、出で能はじといふ、雲上の人々返事もせず、彼の飛車を屋の棟に寄せかけ『いざかぐや姫、穢き所にいかで久しくおはせん』といふ聲の下より閉ぢたる戸は自然と開らけ、姫は外の方に出でたり、

翁は今更らの別れに胸塞さがりて泣き叫けぶ、姫も悲しさに堪へず、文書き置き形見とせんとて書き置く文に曰く

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬまで侍べるべきを侍べらで過ぎ別かれぬることゝ、返へす〳〵本意なくこそ覺え侍べれ、脫ぎおく衣をかたみと見給へ、月の出でたらん夜は、見おこせ給へ、見すて奉りてまかる空よりも落ちぬべき心らす

天人の持たせる箱には、天の羽衣と不死の藥とを入れあり、一人の天人いふ、壺なる御藥奉つれ、汚なき所のもの聞こしめしたれば、御心地あしからんとて、進めけるを姫は聊かなめ給ひて、少しかたみにとて脫ぎ置く衣に包まんとすれば、或る天人包ませず御衣をと

りて着せんとす、姫はしばし待て、衣着つれば心の變はるものなり、今一言云ひ置く事あり、とて文かく

かく數多の人を給ひて當めさせ給へと、許るさぬ迎ひまうできて とり率て罷かりぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕へつかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍べれば、心得ずほぼしめしつらめども、強くうけたまはらずなりにしこと、なめなるものに、思し召しとゝめられぬるならん、心にとまり侍りぬる、

今はとて天のはごろもきる折ぞ、君をあはれとおもひいでぬる

此の文に壺の藥を添へて頭中將に寄せて奉らせけり、中將これを受け取るとき、天人ふと姫に天の羽衣打ち着せければ、哀別の念、悲喜の思ひ遂に消え失せぬ既に姫は物思ふことなくなりければ、彼の飛車に打ち乘りてかき消す如く天に上ぼりぬ、

その後翁嫗の嘆き悲しむこと、一方ならず物も食はずに病み臥せり、帝は姫が書き置ける文を御覽じていたく哀れからせ給ひ、物もきこし召さず、御遊などもなかりけり大臣上達部を召志給ひ、何れの山か天に近きぞと問はせ給ふに、駿河の國なる山ぞ天に近かしと奏するも

のあり、帝の御製

あふことも涙にうかぶわが身には、しなぬくすりも何にかはせん

姫がかたみにとて奉つれる不死の藥の壺に其の文を具して彼の駿河の山上に燒かしめけり之によりて其の山をふじの山とは名づけゝる、その煙今も尚ほ雲の中に立ち上ぼるとぞいひ傳へたる

竹取物語梗概 終

古事記梗概

純清なる古代思想の代表者として、高潔なる太古時代の遺物として、古事記は實に本邦獨歩の至寶なり、吾人をして彼の混沌たる神代の消息を窺ふを得せしむるもの、主として此の書の力にあらざるなし、試みに卷を開いて彼の神代の一卷を伺へば、當時の信仰、風俗、習慣、思想等は歴然として、吾人の眼前に現はれ來るにあらず耶、彼れ等太古人民の精神は實に無邪氣なり、實に清淨無垢なり、彼れ等の精神は天と俱もに宏大に、地と共もに幽遠なり、花の如く雪の如き、高潔は實に彼れ等の特有のものなりし也、而して此の間に成りたる古事記なるものは、實に其の精華を集つめて餘りありといふべし

古事記は元明天皇和銅年間に於いて、博士太安麿の撰せし所のものにして、其の仔細は著者が序文に於いて、審らかに之を述べたり、今其の全文を左に錄せん、原文は漢

文なり

臣安萬侶言す、夫れ混元既に凝り、氣象未だ効はれず、無名無爲誰れか其の形を知らん、然るに乾坤初めて分かれ、參神造化の首を作し、陰陽斯に開らけて二靈群品の祖となれり、このゆゑに幽顯に出入して、月目を洗ふに彰はれ海水に浮沈して神祇身を滌ぐに呈はる故に太素の杳冥なる本敎に因つて土を孕らみ島を產するの時を識り元始の綿邈たる先聖に頼つて神を生じ人を立つるの世を察す、寔とに知る鏡を懸け珠を吐いて而して百王相繼き劒を喫らひ蛇を切り以て萬神蕃息することを、安河に議して天下を平らげ小濱に論じて國土を清む、是を以て番仁岐命初めて高千の嶺に降り、神倭天皇秋津島に經歴し化熊瓜を出だし、天劒高倉に獲たり、生尾徑をきざる大烏吉野に導びく、儛を列ね賊を攘らひ歌を聞いて仇を伏す、即ち夢に覺とりて神祇を敬す、この故に賢后と稱す、煙を望んで黎元を撫で今に於いて聖帝と傳ふ境を定め邦を開らき近談海に制し姓を正し氏を撰び飛遠鳥に勤す、步驟各異に質同じからずと雖ども、古を稽へ以て風猷を既に頽れたるに繩し、今を照らして以て

典教を絶たんと欲するに補はざる莫し、飛鳥清原の大宮大八州を御したる天皇の御世に曁び潛龍元を體し、洊雷期に應ず夢の歌を聞いて業を纂はんことを想ひ夜水に投して基を承けんことを知る、天時未だ臻らず南山に蟬脫し、人事共もに洽くして東國に虎歩す皇輿忽に駕し、山川を凌渡し六師雷震、三軍電逝し、矛を杖き威を畢げて猛士煙の如く起こり絳旗兵を耀やかして、兇徒瓦の如く解け、未だ浹辰を移つさず氣沴自づから清し、乃ち牛を放ち馬を息へ、愷悌して華夏に歸り、旌を卷き戈を戢さめ儛詠して都邑に停まる、歳大梁に次し月夾鐘に踵たり、清原大宮に天位に昇ぼり即く道軒後に軼ぎ德周王に跨ゆ、乾符を握つて六合を總べ、天統を得て八荒を包ぬ、二氣の正に乘じて五行の序を齊へ、神理を設けて以て俗を奬め、英風を敷いて以て國を弘む、重加智海浩瀚潭かく上古を探ぐり心鏡煒煌として明らかに先代を覩る、是に於いて天皇詔す、朕聞く諸家賚る所の帝紀及本辭既に正實に違ひ、多く虛僞を加ふと今の時に當つて其の失を改めず未だ幾軍を經ずして其の旨滅びんと欲す斯れ乃ち邦家の經緯王化の鴻基なり、故に惟帝紀を撰錄し舊辭を討覈して僞を削り實を定め

後葉に流さんと欲す、時に舍人有り、姓は稗田名は阿禮年是に廿八、人と爲り聰明にして目に度れば口に誦し、耳に拂るれば心に勒す、即ち阿禮に勅語して帝皇の日繼及び先代の舊辭を誦み習はしむ然れども運移り世異はりて未だ其の事を行はず、伏して惟ふに皇帝陛下一を得て光宅し三を通して亨育す、紫震に御して德馬蹄の極まる所に被むり、玄扈に坐して化船頭の逮ぶ所に照らす日浮て暉を重ね、雲散して烟に非ず柑を連ね穗を并すの瑞史に書するを絶たず、烽を列ね譯を重ぬるの貢府空月無し、名文命より高かく德天下に冠されりと謂ふべし、於焉に舊辭の誤忤を惜しみ先紀の謬錯を正さんとして和銅四年九月十八日を以て臣安萬侶に詔して稗田阿禮が誦する所の勅語舊辭を撰錄し以て献上せしむ、謹しんで詔旨に隨ひ仔細に採摭す、然るに上古の時言意竝に朴にして文を敷き句を構ふること、字に於いては即ち難し、已でに訓に因つて述べたる者は詞心に逮ばず全く音を以て連ねたるものは事の趣更に長がし是を以て今或は一句の中音訓を交へ用ゐ、或は一事の内全く訓を以て錄す即ち辭理見え難きは注を以て明かし竟説解り易きは更らに注せず、亦姓の日

下に於いて玖沙訶と謂ひ、名の帶の字に於いて多羅斯と謂ふ、此の如きの類本に隨ふて改めず大抵記する所は天地開闢より始めて以て小治田御世に終はる、故に天御中主神より以下日子波限建鵜草葺不合尊より以前を上奏と爲す、神倭伊波禮毘古天皇より以下品陀御世より以前を中卷と爲す、大雀皇帝より以下小治田大宮より以前を下卷と爲し幷せて三卷を錄し謹しんで以て献上す臣安萬侶誠惶誠恐頓首

和銅五年正月廿八日　　正五位上勳五等太朝臣安萬侶謹上

著者太安麻侶は、神八井耳命の後裔にして慶雲の初年從五位下に叙せられ和銅中正五位上に昇進し靈龜中從四位下に進み、氏の長となり尋いて民部卿となる養老七年遂に卒せり今此の序文を觀るも彼れが充分漢文の素要ありしを知るに足るべし彼が漢文を書することと斯くも熟練したるにも拘はらず其の著者書記に至つては毫も難澁なる漢語を使用せず純正なる古代の言語を以て太古に於ける狀態を有りの儘に直寫しける彼が意思は、後人の特に感謝に堪へざる所なり其の後古事記に後くること八年にして出でたる彼の日本記の如きは、漢文を使用して多く誇大の弊に陷いれる傾向あり、從

ふて古代の消息を窺ふには極めて不便なりと雖ども古事記は能く眞狀を直寫して秋毫の潤削を加ふることなく、吾人をして神人の神話を聞くが如き感あらしむるもの、單へに彼が功多きに居るといふべし

言語の壯重なる思想の偉大なるは古代文學の特徴なり、古事記は實に之を兼ね具へたり而して之を讀むものゝ最も注意すべきは神代の人名物名なり、人名物名は今より之を見れば極めて嗜好に適せざるやう見ゆれども、優に當時の好尚習慣等を窺ふに足るべし、例せば五百津眞賢木(榊)眞男鹿(牡麓)、天之日影(葛)宇麻志阿斯訶備比古遲神、等の如し、其の他奇怪なる神話の如きは實に古代思想の純潔なるものにして後人の敢て企るべからざる特徴なりとす、其の文例として左に原文の一節を錄す

天照大神聞驚而詔我那勢命之上來由者不善心欲奪我國耳即解御髮纏御美豆羅而乃於左右御美豆羅亦御髮亦於左右御牛纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠而曾毗良迺者負千入之靫附五百入之靫亦臂佩伊都之竹鞆而弓腹振之而堅庭者於向般踏那豆美如沫雪蹶散而伊都之男健蹈健而侍問何故上來邇速須佐之男命答曰僕者無邪唯大御神之

命以問賜僕之哭泣佐知流之事故白都良久僕欲往妣國以哭爾大御神紹汝者不可在此國而神夜良比夜良比賜故以爲請罷往之狀參上耳無異心爾天照大御神詔然者汝心之清明何以知於是速須佐之男長答白各宇氣比而生子故爾各中置天安河而宇氣布時天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒打折三金而奴那登母由良爾振滌天之真名井而佐賀美爾加美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名多紀理毗賣命亦御名謂奥津島比賣命次市寸島比賣命次多岐都比賣命速須佐之男命乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璁之五百津之美須麻流珠而奴那登母良爾振滌天之真名井而佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧取成神御名正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命亦乞度所纏右御美良豆之珠而佐賀美邇加美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天津日子根命又乞度所纏左御手之珠而佐賀美邇加美而於吹棄氣吹之狹霧所成神名活津日子根命

古事記を研究するに、各種の參考書世に多かるべしと雖ども、古事記傳の一書は最も確實にして適切なるべし、其の他古事記講義等の如きものあり、

神代卷

天地初めて發らけるの時高天が原に成り給へる神の名を天之御中主神と云ひ次を高產巢日神と云ひ尙ほ其の次を神產巢日神といふ、此の三神は獨成の神なり次に國稚かくして浮脂の如く海月の如く漂流せるの時葦牙の萌え上がるが如く成れる神あり其の名を宇麻志阿斯詞備比古遲神といふ次に生ぜるを天之常立神といふ、これ亦獨成の神なり、次に生ぜるを國之常立尊と云ひ其の次を豐雲野神といふこれ亦同じく獨成の神なり此の次に成り給へる神は宇比地邇神次に妹須比智邇神次に角杙次に妹活杙次に意富斗能地神次に妹大斗乃辨神次に游田陀流神次に妹阿夜訶志古泥神次に伊邪那岐神次に妹伊邪那美神あり、以上國常立神より以下伊邪那美神に至るまで併せて之を神世七代と稱す、扨ても天神(最初の五神)伊邪那岐命、伊邪那美命の二神に命じて曰く『此のたゞよへる國を造くり固めなせ』と、是に於いてか二神命を受け天の浮橋に立ち天神より賜はりし所の天の沼矛を指し下ろしてか

き給ふに其の矛の先きより瀝たる汐、積もりて一の島と成る、是れを於能碁呂島(オノコロシマ)といふ。

二神こゝに天降り給ひ、天の御柱を立て又八尋殿(ヤヒロドノ)を立て給へり、而して伊邪那岐命は其の妹伊邪那美の命に問ふて曰く汝が身如何に成れるぞ答へて曰く吾が身殆んど成り成りたれど、然かも成り合はざる所一つあり、伊邪奈岐曰く吾が身殆んど成り成りたれど然かも成り餘まれる所一つあり、想ふに吾が成り餘まれる所を以て、汝の成り合はざる所に刺し塞さぎ、國土を生まんは如何にぞやと伊邪奈美曰く、然か善けん、伊邪那岐又曰く、然らば吾と汝とこの天の御柱を行き廻ぐり、逢ひたらんとき、美斗能麻具波比(ミトノマグハヒ)(交合のことをいふ)せばやと、是に於て二神『汝は右より廻ぐり逢へ吾は左より廻ぐり逢はん』と約束して遂に其の言の如くす、伊邪那美命先づ『あなにやしゑおとこを』(嗚呼可愛善男といふほどの意)と言ひ給ひ、後に伊邪那岐命『あなにやしゑおとめを』(嗚呼可愛美女といふほどの意)と言ひ給ふ、伊邪奈岐命は、其の妹の先づ發言せるを以て、女人の先きだちいふは良しからずとの給ひき、然れども二神はこゝに夫婦の契りを結んで水蛭子(ヒルコ)を生み給ひ葦船に乗せて流がし捨つ、次に淡路島を生み給ふ、これも亦子の數には入れざりき、

是に於て二神謀り給ふらく、吾れ等生めりし子は悪く不良なり此の由天神に白して命を請ふべしと即ち天神に至りて之を白す天神占ふて曰く、これ女言先じたるを以て其の子不良なる也還り降りて改めいふべしと、二神更らに又天の御柱を以前の如く往き廻ぐり給へり、こたびは伊邪那岐命先づ聲を發して前の如く述べ、伊邪那美命次いで又前きの如く云へり、斯くして二神は更らに交合して淡道(アハヂ)の穂之狭別(ホノサワケ)の島を生み給へり、次に伊豫の二名の島を生み給ふ、此の島身一つにして面四あり、面毎に名あり、伊豫を愛比賣と云ひ讃岐を飯依比古といひ粟國(アハノクニ)を大宜都比賣(オホゲツヒメ)といひ、土佐を健依別(タケヨリワケ)といふ、次に隱伎(オキ)の三子の島を生み給ふ、次に筑紫の島を生み給ふ、此の島も身一にして面四あり又面毎に名あり筑紫を白日別と云ひ豐國を豐日別といひ肥の國を建日向日豐久士比泥別(タケヒムカヒトヨクシヒネワケ)といひ、熊曾(クマソ)の國を建日別(タケヒワケ)といふ次に伊伎島(イキシマ)次に津島次に佐度島次に大倭豐秋津島を生み給ふ、以上の八島は先づ生みなせる國なるを以て之を稱して大八島國(オホヤシマクニ)といふ。

二神既に八島を生み給ひ淤能碁呂島に還り給ひ更らに生み給へる諸島は左の如し

兒島(蛭日別)小豆島(大野手比賣)大島(大多麻流別)女島(天一根)知訶島(天之忍男)兩兒

命妹を追ふて黄泉の國に至る

島（天兩屋）[illegible]

斯くて三神既に國を生み終はり更らに又神を生むこと三十五神、其の火之夜藝速男命（火神）を生むに至り、伊邪那美命燒かれて病み、遂に夫れが爲めに神去り給ひぬ、伊邪那岐命之を見て打ち嘆き曰く親愛なる吾が妻よ、汝は一子に易へて其の一命を捨てつるかと、枕邊に匍匐し、足邊に匍匐して大に號泣し給へり、御淚になれる神を泣澤女といふ、命尙ほ悲泣に堪へずやありけん、佩かせ給へる十拳劍を拔きて神子火神を斬り給ふ、斯くて其佩刀の鮮血走りて化成せる神八神ありき、

伊邪那美既に神去り給ひ、悲嘆に遣る瀬なき伊邪那岐は、戀愛の情尙ほ絶えやらで、今一たび其のいもに逢はまく欲するの念禁ずる能はず、跡を追ふて黄泉の國まで往き給へり、伊邪那美即ち殿戸より之を迎ふ、伊邪那岐喜こんで語りて曰く。親愛なる吾が妻よ、吾れ汝と共もに作れりし國未だ悉く作くり終へずして汝は去りぬ、何ぞ今一たび歸り來らざるや、伊邪那美愁然として眉を蹙めて曰く悔やしきかな、吾れ遂に汚穢なる黄泉の食物によつて身を汚がされぬ、然れども御身の來給ふことはいとかしこければ、何とかして還へり

なん、先づ此の由を黄泉神に謀り見ん、君は暫らく待ち給へ必ず吾が姿を見給ふなと、伊邪那美は斯く語りて殿内に入れり、待つこと久しくして出で來らず、伊邪那岐はほと〳〵待ち兼ね給ひたり、

餘まりの待ち遠ほさに、伊邪那岐は伊邪那美の我が姿を見給ふなと、堅く誡めける言葉を打ち忘れて、自づから髮邊の櫛の齒をとり、之に火を燭して殿内に進み入れり、只見れば伊邪那美命は姿容淺ましく變じて、御頭には大雷あり、御胸には火雷あり、御腹には黑雷あり、御陰には拆雷あり、左手には若雷あり、右手には土雷あり、左足には鳴雷あり右足には伏雷あり併せて八雷居れりき、伊邪那岐一目見るより大に驚き踵を返へして逃げ戻れり、

伊邪那美吾に耻かゝせつと云ひ給ひ頓がて、泉津醜女（ヨモツシコメ）をして之を追はしむ、

伊邪那岐命は逃げ行く道すがら、黑御鬘（クロミカヅラ）を取りて之を投げ給ふに、蒲萄と化せり、醜女等拾ふて之を食ふ間に、命は多く逃げ延びき、更らに追ふこと酷びしかりければこたびは右の御美豆良（ミヅラ）に刺し給へりし津間櫛（ツマグシ）を投げ給ふに、筍地上に生じたり、醜女等拔いて之を食ふ間に命は遂に逃げ給へり、伊邪那美更らに彼の八雷に命じ千五百の黄泉軍を添へて之

伊邪那岐命と桃の實

を追はしめき、命は佩刀十拳劍を後手に打ち振ひつゝ逃げ來りしが追兵尙ほ追ふて黃泉比良坂の坂本に至る、此の本に桃の實ありけり、命之を三つ取りて待ち擊ち給ひしかば悉く逃げ返へれり、

絕妻の誓言

斯くて伊邪那岐命は、挑子に告げ給ふて曰く、汝挑子よ、汝が吾を助けたるが如く、葦原の中つ國に在らゆる蒼生の憂き瀨に落ちて困しむものを助けよと、告げ終はりて名を『意富加牟豆美命』と賜ひき。

扨ても最後に至りて、伊邪那美自づから伊邪那岐を追ひ來り給ひ、千引石を黃泉比良坂に引き塞さぎ、岩を中にし相對して立ち給ひ事戸（絕妻の誓）をわたす時、伊邪那美先ず申し給はく、『愛つくしき我が那勢の命斯くし給はゞ、みまし（汝）の國の人草（人民）一日に千頭絞びり殺さな』と、伊邪岐亦申し給はく、我が那邇妹命、みまし（汝）然かし給はゞ、吾はや一日に千五百產屋立てな』と（汝若し一日に千人の蒼生を殺さば吾れ亦一日に千五百の蒼生を生まんといふほどの意）是を以て一日に必ず千人死し一日に必ず千五百人生まるゝ也。

之より伊邪那美命を黃泉大神と唱へ、又道敷大神とも云へり、所謂黃泉比良坂は今出雲の

禊祓

國の伊賦夜坂をいふ。

伊邪那岐既に伊邪那美と相絕ちて黃泉より歸り來たりて曰く、『吾者伊奈志許米志許、穢なき國に至りてありけり、故吾は大御身を禊ひせな』（いかで黃泉に在りて身は汚がれたれば祓いせばやとの意）と、筑紫の日向、橘の小門の阿波岐原に至りて、禊祓齊戒し給ひき、時に御身に著ける物を脫ぎ棄て給ひしによりて成れる神十二神あり

衝立船戸神、道之長乳齒神、時置師神、和豆良比能宇斯能神、道俣神、飽咋之宇斯能神、奧疎神、邊疎神、邊津那藝佐毘古神、邊津甲斐辨羅神、

又御身を滌ぎ給ふによりて成るれ神十四神あり

八十禍津日神、大禍津日神、神直日神、大直日神、伊豆能賣神、底津綿津見神、底筒之男命、中津綿津見神、中筒之男命、上津綿津見神、上筒之男命、天照大御神、月讀命、建速須佐之男命、

此の時伊命那岐いたく喜び給ひて曰く、吾は御子生みゝて生みの果てに、三柱の貴子（最後の三神）を得たりと、頓がて其頸珠を取り、天照大神に賜ひて曰く、汝は克く高天原を

須神知國を知らずして泣く

知せよと、更らに頸珠の名を御倉板舉之神と呼べり、次に又月讀命に命じて曰く、汝は克く『夜の食國』を知せよと、更らに又建速須佐男命に命じて曰く汝克く海原を知せよと三神等しく命を領せり、然れども須佐之男命は、其知する所の國を知らず、恚恨大に泣き給ふ、其狀恰も『青山を枯山なす(如く)泣きかからし、河海は悉く泣き乾』す程なりき、是を以て惡神蠅の如く集つまり、萬物の妖ひ悉く發こりき、伊邪那岐怪しみて故を問ふ、須佐之男命答へて曰く男は母の國、根之堅州國に至らんと欲して泣くなりと、(伊邪那美時に黃泉に在り故にいふ)伊邪那岐の之を聞くや大に怒らせ給ひ、然らば汝此の國に住む勿れとて、即ち命を神夜良比にやらひ給ひき。須佐之男命請ふて曰く、願はくば天照大神に請して罷かりなんと、即ち天に往く山川悉く動き國土皆震へり。

須神天に至り大神に面せんとす

時に天照大神天に在りて、此の音を聞き給ひ『吾が那勢の命の上ぼり來れるは、必ず善き心にあらざるべし、我が國を奪はんと欲するにこそ、即ち自から髮を解き、武裝し給ひ、

大神武裝して須神を迎ふ

『御美豆羅に纏かして、左右の御美豆羅にも前髮にも右左の御手にも皆八尺勾璁の五百津の美須麻流の珠を纏き持たして、曾比集には千入之勢(矢筒)をつけ、亦伊都の竹鞆を取り

天の安河に於ける誓明

佩ばして、弓腹振り立て堅庭は向股に(兩股に)踏みなつみ(踏み入れて)雪なすくゑはらひ、かして、(蹶散らして)いつのをたけびい踏み建けびて(勇壯凜然といふほどの意)待ち問ひ給はく、なぜ上り來ませると、須神即ち答へて曰く吾決して邪心あるなし只大神吾が泣くを見て其の所以を問ひし時吾れ答へらく、母國を慕ふて泣くなりと、大神怒かり給ひ汝此の國に居るべからずと、神やらひにやらひ給ひしかば、御身に此の由を告げて罷かり申さんと、思ひてこそ上ぼりつれ、ゆめ異心あるなしと申し給はば、天照大神、然らば汝の潔白は何を以て證するを得んと、須神即ち各々うけびて子を生まなんと答へ給へり、

扨ても兄弟の二神はこゝに、天の安河を中に置きて子を生み給ふ、天照先づ須神の佩刀十拳劍を請ひ受けて之を三段に切斷し、之を井に振り滌ぎ、口に嚙みて吹き棄てつ、其の氣吹の俠灰霧によりて成れる神を奥津島比賣命、狹依毘賣命、多岐都比賣命の三神とす、須神も亦天照の美須麻流の玉を請ひ受け、同じく之を井に振り滌ぎ、口に嚙みて吹き棄てつ、其氣吹の挾霧によりて成れる神を正勝吾勝速日天之忍穗耳命、天之菩卑能命、天津日子根命、活津日子根命、熊野久須毘命といふ天照即ち須神に告げて曰く、汝の生みし所のもの

は、其の元と我が物によりて成れり、故にこれ我が子也、吾が生みし所のものは、其の元と汝の物によりて成れり、故にこれ汝の子なりと、須神又天照に語りて曰く、我が心潔白なり故に我が生めりし子皆女子を得つ、之によりて申さば、自づから我れ勝ちぬと、須神こゝに勝驗を得て大に傲り天照の營田の溝を埋め、又は新嘗殿に屎溺を散じたりき、

左れども天照は尙ほ之を尤がめ給はず、且つ曰く『屎は醉ひて吐き散らすとこそ、我が那勢の命かくしつらめ、又他の阿はなち溝埋むるは地をあたらしとこそ、我がなせの命かくしつらめ』と、斯くて須神は轉た其の行爲を改めざりけり、彼は又天照大神忌服屋に坐まして、神御衣を織らしめ給ふ時に、其の機屋の屋根を穿ちて、天の斑駒を逆か剝ぎに剝ぎて墮とし入れたり、織女は之を見ていたく驚ろき、梭の爲めに陰を衝きて死したり、天照大神之を見て大に怒かり給ひ、天の石屋戸に閉ぢ籠もりて出で給はず、是に於いてか高天が原を初めとし葦原中つ國に至るまで闇黑にして晝夜を辨ぜずなれり、

斯かりければ八百萬神皆悉く天の安河に集合し、高御產巢日神の子思金神をして考へしめ當世の長鳴鶏を集めて鳴かしむ、又天の堅石を取り、天之金山の鐵を採り、伊斯許理度賣

命に命じて鏡を作くらしむ（是れ後の八咫鏡なり）又玉祖命に命じて、八尺の勾璁の五百津の御須麻流の珠を作くらしめたり、更らに又天兒屋命、布刀玉命を召し、天香山の眞男鹿の肩を內枝きに拔き、櫻の木を取りてくらへまかなはしめ、同山の五百津眞榊を根より引き拔き、上枝に御須麻流の珠、中枝に八咫鏡、下枝に白幣青幣を垂れ、天兒屋命祈禱をなせり、時に手力雄神をして戸の側に立たしめ、天細命をして舞蹈をなさしむ、宇受賣命即ち天香山の蔦を取りて襷となし、天の眞析を鬘とし、小竹葉を手草子結び、拍子を取つて舞蹈せり、高天が原も動るがんばかり、八百諸神は歡笑せり、

天照大神は岩戸に在りて、彼れ等諸神の笑ひ興ぜる聲を聞き、怪やしと思ひ給ふて岩戸を細目に開け內より語りて曰く、吾れ隱くれにしより、高天原は申すに及ばず、葦原中つ國は、皆闇夜なるべきに、何が故に天の宇受賣は、遊樂し諸神も亦笑ひ興ぜるぞと、宇受賣命答へて曰く御身よりも更らに貴き神お在すが故に歡喜するなりと、斯くて天兒屋命布刀玉命彼の鏡を出だして、天照に見せ奉つる、天照愈よ怪やしと思ひ給ふて戸の外に稍や出で給ふ、折りしも其の側に立ちける手力雄神は、御手を取りて、引き出だし奉つれり、布刀

須神肥の河上に至る

玉の命は、尻久米繩を其の後方に引き渡して再び此の中に還り給ふなと申しき、天照出で給ふに及びて國中自づから照り明らかなりき、是に於いて諸神共もに相謀りて須神の不行意を責め、之に千位置戸を負ほせ、又鬚を切り手足の爪をも拔かしめて神やらひにやらひたりき、須神又食物を大氣津比賣に乞ふ、大氣津比賣即ち鼻口又尻より種々の食物を出して之を與ふ、須神竊かに窺ふて之を知り、大に怒かりて大氣津比賣を殺しき、彼の殺され給ひける時身に成れるもの、頭に蠶成り二つの目に稻種成り、二つの耳に粟生り鼻に小豆生り陰に麥成り尻に大豆成りたり、神產巢日御祖命之を取りて種となせり、

須神既に放たれ出雲の國、肥の河上に降れり、此の時箸あり其の河より流れ下る、命其の河上に必ず人あるべしと思ひ、尋ね行きけるに、果して老夫と老女とあり、一童女を中に据ゑて泣き居たり、須神即ち其の姓名を問ふ、老夫曰く吾は國神大山津見神の子にして名を足名推と謂ひ妻の名を手名推と呼び、娘の名を櫛名田比賣といふと答ふ、須神又其の泣く所以を問ふ、彼れ曰く我れ固と娘八人ありき、八俣遠呂知(大蛇)なるものあり毎年來りて之を喫らふ、今又來るべき時なるが故に泣くなりと、扨て其の形は如何さまぞと問ひ給へ

ば其の目は酸漿の如くに赤かく躰軀一つにして八個の頭八個の尾あり、其の身に蘿又檜榲など生ひしげりて其の長きこと、八谷八峽を度れり、其の腹常に醒血爛れたりと申す、須神とくと之を聞き終はりつ扨て宜ふやう、此の童女汝の娘ならば吾に奉つらんやと老夫恐しこけれど未だ御名を知らずと申せば吾はこれ天照大神のいろせ(兄弟)にして今天降りたる所なりといふ、老夫大に喜びて然らば娘を奉つらんとて約しき。

須神乃ち其の童女を以て、櫛と變じ、之を御美豆良に刺して、老夫に命じ給はく、汝等八醞酒を釀し又垣を造くり其の垣に八個の門を作くり門毎に八の棧敷を結び、其の棧敷毎に酒船を置き船毎に彼の酒を盛りて待てと、彼れ等老夫婦は遂に其の命に隨へり、斯くて待つ程に例の八岐の大蛇は老夫が言ひし如く期に及びて來りつゝ船毎に各頭を垂れて其の酒を飲みたり、而して彼の大蛇は酒の爲めに醉はされて遂に寢ねたり、須神即ち其の佩刀を拔いて之を斬る、肥の河爲めに血と變ずるばかりなりき、須神更らに其の尾を斬り給ふときゝ佩刀の刃少し缺けたり、怪やしと思ひつゝ之を割き見給へば、中には都牟刈の太刀一つありけり、除きりに珍つらしかりければ之を天照大神に奉つれり之を草薙劍といふ、

是に於いて須神出雲に宮居せんと欲し給まひ、何地ぞ宜けんと求め給ふに須賀の地に至りて須神曰く此の地に來りて我心須賀々々しと、遂にこゝに宮造くりして住み給ふ今に此の地を須賀と呼ぶ初め須神の宮作りし給ふや其の地より雲立ち登れり須神乃ち歌を作りて曰く

やくもたつ、いづもやへがき、つまごみに、やへがきつくる、そのやへがきを

須神是に於いてか足名椎を召し、汝吾が宮の守たれと命じ、名を稲田の宮主須賀の八耳の神と賜ふ斯くて須神と櫛名田比賣との間に生まれつる子を八島士奴美といふ、夫より幾代を經て終に大國主の神生まる大國の神又大穴牟遲と稱す、兄弟多くありしが、各々稲羽の八上比賣に婚せんと欲して國を大國主に避けたり扨て彼の兄弟の諸神は、八上比賣に至らんと欲して稲羽に行きけるが、大穴牟遲に袋を負はせて從者となしたり、

爰に彼等氣多の前に至れる時、裸躰の兎伏し居れり、諸神之に告げて曰く、汝宜しく海潮を浴じ、風の吹く所にあたりて、高山の上に伏し居よと、兎即ち其の言の如くす、然れども其の海潮乾くと共もに、身の皮悉く風に吹き割かれて痛苦忍ぶべからず、遂には彼の兎

痛みに堪へで泣き居れり、時に最後に來りたるは、大穴牟遲神なり、此の有り樣を見て其の故を問ふ、兎曰く吾れ嘗つて淤岐島に在り、此の國に渡らんと欲すれども其の便を得ず故に吾れ一策を案じ海の和邇(鰐)を欺きいふ、吾れと汝と同族の何れか多き孰れか少きを競らべ見ん、汝は汝の同族の有るたけを爰に率ゐ來れ、而して此島より氣多の前にて皆並み伏して渡れ、然るときは吾れ其の上を踏みて走りつゝ讀み渡らん、斯くて吾は其の同族の孰れか多きといふ事を知らんと、彼れ等は皆余が言に欺むかれて並み伏せり、吾は得たりと其の上を踏みて、讀み渡り來て、今や地に落ちんとするとき、吾れ笑ふて曰く汝等吾に欺むかれたりと、此の余が言を聞きける最後の和邇は大に怒りて吾を引き捕らへ、悉く我が衣を剝ぎて斯くの如くせり、由つて我泣き悲しみ居たりしが、前きに諸神來りて、吾に先げて曰く、宜しく海潮を浴して風に當り臥せと、即ち其の敎の如くせしかば、我が身は悉く傷つきたりと、

大穴牟遲は之を聞き即ち其の兎に敎へて曰く、汝疾く彼の水門に至り水を以て汝の身を洗ひ、其の水門に生長せる蒲の花を取りて之を敷き散らし、其の上に轉び臥せば汝の身元

兎の隠言

大穴牟遅諸神に殺さる

の屑とならん、と兎即ち其の教の如くせば其の身元の如くなりき。此の兎は稲羽の素菟（シロウサギ）といふものなり、彼れ即ち大空牟遅に告げて曰く、前きの諸神は必ず八上比賣（ヤカミヒメ）を得給はじ、袋を負ひ給へれども、八上比賣を得んものは御身なるべしと、扨ても諸神は八上比賣のの許に至る、比賣即ち諸神に告げて曰く、吾れ御身等の言を聞く能はじ、吾は大空牟遅神に婚せんと欲すと、諸神之を聞いて大に怒かり、大穴牟遅を殺さんことを議決しけり。

伯伎の國手間の山本に至れるとき、諸神大穴牟遅に告げて曰く、此の山に赤猪ある也、吾等之を追ひ出すべし、汝待ち受けて之を取れ、若し待ち取る能はずんば汝を殺さんと、斯く約して猪に似たる大石を火に焼き赤くなして轉ばしぬ、大穴牟遅は斯くとも知らで之を待ち取るとき、焼かれて遂に死し給ひぬ、之を聞きける御祖命は哭き患ひ急ぎ天に上ぼりて神産日之命に再び蘇生せしめんことを請へり、命乃ち蚌貝比賣（キサカヒ）と蛤貝比賣（ウムカヒ）とを遣はして之を作り活かしめ給ふ、

大穴牟遅再び蘇生しければ諸神又欺むきて山に連れ行き之を拷ち殺ろしき、御祖命再び哭して請ひければ又もや彼を蘇生せしめぬ、斯くてあらば遂には諸神に殺されんこと必せり

須佐之男命と大穴牟遅

鼠の忠言

とて、即ち木の國（大屋毘古（オホヤビコ）の許に急ぎ遣はしけり、大穴牟遅命更らに父祖命の命に従ふて須佐能男命に到れり、其の娘勢理比賣入つて父に告げて曰く、いと麗はしき神來れりと即ち喚び入れて、其の蛇の室屋に寢ねしめ給ひき。須勢理比賣の命竊かに蛇の比禮（ヒレ）（蛇を拂ふもの）を大穴牟遅に授けて曰く其の蛇若し御身を喰はんとせば、此のヒレを三たび擧げて打ち拂ひ給へ、と、乃ち其の如くせしかば蛇自づから靜づまりぬ、又の夜蜈蚣と蜂との室に入れ給ひしに、又蜈蚣と蜂のヒレを授け先きの如く教給ひしかば、彼れ等は自づから靜づまりぬ、又鳴鏑（ナリカブラ）射を大野の中に入れて其の矢を採らしめ給ふ、其の野に入るを計りて火をもて其の野を焼き廻ぐらしつ、

大穴牟遅はこゝに詮すべなく思案に暮れける間に、鼠來たりて言ひけるは、『内は富良々々（ホラ〳〵）外は須夫々々（スブ〳〵）』（ホラ〳〵は中の空虚なるをいふ、スブ〳〵は狹きをいふこれにて大意解すべし）と、即ち悟る所あり其處を踏みしかば、空洞に落ち入り隠くれたる間に、火は既に焼け過ぎたり、彼の鼠は其鳴鏑を嚙みつゝ持ち來れり、併し其の矢の羽は鼠の子等が悉く喰ひたりき、

大穴牟遲須神の虱を取る

須佐之男命は、大穴牟遲既に燒死したりと思ひ、其の娘は泣きつゝ喪具を持ち來りしか、案外無事にて既に死したりと思へる大穴牟遲は、矢を持ちて奉つれり、須佐之男命即ち家に連れ歸り、八田間の大室に呼び入れて、其の頭の虱を取らせ給ひき、大穴牟遲ふと其の頭を見るに虱にあらで吳公多くあり、爰に彼の娘はムクの木の實と、赤土とを授け給へば、大穴牟遲即ち木實を喰ひ破ぶり赤土を含くみて唾を吐き給へり、須神心に思ふやう是れ螟蛉を喰い破ぶりて唾き出だすなりと扱ては心をゆるして寢ね給へり、

大穴牟遲娘を負ふて逃がる

大穴牟遲須神の寢入りたるを窺がひ、其の髮の毛を取りて室中の椽毎に悉く結びつけて、五百引石を其の室の戸に立てかけ娘須勢理比賣を負ひ生太刀生弓矢及び天詔琴を持ちて逃げ出す時、持ちたる天詔琴樹に觸れて大地鳴動せり、此の聲に目を醒ましたる須神は、かゝる有り樣に打ち驚ろき、忽ち其の室を引き仆したり、然れども椽毎に結べる髮を解く隙に、彼れ等は多く逃げ延びたり、

須神二人を追ふて黃泉比良坂迄追ひ至りたるとき、遙かに大穴牟遲を呼びて曰く『汝が持たる生太刀生弓矢を持ちて、汝が諸兄弟共を坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀨に追ひ拂へ汝

八上比賣との再合

汝大國主の神となり又宇都志國玉の神となりて、我が娘須勢理比賣を妻となし、高天が原に君臨せよと、大穴牟遲即ち其の大刀弓矢を以て諸神を追ひ退け國作りを初め給ひき、

扨ても八上比賣は大穴牟遲とは既に先約ありければ、來りて寢所を共もにしたまへども、須勢理比賣を畏しこみて其の自づから生みたる子をば、木の俣に刺し狹さみたり、其の子の名を木の俣の神といふ、此の八千矛の神(大穴牟遲)越の國沼河比賣の許に幸し給ひし時作り給へる歌に曰く、

やちほこの　八千矛
やしまぐに　八島國
とほとほし　遠遠
さかしめを　賢女
くはしめを　細女
さよばひに　結婚
よばひに

かみのことは　神之命者
つまゝぎかねて　妻覓
こしのくにに　越國
ありときかして　在聞
ありときこして　在聞
ありたゝし　在立
ありかよはせ　在通

たちがを　大刀之緒
おすひを　「覆面？」
をとめの　處女
おそぶらひ　押
ひてづらひ　引
あをやまに　於青山
さぬつどり　野鳥
にはつとり　庭鳥
うれたく　慨母
このとりも　此鳥母
いしたふや　「？」
ことの　事
ことば　是

いまだとかずて　未解而
いまだとかねば　未解
なすやいたとを　鳴板戸
わがたゝせれば　吾立
わがたゝせれば　吾立
ぬえは　鵺者
なき　鳴
きゝしはとよむ　雉者響
かけは　鷄者
なく　鳴
なくなるとりか　鳴鳥哉
うちやめこせね　打病
あまはせづかい　天使
かたりことも　語言

沼河比賣未だ戸を開けずして内より歌ひ給はく

やちほこの　八千矛
ぬえくさの　（冠辭）
わがこゝろ　吾心
いまこそは　今
のちは　後
いのちは　命者
いしたふや
ことの
ことば
あをやまに　青山
ぬばたまの　烏羽玉之
あさひの　朝日之
かみのめこと　神命
めにしあれば　女有
うらすのとりぞ　浦渚鳥
ちどりにあらめ　千鳥
ちどりにあらむを、
なしせたまひそ　莫死賜
あまはせつかひ
かたりことも
ひがかくらば　日隱者
よはいでなん　夜者將出
をみさかえきて　咲榮來而

たくづねの（拷綱之）
あわゆきの（泡雪之）
そだたき（叩）
またまで（真玉手）
もゝながに（股長）
あやに
やちほこの（八千矛）
ことの
こをば

しろきたゝむき（白脛）
わかやるむねを
たゝきまながり（叩拱）
たまでさしまき（玉手差纏）
いはなさんを（寐者將宿）
なこひきこし（勿懸）
かみのみこと（神命）
かたりごとも

斯くて其の夜は逢ひ給はず、明くる日の夜逢ひ給ひき、之を聞きける須勢理比賣はいたく嫉妬し給ひき、大穴牟遲は之が爲めに住みわびて、出雲より倭の國に上ばらんとて旅の裝束して立ち給ふとき片手を馬の鞍にかけ、片足を其の鐙に踏み入れて歌ひ給はく

ぬばたまの（烏羽玉之）
くろきみけしを（黑御衣）

まつぶさに（眞具）
おきつとり（奥鳥）
はたゝぎも（鯔）
へつなみ（逸波）
そにどりの（鶇鳥之）
まつぶさに
おきつとり
はたゝぎも
へつなみ
やまかたに（山縣）
あたねつぎ（茜春？）…契沖説
しめころもを（染衣）
とりよそひ

とりよそひ（取裝）
むなみるとき（胸見時）
これはふさはず（此者不宜）
そにぬぎうて（磯脱棄）
あをきみけしを（青御衣）
とりよそひ
むなみるとき
こもふさはず（此亦不宜）
そにぬぎうて
まぎし（求）
そめきがしるに（染木之汁）
まつぶさに
おきつとり

むなみるとき
こしよろし 此宜
いものみこと 妹命
わがむれいなば 吾群往者
わがひけいなば 吾引者
なはいふとも 汝雖言
ひともとすゝき 一本薄
ながなかさまく 汝之將泣
さぎりに 狭霧
わかくさの 若草之
ことの
ことば

はたゝぎも
いとこやの
むらどりの 群鳥
ひけどりの 引鳥
なかじとは 不泣者
やまとの 山處之
うなかぶし 項傾
あさあめの 朝雨之
たゝむぞ 將起
つまのみこと 妻之命
かたりごとも

須勢理比賣即ち大御酒杯を取り立ち寄りさゝげて歌ひ給はく

やちほこの 八千矛
あがおほくに 吾大國
をにいませば 男坐者
しまのさきさき 島之崎々
いそのさきおちず 磯之埼不落
つまもたせらめ 妻將持者
めにしあれば 女在者
をは なし
夫 者 無
つまは なし
夫 者 無
ふはやがしたに (浮之下)
にこやがしたに 柔之下
さやぐがしたに 清之下
わかやるむねを

かみのみことや 神命
ぬしとそは 主
うちみる 打見
かきみる 搔見
わかくさの 若草之
あはもよ 吾者
なををきて 除汝而
なをきて

あやかきの 文垣之
むしぶすま 蒸被
たくぶすま 拷被
あわゆきの 沫雪之
たくづぬの

しろきたゞむき（白 脛）
たゝきまながり（叩 拱）
たまでさしまき（玉手差纏）
いをしなせ（寢れ給へ）
たてまつらせ（献）

そたゝき（叩）
またまで（眞玉手）
もゝながに（股長）
とよみき（豐御酒）

斯く歌ひつゝ女神は男神の頸に手を留め給へば、流石に思ひ立ちぬる大穴牟遲も思ひ止まりて出雲に留まりぬ、

嘗つて大國主神（大穴牟遲）出雲の御大（ミホ）の御前（ミサキ）に坐ましける時、天之羅摩船（アマノカヤノフネ）に乘り、鵞（ヒムシ）のを剝ぎて衣となせるものを着け歸り來れる神あり、其の名を問はすれども答へず、從ふ諸神に問はすれども皆知らずと答ふ、時に蟾蜍（ひきかへる）ありいふ、久延毘古（クエビコ）ぞ必ず知りたらむと、由つて久延毘古を召して之を問ふ、答へて曰くこれ神產巢日神の子小名毘古那（スクナビコナ）神なりと由つて之を神產產巢日神に問へば其の然る由を答へて更らに大穴牟遲と相並びて國を作らしむ、其の後小名毘古は去つて常世の國に至れり、扨て彼の小名毘古の事を知り

たりける久延毘古といふは、足能く歩行する能はずと雖ども天下の事を悉く知れる神なりき、

大國主神獨り自づから愁へて曰く吾れ獨り如何にしてか能く此の國を作らん耶と、是の時に當り海上遠かに光明を發して寄り來る神あり近か寄るまゝに大國主に告げて曰く、吾を祭らば相與もに國を作くらん、若し然らずんば國成りがたしと大國主即ち如何にして之を祭らんやと問ひ給へば彼の神曰く、吾を倭の青垣東山の上にいつき祭つれと云ひ給へり、蓋し此の神は御諸の山上に鎭坐せる神なりき、

扨ても天照大神高天が原に在まして詔して曰く、『豐葦原之千秋之長五百秋之水穗國（トヨアシハラノチアキノナガイホアキノミヅホ）は、我（ワガ）御子（ミコ）吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國』と斯くて遂に天忍穗耳命を降し給へり、爰に忍穗耳命は天の浮橋に立ち臨み見て曰く『豐葦原之千秋之長五百秋之水穗國は、いたくさやぎて有りけり』と、更らに天上に上ぼりて天照に此の由を申したり、

高御產巢日神即ち天照の命を奉じ諸神を悉く天の安河に會集し、思金神に思はしめて勅詔し給はく、『此の葦原の中つ國は我が御子の知らさん國とことよさし給へる國なり、かれこ

天菩比神中國に天降る

の國にちはやふる荒らぶる國つ神の多なるとおもほすは、何れの神を使はしてか、ことむけ（奏功）まし』とこゝに思金神又は百萬神と相謀り、天菩比神を遣はして中つ國の騒亂を靜づめしめけり、此の時葦原の國には既に大國主神ありて國造りを初め居れり、天菩比神は命を帶びて天降りけるが、大國主に媚びへつらひて既に三歳を經れども天に歸りて復命せざりき、

天若日子又天降れり

天祖即ち又諸神を召して更らに遣はすべきものを問ふ、思金神是に於いてか、天津國玉神の子天若日子を以て之に答ふ、若日子即ち命を奉じ、天之麻迦古弓、天之波々矢を賜はりて遂に葦原に降り、大國主の娘下照比賣を妻とし其の國を獲んと欲するの情生じ、爲めに八歳を經れども又天に歸りて復命せざりき、

天祖即ち諸神を召して更らに遣はすべきものを問ふ、且つ曰く天若日子久しく復命せず、其の何が故に歸らざるかを聞かしめんと諸神曰く雉名鳴女よけんと即ち彼を遣はすに決せり、發するに臨ぞみ詔して曰く、汝行きて天若日子に問はんことは、汝を葦原に使はしたる所以のものは主として其の土の荒神を和らぐるに在り、然るに汝八年を經れども未だ復

若日子鳴女を射殺す

命せざるは何の故ぞ雉名名鳴即ち命を領して赴むけり

斯くて鳴女は命の如く天より降りて、葦原に至り天若日子が門なる湯津楓の上に居て詳ぶさに詔命の次第を述べたり、時に天之佐具賣なるものあり、鳴女の詔命を傳ふるを聞き天若日子に告げて曰く此の鳥鳴く聲最も惡るし、早く射殺し給へと若日子即ち天より賜はりたる彼の天之波士弓、天之加久矢を持ちて彼の雉を射殺し了んぬ、

其の矢飛んで天に至る

若日子が射ける矢は誤たず、雉の胸を通し、更らに飛んで天に至り高木神（高御產巢日神）の許に至りき、高木神其の矢を取りて見給ふに矢の羽に血つきたり、高木神つら〳〵之を見給ひて曰く此の矢はこれ曩日天若日子に與へし所のものぞかしと、諸神に示めし且つ詔じて曰く、若し天若日子我が命に違はず、惡神を射たりし矢の、此に飛び來しならんには天若日子に中らざれ、若し彼れ命に違ひて邪心あらば、此の矢に中りて疾く死せよと、詔し終はりて其の矢を取り再び之を投げ返し給へは天若日子か胸に中りて其の儘死しだり、

葬送式酷似の兩神

其の妻下照比賣が號泣の聲風に送くられて天に達せり

時に天上に在りける天若日子が父（天津國玉神）之を聞いて天より下り、喪屋を作くりて葬

酷似の兩神

送の式をなせり、即ち『河雁をきたり持ち(葬送に食を戴き行く人)となし、驚を掃持ちとし翠鳥を御巫人とし、雀を碓女(殯に手向ける米をつく人)とし、雉を哭女とし、』斯くして八日八夜樂して遊びたり(或說に曰く葬送のとき斯く音樂をなして遊ぶは蓋し岩戸開よりの古例ならん)

此の時に當り阿遲志貴高日子根神到りて天若日子が喪を吊す、若日子の父妻彼を見て喜こんで曰く我子死せず、我君世に在りと、手足に取りかゝりて欣こび泣きけり、蓋し彼は若日子と容姿甚だよく似たりければ、人々見て以て若日子なりと過てるなりけり、高日子根神此の有樣を見て大に怒かりて曰く若日子は我が親しき友なればこそ、其の死を聞いて吊むらひ來つれ、何を以てか、吾を汚穢なる死人に比するやと、其の佩刀を拔いて喪屋を切り足を以て之を蹶やりき。下照比賣は天より降れる諸神の高日子根を知らざれば、其の名を知らしめんとて歌ふて曰く、

あめなるや　天在
うながせる　所姿
おとたなばた　弟棚機
たまのみすまる　玉之御統
みすまるに　貫
みたに　谷
あぢしき　阿治志貴
かみぞや　神
あなだまはや　穴玉
ふたわたらす　二亘
たかひこねの　高比古根之

健御雷命を帶びて降る

蓋し一首の大意は天に在る織女の首にかけたる美はしきみすまるの珠の如く二谷にまで渡りて照り輝ける神は阿治志貴高比古根之神ぞといふ也、蓋し此の歌夷振り也、

天照大神更らに諸神に勅し給はく、何れの神を遣はしてよけむと、諸神僉な曰く天安河上の天石屋に伊都之尾羽張神あり、之を遣はすと最も然るべし、若し此の神往かずば其の子健御雷之男神然るべしとぞ申しける、天神乃ち天迦久神を使はして之を問はしめ給ふ天尾羽張神曰く謹しんで命を奉ぜん然れども之れには吾が子健御雷を遣はし給ふべしと、即ち其の子を奉りき、是に於いてか、天神健御雷に天鳥船神を副へて遣れり

二神即ち出雲の小濱に天降り、十拳劍を拔きて之を浪の穗に立て、其の尖頭に胡坐して、大國主神に問て曰く我等は天照大神の命を奉じて汝に問ふとあり、葦原の中つ國は天孫の

知らしめ給ふ國なり汝が心如何にぞやと大國主答て曰く我子言代主に問ふべし、彼は遊獵に御大の前に遊びて未だ還（かへ）らずと天鳥船乃ち至りて言代主を連れ來れり、更に前言を以て之を問へば彼れ曰く父の神よ此の國を宜しく天神の御子に奉り給ふべしと云ひ終りて其の身を隱くせり、

健御名方

二神更らに大國主に問ふて曰く言代主既に諾しぬ、尙ほ他に申すべき子ありや、答へて曰く他に健御名方の神一人ありと、言未だ終はらざるに、御名方神千引石を手に提げて出で來り曰く、誰ぞ我國に來りて物言ふは、請ふ汝等と力競べせんと、斯く云いつゝ彼は進んで健御雷の手を握ぎれり、健御雷はこゝに靈異を顯はし、自づから取られたる手を、見るゝ氷に變じ再び又明晃々たる劒刃に變せり、御名方神畏れ驚きて退きぬ、こたびは健御雷御名方手を握ぎり、恰も若葦をとる如く握みひしぎて投げ給へば御名方かなはじとて逃げ去れり、尙ほ追ひ追ふて、科野（シナヌ）の國スワの湖に迫まりて殺さんとす、御名方謝して曰く、請ふ殺す勿れ謹しんで命を奉じ葦原の中つ國を天神の御子に獻ぜんと、健御雷即ち還りて大國主に云つて曰く汝の二子既に命を奉ずべしと謂ひぬ、扨て汝の心如何ぞと、大國主曰

葦原國靜謐に歸す

く二子の言の如く吾は違はじ、葦原國を以て天神の御子に獻ぜんと申しき、

健御雷天に歸りて此の由を復命す、是に於いてか天照大神高木神の命もちて天の忍穗耳命に詔し給はく今葦原の國、靜謐に歸したりと、依て汝降りてはぐ知ろしめせと、天忍穗耳命答へ申して曰く吾れ天降らんと用意せし間に生れたる子なり、天津日高日子番能邇々藝命（アマツヒタカヒコホノニニギノミコト）といふ此の御子を降すべしと、遂に此の御子を降すに決す、

扨ても邇々藝命は命を受けて天降らんとし給ふに、天之八衢（アメノヤチマタ）に居て上は高天原を照らし下は葦原中つ國を光らす神あり、天の宇受賣命往いて其のこゝに出で來れる所以を問ふ、彼の神曰く吾は國神猿田毘古（サルタヒコ）といふものなり、こゝに來れる所以のものは、天神の御子天降り給ふと聞き前驅に仕へまつらんが爲めに來れる也と、扨てまた天神は更らに天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命の五神をなし加へ、又八尺勾璁花那藝劒（ヤサカマガタマクシナギノツルギ）に、思金神、手力男神、天石門別神、を副へ天孫に詔して曰く此の鏡は專ら吾と思ふて禮拜せよ又思金神をして政を執らしめよと、

是に於いて邇々藝命、高天が原を出で給ひ、たなびく八重雲を押し分けて道を開きつゝ、遂

一美女に遇ふ

大山津見其の二女を率つる

に筑紫日向の高千穗に降り給へり、笠沙の御前に至れるとき、一美人に遇ふ誰が女ぞと問ふ答へて曰く大山津見の女名を阿多津比賣といひ、又の名を立木之花之佐久夜毘賣といふと、又問ふ汝兄弟ありや答へて曰く一の姉あり名を石長比賣といふと、命又曰く吾れ汝と婚せんと欲す如何にやと姫答て曰く請ふ父の大山津見に問ひ給へと、命即ち大山津見に此の由を乞ひ遣りければ、父いたく喜びて、其の姉石長比賣を副へてぞ遣はしける、然れども姉の娘は容姿いと醜くかりければ命其の姉を返へし佐久夜比賣のみをぞ留め置きける、姉の姫の返へされけるに大山津見大に耻ぢ且つ命に云ひ送くりて曰く我れ二女を併せ奉れる所以のものは、石長比賣を遣はせば、君の御命は長しなへる石の如く、又佐久夜比賣を遣はせば木花の榮ゆるが如く榮へんとてなり、然かも今其の姉石長を返へさる、恐らく御壽命久しきを保つ能はざらんと、

扨ても佐久夜比賣は命と逢ひ給ふこと僅か一夜にして姙らみ給へり、姫乃ち此の由を命に申せば、命は之を信じ給はず、一夜に姙らむ是れ恐らくは我子にあらざらん必ず國神の子ならんと、佐久夜比賣即ち誓ひて曰く吾が姙める子若し國神の子ならば、産むこと平安なら

佐久夜比賣火に産す

火遠理命海邊に呻く

じ若し天神の御子の子ならば産むことと平安なるべしと、即ち戸なき八尋殿を作くりて自から其の殿内に入り、泥土を以て之を塗り、産時に至りて其の殿を燒かしめたり、斯くして其の猛火の中に難なく生まれたる御子を火照命と云ひ次に生まれたるを火須勢理命といひ次に生まれたるを火遠理命といふ。

火照命海の幸あり、火遠理命山の幸あり、兩神各々其の幸を易へんことを約せり、扨て火遠理命海佐知を以て釣り給ふに一魚を得る能はず、其の鈎をさへ海中に遺失したりき、其の後兩神又元の如く佐知を易へ戻どさんとす、然るに火照命は遺失しける元の鈎を請ふて已まず、火遠理命多くの鈎を作くりて償ひわびたれども聞き入れざりけり、

是に於いてか弟は憂慮置く能はず、行く〳〵海邊に呻よふたり、時に臨椎の神來て問ふて曰へ、御身何が故に嘆き悲しむぞと、答へて曰く吾れ兄と鈎を易へ、遂に其の鈎を遺失したりき、吾れ多くの鈎をもて之を償ひしかど、彼れ聞かずして其の元の鈎を得んといふなり、是をもて嘆き恐じむと、臨椎曰ぐこれ極めて易すき事なり、吾れ汝の爲めによき謀を教へんと即ち無目の籠を作りて船となし、火遠理を其船に乘せて曰く、吾れ此の船を押し

火遠理命海神宮に至る

海神の娘と婚す

流さん、暫らく待つ間に必ず良き路を得んと、斯くて其の言の如くせしかば果して宮殿いかめしき所に出でたり、蓋し是れ海神の宮なり、火遠理命頓かて宮門の前に至りしとき井の側に桂の木あり、即ち之に上ぼりて居たり、時に海神の娘豐玉比賣（トヨタマ）の從婢玉器を提げ水酌まんとて出で來りしが、井に光りあり仰ぎて見れば麗はしき男あり、大に驚けり火遠理命彼の婢を呼びて水を乞ふ婢乃ち水を玉器に盛りて奉りき、命彼の水を飲み給はず、頸より珠を解きて之を口に含くみ其の玉器に唾したり、玉即ち器に附着して離れず婢其の儘に持ちて內に入れり、豐玉比賣之を見て門外人有りやと問ふ婢曰く井邊桂樹の上に人あり其の姿麗はしと、豐玉比賣心に怪やしみつゝ、窃かに出でゝ一目見て內に歸べり父に其由を告げたり、海神乃ち自から出で是貴人なりとて內に延き入れ大に饗應して扨て娘豐玉を以て婚せしめたり、火遠理命即ちこゝに住むこと三年歸心轉た切なり彼の鈎を想ふて窃かに大息す、豐玉比賣之を知り其の父に語りて曰く聳君三年住み給へども嘗つて歎き給へることと無かりき、然るに今夜大息し給へるは、深き仔細のあることならんと、海神乃ち火遠理命に問ふて曰く、今朝娘の語るを聞けば、嘗つて歎き給はざりしに今夜大息し給へりと若

火遠理海神宮より歸へる

火遠理鈎を鯛魚の喉に得たり

し故ありや、如何と、火遠理命乃ち備さに告ぐるに彼の鈎の事を以てす、

海神是に於いてか多くの大小魚を召し集つめて之を問ふ諸魚皆曰く頃者鯛魚喉を疾んで食する能はずと即ち鯛魚の喉を探ぐりて鈎を得たり、火遠理命既に鈎を獲て歸へらんとす、海神之に敎へて曰く御身歸りて阿兄に此の鈎を返さんとき、「此鈎はオボチ、ス、チ、マヂチ、ウルチ」と云ひて後ろ手に返へし給へ而して阿兄若し高田を作らば御身必ず下田を造くり給へ、阿兄若し下田を作らば御身必ず高田を作くり給へ、吾れ水を掌るを以て三年の間、阿兄必ず貧しくならん、阿兄若し恨らみて御身を攻めば、鹽盈珠（シホミツタマ）を出だして溺らしめ、若し哀れみを請へば鹽乾珠（シホヒルタマ）を出だして救くひ給へと、鹽盈鹽乾の二珠を授けたり、

海神又多くの鰐魚を召し集つめ、天人を上國に送くり奉つらんに、誰れか何日に復命すべきぞと、一尋鰐群中より出でゝ曰く吾は一日にして能く命を奉ぜんと、云ひしかば即ち之に命じて送くり出でしむ果して其の言の如くなりき、

火遠理命歸りて海神の敎への如く其の鈎を返へしたり、既にして其の兄果して貧しくなれり、大に怨みて其の弟を攻めんとすれば二珠の靈驗現はれて、如何ともすべからず、遂に

彼に屈服したり、爰に又海神の娘豊玉は火遠理の胤を宿して姙み居けるが、産時に臨んで謂へらく天神の子を海中に生まんは恐れありと、乃ち海邊に産室を造くらんとす、未だ成らずして、御痛苦に堪へがたければ、已むを得ず産室に入りたり、其の産まんとする時、良夫火遠理に告げて曰く、凡べて他國人は臨産のとき必ず其の形相を現はすものなれば、必ず妾を見給ふなと然れども火遠理は之を忍ぶ能はず其の産時のまさかりに窺ひ見ければ八尋の鰐と化して匍匐し居たり豊玉比賣己れの姿を見られけるを耻づかしと思ひ、生みたる子を其處に置きて歸り行けり、此の子は即ち鵜茅葺不合命なり、

豊玉比賣斯く歸りたれど、戀ひしさに忍ぶ能はず妹玉依毘賣に附けて歌を奉つりけり其の歌に曰く

あかだまは（赤玉）　をさへひかれど（緒 雖 光）
しらたまの（白玉）　きみがよそひし（君 之 儀）
たふとくありけり（貴 有）

右の意は赤玉は緒さへ光りて美はしかれど白玉の君の御よそひは猶勝さりて貴とし と慕へるなり、

火遠理命答へて曰く

おきつとり（奥 島）　かもどくしまに（鴨 着 島）
わがいねし（吾 寝）　いもはわすれじ（妹 者 不 忘）
よのことごと（世 之 盡）

右の意は奥つ島鴨つく島の海神の宮に君と睦つまじく寝ねたることは今に忘れじと答へたる也、

白樫原宮

伊波禮毘古命（鵜茅葺不合命の子即ち神武天皇なり）其の兄五瀬命と日向高千穂宮に在り議して曰く何れの地に坐せば天下の政を布くを得ん、想ふに東方にこそ行かめとて日向より筑紫に至り給ふ、之より岡田の宮に居ること一年、阿岐の國多邪理の宮に居ること七年、吉備の高島の宮に居ること八年、爰を出で速吸門に至り給へるとき、龜の甲に乘りて釣するものに逢ひたり依つ

て呼びて之を問へば宇豆毘古といへる國神なりき、命之に海道を問ふ彼れ快く承諾して命等を導きけり、即ち浪速之渡を經て白肩津に泊せり、時に長髓彦軍を興こして天皇を待ち向へり、五瀬命之と戰ふて矢疾を被むれり、

五瀬命即ち曰く吾は日の御子なるに日に向かひて戰へり、是れ實に天意に反むけり、是を以て痛疾を被むれり、今より以後必ず日を負ひて戰へと、頓かて南方に出でゝ廻ぐらんと血沼の海に至り御手の血を洗ひたり是を以て血沼の海と呼ぶ、尙ほ進んで紀の國男之水門に到れるとき痛疾やみて遂に崩じぬ、

天皇此の地より巡幸し熊野に出で給ひけるとき軍士等と共に疲れ臥したり、時に熊野之高倉下なるもの太刀を献ず天皇初め軍士の病み伏せるもの皆癒えて起きたり、天皇依つて太刀を得る所以を問ふ彼れ答へて曰く臣夢に天照大神高木神の二柱健御雷を召して曰く、葦原中つ國はいたくさやきて有りけり、吾が神子等恐らくは安からざらん汝往いて之を鎭つめよと、雷神答へて曰く吾れ降り往かずとも、彼の國を平ぐべき恰當の太刀一つあり請ふ之を降さしめん、而して之を降すの法は先づ高倉下が倉の家根を穿ちて之れに落とし入れん

と斯くて健雷神臣に命じて曰く汝取りて之を天神の子に奉つれと、夢醒めて後臣が倉を見るに夢中の言に違はず、太刀ありき由つて之を之を獻じ奉つるなりと、

斯くて又天より命あり、此の地より奥の方へ進むべからず、荒神多ければ危險ならん、案内者として八咫烏を差し遣すべしと、天皇即ち八咫烏を得て先導となし之に隨ふて軍を進む、吉野川に至れるとき漁人あり名を問へば國神贄持の子なりと答ふ、更らに又軍を進む、尾ある人井より出づ其の井光れり、其の名を問へば國神井氷鹿なりと答ふ、更らに又山に入ること、に又尾ある人あり岩を押し分けて出で來れり名を問へば國神石押分の子なりと答ふ尙ほ進んで宇陀といふ所に至れり、

宇陀の地に兄猾弟猾と呼べる兄弟あり、天皇即ち八咫烏を遣はして二人に問はしめ曰く天神の子此の地に幸行し給へり、汝等能く事へん耶と、兄猾鳴鏑を以て其の使を射且つ兵を進めんとしけれども其の兵急に會せず、依つて陽はに仕へ奉らんと詐り、大殿を造くりて天皇を迎へ、機を設けて押し殺さんと謀れり、

弟猾天皇の處に到り拜して且つ告げ曰く吾が兄に奸計あり機を以て壓殺せんと謀れり、ゆ

め油斷し給ふなと道臣命久米命の二人兄猾に至り罵しり曰く汝が作くれる大殿の中には汝先づ入りて之を檢せよと、劒を以て殿中に追ひ入る兄猾即ち己れが作れる機の爲めに壓されて死しぬ、弟猾大饗を献じて軍を勞へり、時に天皇歌ふて曰く

うだの
宇陀の
まきなはる
鳴縄張
まきはさやらず
鳴者不障
くぢらさやる
鯨障
なこはさば
魚乞者
なけくを

たかきに
高城に
わがまつや
我待
いすくはし
勇細(冠辭)
こなみが
前妻之
たちそばのみ
立抓稜之實之
こきしいゑね
幾許飢
なこはさは
魚乞者
おほけくを
多

うはなりが
後妻
いちかきみの
柃實之
ときたひゑね
幾許飢
ゑゝしやこしや（嘲笑の古言）

忍坂の八十梟

あゝしやこしや（嘲笑の古言）

右の大意は、宇陀の高城に惡姦兄猾が鳴を取らんとて鳴網を張りたるに待ちに待ちたる鳴はかゝらずして、思ひがけなき鯨魚（皇軍の大なるに譬ふ）かゝれり、家妻若し魚を乞へば、此の鯨の肉を多く與へよ、皇軍は盛んなれば決して足らぬ事なかるべしと、我軍の盛んなるを誇り兄猾を罵りたる也、

天皇は更らに進んで忍坂（オシカ）の大室（オホムロ）に到れる時尾ある土蜘八十梟其の室に在りて待ち居たり、是に於いてか大に饗食を整へ八十梟を饗應し、人毎に刀を佩ばしめ、歌を合圖として同時に起こり彼れ等土蜘を誅戮せんと謀れり其の歌に曰く

おさかの
忍坂之
ひとさはに
人多
ひとさはに

おほむろにや
大室屋
きいりをり
來入居
いりをりとも
入居雖
くめのこが
久米之子
いしつゝいもち
石推持

みつ〳〵し
滿々
くぶつゝい
頭推

うちてしやまん
擊而將止
くめのこらが
いしついもち

右の大意は忍坂の大室屋に、土蜘共多く入り居ると雖ども皇軍が頭推、石推を以て一擊の下に之を斃すことを得る也、今や機會善し、物共早く打ち殺ろせといふ也、

斯くて此の歌を聞き皇軍一時に起こりて彼れ等を誅せり、其の後又登美毘古を擊たんとせしとき歌ひ給ふて曰く

みつ〳〵し
くめのこらが
かみらひともと
亜一莖
そねめつなぎて
其根芽繋而
うちてしやまん

右の大意　登美毘古如何に其の黨類多くありと雖ども皇軍至れば立ころに之を誅戮すべしと即ち韮の根も芽も打ち碎かんといふ也、

みつ〳〵くし
くぶつゝい
いまうたばよらし
今擊者善

わはふには
粟生
そねがもと
其根之莖
うちてしやまん

又歌ふて曰く

みつ〳〵し
くめのこらが
かきもとに
垣本
うるしはじかみ
櫨
くちひひく
口響
われはわすれじ
吾者不忘
うちてしやまん

右の大意　曩きに皇軍登美毘古を討ち五瀬の命之れが爲めに崩じ給へり、即ち垣の本に植ゑたる生薑の食へば後にひりゝと辛らく口に響くが如く、皇兄を失なはれたる仇は必ず報ずべしといふ也、

又歌ふて曰く

かむかぜの
神風
おひしに
大石
ちたゝみの
細畳之
うちてしやまん

いせのうみの
伊勢之海之
はひもとほろふ
延廻
いはひもとほり
延廻

宮を白樫原に造くる

右大意　伊勢の海の大石にからみつける細螺の蔓延する如く、皇軍は賊を四圍して必ず之を討滅すべしとなり、

又兄師木弟師木を撃ち給へる時、皇軍暫らく疲れたり、天皇即ち歌ひ給はく

たゝなめて（栢並而（冠辭））　いさなのやまの
このまよも（樹間從）　いゆきまもらひ（行候）
たゝかへば（戰者）　われはやゑぬ（吾者飢）
志まつとり（島津鳥（冠辭））　うかひがとも（鵜養之徒）
いますけにこね（今助來）

右大意　吾等は墨坂（いさなのやま）に於いて戰ひ既に疲かれ且つ飢ゑたり、早く鵜養ども等が兵糧を持ち來たれよかしとなり、

天皇宮を畝火の白樫原に造くり天下を治め給ふ、

初め天皇日向に居給ひける時、后となすべき美人を求め給ふに、大久米曰く三島溝咋（ミシマミゾクヒ）の女名は勢夜陀多良比賣（セヤダタラヒメ）容姿勝ぐれて美麗なりければ、美和之大物主見（ミワノオホモノヌシ）て之を得んと欲し、窃

かに彼の女の大便に入れる折を伺がひ、身を丹塗矢（ニヌリヤ）に變じ、便所の溝より入りて彼の女の陰を衝きたり、彼の女大に驚き走り出で、其の矢を持ちて、床邊に置きけるに忽ち麗はしき男と化せり、即ち相婚して生みたる女を伊須氣余理比賣（イスケヨリヒメ）といふ是れよかるべしと申しき、

時に天皇高佐士野に幸行し給へる途七人の媛達に逢へりき、伊須氣余理比賣も其の中にありき、大久米歌を以て天皇に告げて曰く

やまとの（倭之）　かさじぬを（高佐士野）
なゝゆく（七行）　をとめども（媛女等）
たれをしまかん（誰將覓）

右大意　此の高佐士野に遊べる七人の媛女の中天皇は何れを撰み給ふやと也

時に伊須氣余理比賣、先頭に進み立ちたり、天皇之を知り給ひ歌を以て答へ給はく

かつがつも（且）　いさやぎたてる（最前立有）
えをしまかむ（可愛將覓）

是に於いて大久米天皇の命を伊須氣余理に傳へけるとき、彼の女は其の大久米の目の裂け

たるを見て奇なりと思ひ歌を作りて曰く

あめつ　ちとりまして、
未詳　（未詳）

などさけるとめ
何裂利目

右大意　明かに知る能はずと雖ども、裂ける目を怪やしめる意なるや明らか也、

大久米答へ歌ふて曰く

をとめに　たゝあはん
媛女　直將逢

わがさけるとめ
吾裂利目

右大意、媛は裂ける目を怪やしみたれば吾が目の裂け居るは、餘の儀にあらず、天皇の爲めに汝を見出して逢はんと欲して目を裂きけるぞとなり、

伊須氣余理即ち天皇に仕へ奉つらんと申す、媛が家は狹井川の上にあり、天皇一夜之に幸し給へり後ち彼女を宮内に召し入れ給ふとき天皇の歌

あしはらの　さけてきをやに
葦原之　醜小屋

すがだゝみ　いやさやしきて
菅畳　彌清敷而

わがふたりねし
朕二人寢

右大意　天皇新枕の昔を懷ひ給ひし歌なるや明らか也、

伊須氣餘理比賣が生みける御子日子八井命神八井耳命神沼河耳命の三柱ありき、天皇崩じて後、庶兄當藝志美々命（ダキシミミノミコト）、大后伊須氣餘理に通ぜんとしけるの時、三柱の弟を謀り殺さんとせり大后大に愛ひ即ち歌を以て三子に知らしめて曰く

さゐがはを　くもたちわたり
狹井河從　雲立亘

うねびやま　このはさやきぬ
畝火山　木葉騷

かぜふかんとす
風欲吹

右大意　狹井河より雲立ち上ぼり畝火山に木の葉騷けり、蓋し大風大に起こらんとするなりといふ意は手研耳命の奸謀をさしていへるなり

又歌ふて曰く

うねびやま　ひるはくもとぬ
畝火山　晝者雲居

ゆふされば　かぜふかむとぞ
夕去者　風欲

このはさやげる木葉殿

右大意　畫のほどは忍びてさりげなき躰を示せるを雲の靜まり居るに譬へ、夕になれば三柱の弟を殺さんとせる謀計を風の吹かんとするに譬へたる也

三子等しく之を聞いて大に驚き、即ち先づ、發して當藝志美々命を殺せり、

高岡宮

神沼河耳命――綏靖天皇

浮穴宮

師木津日子玉手見命――安寧天皇

境岡宮

大倭日子鉏友命――懿德天皇

掖上宮

御眞洋日子訶惠志泥命――孝昭天皇

秋津島宮

大倭日子國押人命――孝安天皇

黑田宮

大倭根子日子賦斗邇命――孝靈天皇

境原宮

大倭根子日子國玖琉命――孝元天皇

伊邪河宮

若倭根子日子大毘々命――開化天皇

水垣宮

御具木入日子仰惠命――――崇神天皇

活玉依毘賣といふあり容姿美なり、こゝに神あり毎夜來りて彼女に逢ひぬ、幾ほどもなく彼の女は妊みぬ、其の父母怪やしみ問ふて曰く汝夫なきに如何にして妊らめるぞと、答へて曰く、麗はしき男の名も知らぬが毎夜來りて逢ける程に自づから妊めるなりと、其の父母彼の男の誰れたるを知らんと欲し其の女に敎へて曰く、赤土を床上に蒔き撒らし、緒を針に貫ぬき其の衣の裾に刺せと、其の女敎の如くす明旦之を見れば其の緒は戸の鉤穴を透して唯殘るは三勾のみなりき、其の糸をしるべに從ひゆけば美和山に至りて神の社に留りき、其の緒の三勾殘りたるを以て此の地を美和と命べり、

天皇四道將軍を遣はしけるに、大毘古命命を奉じて高志(越)の國に至る少女あり歌て曰く

こはや　　みまき　　みまき　　おのがを　　しりつとよ
いりびこはや　　御槇　　御槇　　巳緒　　後戸從
入日子(天皇の御名)
いりびこ、や
ぬすみしせむと
竊將殺

いゆきたがひ　　まへつとよ
行違　　前戸從
しらにと　　うかゝはく
不知　　窺
いりびこはや　　みまき

右大意　天皇の御身を竊かに害し奉つらんと企つるものあり、然るに天皇は己が緒(命)の危きを知らせ給はざるこそ危けれど、案に庶兄の邪心あるを歌ふたる也

大毘古此歌を聞き怪やしと思ひつゝ、彼の少女に向ふて問ひけるは、汝が言へることは何の言ぞと然れども少女其仔細を語らず、『唯歌をこそよみつれ』と答へて行く衛も知らず失せにき、彼れ奇異の思ひをなし即ち更らに還り上ぼりて天皇に此の由を奏す、天皇詔り給はく、こは想ふに山代國なる健波爾安王の邪心を起こせる前表ならん、汝速かに往いて之を征せよと即ち大毘古に軍を授づけ且つ日子國夫玖を副へて遣はせり、遂に討つて之を平ぐ

玉垣宮

狹穗彦の叛謀

伊久米伊理毘古伊佐知命＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝垂仁天皇

此の天皇沙本毘賣を后とし給へる時に、沙本毘賣の兄沙本毘古王其の妹に向かひ問ひけるは汝耳夫と兄と何れか最も愛するぞと、妹何氣なく答へて曰く兄上を最も愛する也と兄是に於いてか謀りて曰く、汝寔とに吾を愛せば、吾と汝と共とに天下を取らんと彼は斯く謂ひて持つ所の小刀を其の妹に授け、天皇の寢ね給ふを窺ひて之を刺し殺ろせと命じぬ、天皇は斯くとも露知らせ給はず、皇后の膝を御枕として臥し給ひぬ、皇后彼の小刀をもて御首を搔きまつらんと思ひ三たび振り擧げ給ひしかど、情に堪へずして刺す能はず、自づから悲しくなりて御涙はら〳〵と天皇の面に落ちたり、天皇驚ろき目を覺まし給ひ、皇后に問ふて曰く今怪やしき夢を見たり『沙本の方よりはや雨ふり來てにわかに朕がおもてをぬらしつ、又錦の色なる〈み(小蛇)我が頸になもまつ〈りし(纏綿)かくのゆめは何のしるしかあらまし』と皇后即ち隱くす能はず、有りし次第を物語れば、大に驚き給ひ軍を出して沙本毘古を撃たしめ給へり、皇后忍ぶ能はず、竊かに走りて兄の許に至る、此の時皇后懷妊しければ天皇其后を失ふに忍びず、暫らく軍を休すめて急に攻め給はず、此の間に皇后

皇子長じて能はず

は姙みける子を産めりき、

天皇后を得んと欲するの念切なりければ、竊かに軍中に令して力士の最も强きものを撰ばし、詔して曰く汝等彼の御子を取らんとき、同時に其の母后をも搦み來れと、皇后豫じめ之れを知りければ、悉く其の髮を剃り、其の髮を以て又頭を覆ひ、自づから腐衣を着して其の子を抱き城外に出で來れり、力士等其の子を受け倘ほ母后を得んとして其の髮を取れば、毛髮悉く脫し、其の衣を取れば衣悉く破ぶれぬ、而して遂に皇后を得る能はざりき、扨ても此の皇子(名は本牟知和氣御子)成長に至るも物いふ能はざりければ、天皇之を愛れひ給ひ、鵠の聲を聞かしめ依つて發語を習はしめんと欲し大邊之大鵠をして其の鳥を取らしめき、大鵠命を奉じ紀の國針間(播磨)を經て稻羽(因播)を越え丹波但馬より近江美濃信濃より遂に高志(越)の國まで追ひ至り捕へて之を獻じたりき、然れども皇子倘ほ之により て物言ふ能はざりけり、天皇大に愛れへ給ふ、夢に人あり諭として曰く、我が宮を天皇の宮の如くせは、皇子必ず物言はんと覺めて之をトふに、これ出雲の神なりき、故に皇子をして大神の宮に拜せしめんとす、而して何人をもて副へしめんとす、即ち曙立王を得たり

皇子初めて言語を發す

橘を常世國に取る

頓がて彼れ等は出雲大神の宮に拜して返へらんとしけるに、岐比佐都美(キヒサツミ)なるもの、青葉の山を飾ざりて其の河下に立ち、皇子等を饗せんとす、時に皇子初めて言を發して曰く、『この河下に青葉の山なせるは、山と見えて山にあらず、若し出雲の岩くまの夢の宮にます、葦原色許男大神を持ち伊都形(イツガタ)のはふりが大庭か』と、從者一同大に喜びて返へり天皇に此の由を申せば、天皇もいたく喜び給ひき、

扨此の皇子の皇妃にせんとて比波須比賣弟比賣厥凝比賣圓野比賣の姉妹を呼び上ぼしける に妹の二人いと面目みにくかりければ其本國へ返し遣れり、

こゝに圓野比賣は同じき姉妹ながらも姿容醜なるが爲めに、還へさるゝことを口惜しく、且つは隣里鄉黨への聞こえも慚しく思ひければ、山代の相樂といへる所に到り、樹の枝にくびれて死なんとぞしける、其弟國(山城の乙訓)に至れるとき身を深淵に沈めて死しけり、

又天皇多遲摩毛理(タヂマモリ)を常世國に遣はしトキジクノカグノコノミ(非時香果)を取り來らしむ、彼れ命を奉じて其國に至り、木實を取りて歸れるとき天皇は既に崩じ給ひぬ、此の香果は所謂今の橘なり、

日代宮

大帶日子淤斯呂和氣(オホタラシヒコオシロワケ)景行天皇

皇子日本武尊、勇壯に在しませしかば、天皇其心を見給ひて詔して曰く、西方に熊曾建(クマソタケル)二人あり、彼等無禮なり汝宜しく之を誅伐すべしと、皇子命を領し給ひ、即ち其の姨日本比賣の御衣を賜はり劒を懷にして出でゆき給へり、熊曾健(クマソタケル)が家に至り見るに、家の周圍軍兵を以て三重に警固し守護實に嚴重に見えたり、偶ま彼等が家に酒宴の事あり、日本武尊即ち其の髮を童女の髮の如く垂れ姨の御衣を着して女裝をなし、多くの女に打ち交じりて其室内に入りたりき、熊曾健の兄弟は美なる彼の容貌を見て大に喜こび、二人の間に彼を置きて盛んに酒宴を催したり、酒酣に及びて日本武尊懷中より劒を出だし兄熊曾を捕へ其の胸を刺せり、弟健之を見て大に畏れ逃げんとするを更らに追ふて又之をも刺したりき、二人死せんとするとき、皇子の武勇を稱し名を日本武尊と献ぜり皇子既に二兇を誅戮し給ひ出雲に入りて其の國なる出雲建を誅せんと謀り、相親しんで友垣となれり、皇子心に陰謀

あれば竊かに赤擣を以て刀を作くり自づから帶びて出雲健と共に肥河に沐浴せり、皇子先づ浴より上ぼりて、出雲健の刀を帶ぶ、出雲健は僞刀なることを知らずして、日本武の刀を帶びたり、既にして皇子刀を拔いて出雲健を斬る、彼れ其の刀を拔く能はずして遂に討たれたり、時に皇子歌ふて曰く

やつめさす　いづもたける
八雲立　出雲健
はけるたち　つゞらさはまき
八雲　黒葛多纏
さみなしにあはれ
眞身無嗚呼

右大意　傍註にて既に明らかなり

日本武尊歸へりて復命す、天皇更らに命ずらく西方既に平げりこたびは東十二道を平げよと、皇子命を領して朝庭を辭し、伊勢に下り大神宮を拜して、其の姨倭比賣(日本媛尊)に逢ひ且つ曰く、天皇早く吾を死ねとや思すらん、吾れ西方二兇を誅して歸り來れるに幾はども經ずして今又東方に向はしめんとす、之に因りて思へば吾を早く死ねと思ぼしめすなりけりと、因りていたく號泣せり倭比賣乃ち草雉劍と御囊とを給ふて曰く、若し急あらば

茲の囊の口を解き給へと斯く敎へて出だし遣れり、

扨ても皇子は其の姨に別かれて尾張の國に至り、國造美夜受比賣の家に宿し還へり上ぼらんとき婚せんことを約して出で給ふ、既に至りて東方の諸道を打ち平げ相摸國に入り給へるに、國造皇子を詐はり曰く此の野の中に大沼あり沼中の神はいたく千早やふる神なりと皇子其の神を見んと欲して彼の野に入る、國造即ち其の野に火をつけて燒き討ちせんと企てたり、皇子早くも欺かれたるを悟り、姨より授づかれる囊を用ゐるはこゝなりと、其の口を解きけるに、中には火打(燧石)ぞ入りたりける、是に於いて皇子先づ其の佩刀をもて草を拂ひ、其の火打を以て火を打ち出だし、向ひ火をつけて燒き退け還りて國造等を誅戮したり

其の後海に航して走り海を渡らんとせるに海波遽かに起こりて船危からんとせり、時に妃橘姫皇子に代りて海に投じ船漸く恙なきを得たり、橘姫の海に投ぜんとするや、歌を作くりて曰く

さねさし
冠辭

さがむのをぬに
相摸小野

もゆるひの　ほなかにたちて
燃火　中立
とひしきみはも
問君

右大意　嘗つて相摸の野に焼き討ちに逢ひ給へるときさへも艱苦を共もにして之れまで事へまつり君に今は別かれんとするかとて嘆ける也、はもの嘆詞は一首の主眼と知るべし

斯くて七日の後皇妃の御櫛海邊に流れつきたり乃ち之を取りて御陵を治め奉つれり、皇子之より甲斐に出で酒折宮に至れる時歌ふて曰く

にいばり
新治
いくよかねつる
幾夜宿
つくばをすぎて
筑波過

火焼の老人此の御歌を續ぎて曰く

かゝなへて
日並
ひにはとをかを
日十日
よにはこゝのよ
夜九夜

之より歸りて先きの日約せし美夜受比賣の許に至る、美夜受比賣自づから天饗を奉つる時月經の汚物其の被衣の裾につきたり、皇子乃ち月經を見て歌ふて曰く

ひさかたの
久方
とかまに
利鎌
ひはぼそ
羽細
まかむとは
將枕
さねむとは
將莫寢
ながけせる
汝之着有
つきたちにけり
月立

あめのかぐやま
天之香山
さわたるくひ
眞渡杙
たわやがいなを
手弱腕
あれはすれと
吾者雖爲
あれはおもへど
吾者雖思
おすいのすそに
飫

右大意　利鎌のやうに細き御身の腕を今宵枕とし、寢ねばやと思へども如何にせん、御身のつける衣物の裾に月たちたれば甲斐なしと也

美夜受比賣答への歌

たかひかる
高光
やすみしし
(冠)(辭)
あらたまの
(冠)(辭)

ひのみこ
日之御子
わがおほきみ
としがきふれば
年之來經者

あらたまの（冠辭）　つきはきへゆく（月者來經往）
うべなうべな（諾々）　きみまちがたに（君待難）
わがけせる（吾者）　おすひのすそに（裾之）
つきたゝなむよ（月立）

右大意　吾が大君よ、先きに約束し給ひしより、既に年が經ぬれば（日が經ぬれば？）、月も次第に立ちゆくなれば、君を待兼ね奉りて月の立つも（月經をいふ）其の筈の事にあらずやとなり、

日本武尊既に美夜受比賣と相婚し、草薙の劍をこゝに預け、伊吹山の荒神を取らんとて出で給へり、既に山に上ぼらんとし給へるに、大牛の如き白猪に出で逢へり、忽ちにして大氷雨降り來りて皇子大に惑へり、即ち還りて當藝野（タギヌ）の上に到れるとき御心地例ならずとて惱やみ給へり、尾津前（オヅノサキ）の一つ松の下に到りけるに嘗て東征の途次忘れ給へりし御刀今に失せずして有りけり、皇子依て歌ふて曰く

をはりに（尾張）　たゞにむかつな（直向在）

をつのさきなる（尾津之前在）　ひとつまつ
たちはけましを（大刀佩）　ひとつまつあせを（一松吾兄）
ひとつまつあせを（一松吾兄）　ひとにありせば（人在）
きぬきせましを（衣著）

其の能煩野（ノボノ）に到り給へる時歌ふて曰く

やまとは（倭）　くにのまほろば（國眞秀）
たゝなづく（冠辭）　あをがきやま（青垣山）
こもれる（隱者）　やまとし（倭）
うるはし（美）

右大意　倭の國は實に秀いでたるよき國なりと嘆美せるなりと、蓋し此の嘆美の中には、自己が病ひに侵かされて明日をも知れぬ命なるにつき猶ほ更ら戀ひ慕ひ給へる眞情見えていとゝ哀れにあらずや。

又歌ふて曰く

いのちの（命）
たゝみごも（畳 弧）
くまがしがはを（隈白檮之葉（冠辭））
その（其）の（の）こ（子）
またけむひとは（將全人者）
（ぐりのやまの（平群山之））
うずにさせ（髻華挿）

右大意　命の全からん人は、倭に歸へりて平群山の白檮を髻に挿して遊べよ、然れども吾れのみは遂にこゝに止まりて黄泉に往くべしと、嘆きたる也

又歌ひ給はく

はしけやし（愛）
くもゐたちくも（雲起來）
わぎへのかたよ（吾家之方自）

（此の時皇子病ひ最も急なり、即ち又歌ふて曰く

おとめの（嬢女）
わがおきし（吾置）
そのたちはや（其大刀）
とこのべに（床之邊）
つるぎのたち（劍之太刀）

屍骸白鳥に化す

右大意　こは彼の草雉劔を美夜受比賣の許に預けたるを思ひ出だして歌ひ給へるなり、

斯くて皇子は遂に崩じ給ひぬ、倭の國なる后妃御子達御陵を作くり哭して歌ふて曰く

なづきの
いながらに（稲幹）
ところつら（蔓）
たのいながらに（田之稲幹爾）
はひもとほろふ（蔓延廻）

右大意　此の歌は人々の號泣に堪へずして嘆き悲しむの狀を、田の稲莖に蔣葛のはい纏へるに譬へて、歌ひたる也

時に皇子の屍骸一の白鳥と化し飛び去れり、人々之を見て哭く〳〵跡を追ひ奉りき、其の時の歌に曰く

あさじぬはら（淺小竹原）
そらはゆかず（虛空者不行）
こしなづむ（腰煩）
あしよゆくな（足從行）

（白鳥を追ふに空はゆかず徒行にてゆく故荊棘等にて足腰を腦やまさるゝをいふ）

人々追ふて海中に入りし時普歌ふて曰く

うみがゆけば（海行）　こしなづむ
おほかはらの（大河原）　うゑくさ（植草）
うみがは（海者）　いさよふ

（海中を退ひ行かんとすれば腰まで汐に入りて進む能はず已むなく海は得ゆかでやすらふと也）

白鳥又飛んで磯に居給へるとき人々歌ふて曰く

はまつちどり（濱千鳥）　はまよはゆかず（濱者不行）
いそづたふ（磯傳）

右四歌は其の後皇子を葬むるの時に歌ひたり由つて天皇の大葬には年來必ず歌ふなり扨て彼の白鳥は飛んで河内の志幾に留まる、こゝに御陵を造りて白鳥の御陵といへりき、

志賀宮

若帶中日子――――成務天皇

訶志比宮

帶仲日子――――仲哀天皇

天皇筑紫の訶志比宮に坐して、熊曾を擊ち給ばんとせる時自づから御琴を彈かせ給ひ、武内宿禰庭に居て神命を請ひ奉つりき、こゝに神あり大后（息長帶日賣後の神后皇后）に託宣して曰く、西方に國あり、金銀珍寶數多くあり、汝往いて之を征せよと、天皇答へて曰く高地に上ぼりて西方を見るに國土あらず、唯大海の横はるあるのみと、竊かに僞りの神と思惟しければ御琴を押し遣りて彈き給はざりき、是に於いてか彼の神大に憤りて曰く汝此の國を知らすべきにあらず、疾く黄泉の國に向ふべしと、宿禰大に驚きて天皇に勸めて琴を彈かしむ然れども天皇は遂に眠るが如くに崩じぬ、宿禰更らに大祓の禮をなし、再び神命を請ひければ神詔又先きの如くにして且つ曰く此の國は后の腹にある子の知らざらん國なりといふ、由つて腹中の子男女何れなるやを問へば即ち男子出生せんと答へき、更らに其の何の神なるやを問へば即ち曰く、吾は是れ底筒男中筒男上筒男三柱の神にして、天

新羅制服

香坂忍熊の叛

照大神の詔を受けて來れり、汝寔に其の國を得んとならば、天神地祇を始め山神河海の神に至るまで悉く幣帛を奉つり、吾が神靈を船上に乘せ、木灰を瓠に入れ、箸と椀とを多く作くり之を海に投むて渡れと敎へたり、即ち其の敎の如くにして、軍旅を整へ渡航せんとす、海中の大小魚悉く船を負ひて渡りき、船遂に新羅國に至る國主惶懼出でゝ曰く今より後必ず天皇の命に從はんと、新羅百濟の二國皆服從せり、

皇后既に新羅を制服し給ひ、倭に還らんとを給ふに、途に變あらんとを慮り、喪船を具へて御子(皇后新羅にて生み給へる御子)を載せ奉つり、既に崩じぬと云ひ觸らさしめたり、斯くて倭に上ぼり給ふ途すがら、香坂王忍熊王之を聞き要擊せんと欲して、待ち受けたり香坂王木に上ぼりて望み居けるに大なる猪出でゝ彼を喰ひ殺ろしたりき、弟忍熊王は更らに屈せず、皇軍を待ち受けたり、皇軍の將振熊命僞り曰く息長帶日賣は既に崩じたり更らに戰ふべきなしとて歸服の狀を示めせり忍熊王之に欺むかれて弓弦を悉く緩るめて兵を藏めたり、時に振熊命遽かに起ちて忍熊等を追ひ退けたり、忍熊王伊佐比宿禰と共もに逃がれて船に上ぼり歌ふて曰く

いざあぎ
率吾君
いたでおはずは
痛手不負者
あふみのうらに
淡海之海

ふるくまが
振熊
にほとりの
鴨鳥(冠辭)
かつぎせなわ
潛爲吾

右大意　いざ吾が君振熊に追ひ迫まられて痛手を負ふて苦るしまんより、此の海中に飛び込んで死するは勝されたり、いざ〳〵諸共に然かせんとなり、『かづきせなわ』は頭を衝き入るといふほどの意斯くて彼れ等は海中に投じて死しけり、

宿禰即ち皇子を率ゐ越の角鹿に假宮を造くりて之に住ませ奉つれり、土神伊奢沙和氣大神に告げて曰く吾が名を御子の御名に易へんと欲す、明旦濱に幸すべし名易への幣を奉つらんと斯くて其の翌旦夢の如くに幸行しけるに、鼻毀ぶれたる入鹿魚、既に一浦に寄り來れり、既にして皇子還り上ぼりけるに、太后酒を以て迎へ奉つれり、其の時太后の歌に曰く

このみきは
此御酒
くしのかみ
酒之首長
いはたゝす
石立

わがみきならず
非吾御酒
とこよにいます
常世座
すくなみかみの
少名御神

かむほぎ　神
とよほぎ　豐
まつりこし　献　來、
あさずをせさゝ　不令　酒飲

ほぎくるほし　壽命　狂
ほぎもとほし　壽命　廻
みき　御　酒　ぞ

（右大意）　此の御酒は吾が御酒にはあらず、常世に於ける少名毘古命が奉つりける祝酒にて候へば、杯を酒はかさず引きつぎ〳〵飲み給へとなり

武内宿禰御子の爲めに答へ奉れる歌

このみきを　此　御　酒
そのつゞみ　其　鼓
うたひつゝ　歌　作
まひつゝ　舞　作
このみきの　此　御　酒
あやに

かみきんひとは　醸　人
うすにたてゝ　臼　立
かみけれかも　醸
かみけれかも
みきの
うたゝねしさゝ　樂　轉

（右大意）　此の酒を醸もしけん人は其の當時鼓を臼のほとりにたてゝ、喜こび歌ひつゝ醸もしたるものと見えて、今此の酒を飲めば、心愉快に樂しさの益さる事よ、轉だ樂しさの増さる事よと也、

明宮

品陀和氣命――――應神天皇

此の天皇の御子廿六王在はしけるに、嘗つて天皇大山守命大雀命の二王に問はせ給ふて曰く汝等兄なる子と弟なる子と何れが可愛ゆきぞと蓋し此の時天皇位を宇治の和紀郎子に讓らせ給はんの志ありければなり、大山守命答へて曰く兄なる子ぞ愛らしきと、大雀命天皇の心を知り給ひ答へて曰く、兄なる子は既に人と成りつれば悲ぶせき事なけれど、弟なる子は未だ人と成らねば是れぞ最も愛すべしとぞ申しける、天皇大に喜こび即ち和紀郎子を以て天津日継とし給へり、

初め天皇近淡海國に幸し給へる時宇遲野の上に葛野を望ぞみ歌ひ給はく

木幡村の美女

ちは の
千葉之（冠辭）
もゝちだる
百 千 足
くのほもみゆ
國之秀 見
かつぬをみれば
葛 野 見
やにはもみゆ
白 庭 見

（遠く葛野を見渡せば家居も見えて國富みたるさまも見ゆなりと嘆美し給へる也）

其の木幡村に至り給へるとき一人の美女に出逢へり、誰が女ぞと問へば答へて曰く丸邇之比布禮能意富美が女名は宮主河枝比賣なりと、天皇乃ち其の家に幸す、姫酒盃を献ず天皇之を受け歌ふて曰く

このかにや
此 蟹
もゝづたふ
百傳（冠辭）
よこさらふ
横 去
いちゞしま
（地 名）
みほゝどりの
鵜 鳥（冠辭）
しなだゆふ
（冠 辭）
いづくのかに
何 處 之 蟹
つぬがのかた
角 鹿 之 蟹
いづくにいたる
何 處 到
みしまにとき
（地名）速 來
かつきいきづき
溜 息 衝
さへなみぢを
（地 名）

すぐ〳〵と
こはたのみちに
小幡之道
うしろでは
後 方 者
はなみはし
齒 並
いちゐの
櫟 井
はつには
初 土 は
したには
下 埴 者
みつぐりの
三栗之（冠辭）
かふつく
頭 衝
まよがきこに
眉 掻 濃
あはしゝをみな
過 嬢 女
わがみしこら
吾 見 兒 等
あがみしこに
吾 見 兒
わがいませば
吾 行 坐 者
あはしゝをとめ
過 嬢 子
をだてろかも
小 楯 哉
ひしなす
菱
あにさかのにを
丸邇坂之土
はだあからけみ
膚 赤
にぐろきゆゑ
土 黑 故
そのなかつにを
其 中 津 土
まひにはあてず
眞 日 不 當
かきたれ
齒 垂
かもがと
かくもがと
うただけに
轉 宴

おかいをるかも　向居哉

いそひをるかも　副居哉

（右大意）　此の歌二首と見るが穏當なり、前首は酒宴に出だせる酒肴の蟹などにやありけん之を見て詠み給へるなり、後首の意は眉畫き垂れて美くしき女に昨日木幡村にて逢ひけるが、其の時兎やせましかくやせましと思ひわづらひたるに、今は同じ宴に連らなりて而かも其の美女の盃を受くる事よと云ひ給へるなり、

斯くて此の美女と婚して生み給へるは即ち彼の和紀郎子なりけり、

天皇又日向の美女髮長比賣を召し上げ給ふに、太子大雀命其の美女の難波津に泊まれるを見て心に之を愛し、武内宿禰をして天皇に之を請はしむ天皇即ち之を賜ふ、其の日會ま豐明聞こしめす日なりければ、髮長比賣をして大御酒を取らしめ之を太子に賜はり天皇自づから歌ふて曰く

いざことも　牽子等
ひるつみに　蒜摘
かぐは　香細
ぬびるつみに　野蒜摘
わがゆくみちの　吾行道之
はなたちばなは　花橘者
とりわがらし　鳥居枯
ひととりがらし　人取枯
なかつえの　中枝
あとらをとめを　赤環子(美女)
よらしな　宜

（右大意）　此の美女を汝の婚して逢ひ給はゞ至極適當にて宜しからんなど謂はんが如し

又歌ふて曰く

ほつえは　上枝
しづえは　下枝
のつぐりの　冠
ほつもり
いざゝば　牽誘者

（右大意）　此の美女を汝の婚して逢ひ給はゞ至極適當にて宜しからんなど謂はんが如し

◎諸本四字を脱せり日本書紀を案ずるにヒシとラの字あり、然らばヒシがラとなる菱殼之なり

みづたまる　水淳
あぐひ　杙打
さしけるしらに　刺不知
はへけくしらに　延不知
いやをこにして　最

（右大意）　大雀命の吾より先きに此の美女を慕ふて想ひ居たるを吾は知らずして已れのも

よさみのいけの　依網池之
◎○○が○○
ぬなはくり　蓴
わがこゝろし　吾心
いまぞくやしき　今悔

のにせんとせしは、今思へば悔やしきぞと酒宴の上に臥むれて述べ給へる也

扨て彼の美女を賜ふて後太子また歌ふて曰く

みちのしり　ことはだをとめを
道之後　巨田(地名)嬢子
かみのごと　きこえしかども
神　知　聞　雖
あひまくら　まく
あひ　枕

(右大意) 神のかく遥るかに聞こし召したる美女なれば容易には枕交はさずとなり、

又歌ふて曰く

みちのしり　ことはだをとめは
あらそはず　れしくをしぞも
不　爭　戯
くるはしみおもふ
愛　思

又吉野の國主等大雀命が佩かせ給ひける御太刀を見て歌ふて曰く

ほむだの　ひのみこ
品　陀　日之御子
おほさゝき　おほさゝき
大　鷦　鷯　大　鷦　鷯

はかせるたち　もとつなぎ
所佩太刀　本　緒
すゑふゆ　ふゆきのす
末　振　冬　木　如
からがしたきの　さやさや
枯　下　樹之　清　々

(右大意) 品陀天皇(應神)の皇子大雀命が佩び給へる太刀は鍔本より切先きに至るまで玉散る燒刃の香ひ清らかにして實に天下の名刀なりと嘆美せるなり、

又吉野の白樫(カシフ)上に横臼(コヨロス)を作りて其の横臼に大御酒を釀もして其大御酒を献つる時に口鼓を打ち歌ふて曰く

かしのふに　よくすをつくり
白　樫　之　生　横　臼　作
よくすに　かみしおほみき
うまらに　釀　大　御　酒
美　味　きこしもるをせ
まろがち　所　聞　以　食
吾　君

(右大意) は傍註によつて明らかなるべし

釀酒を知れる人須々許理(スヽコリ)なるもの來朝し大御酒を釀もして天皇に奉つる天皇之を嘉みして

大山守王叛意あり

歌ひ給はく

すゝこりが　かみしみきに
須々許理　醸御酒
われをひにけり　ことなぐし
吾　酔　事和酒
をぐし　われをひにけり
咲酒　吾　酔

かく歌ひ給ひつゝ御杖もちて大なる石を打ち給ひしに、其の石走り避けたり諺に堅石も酔人を避くるとは即ちこれなりけり、

扨ても大山守命は天皇の命に違ひて、天下を得んと欲するの心あり、其弟和紀郎子を殺さんと謀り窃かに兵を集むる由、大雀命の耳に入りしかば、彼は直ちに此の由を和紀郎子が許に報じ遣りぬ、和紀郎子の之を聞くや大に驚ろき『兵を河邊に伏し、又其山の上に絙垣（キヌガキ）を張り帷幕を立て詐はりて、舍人を王と爲して、あらはに吳床に坐せて、百官恭敬往來の伏既に王子のいます所の如して更らに兄王の河を渡りまさん時の爲めに、船檝を具へ飾ざり、また佐那葛（サナカヅラ）の根を舂つき其の汁の滑を取りて其の船中の簀椅（スベシ）に塗り、踏みて仆るべく設けて其王子は布衣褌を服し、既に賤人の形に爲りて檝を取りて船に立ちませり』

和紀郎子其の兄王を殺す

爰に兄王兵士を隱くし鎧を衣中に服して河邊に至り船に乘らんとし給ふとき、其のいかめしく飾れる所を見て弟王彼處に在りと思ひ、檝を取りて船に在らんとはゆめ知らざりき、故に其檝取れるものに向かひ問ふて曰くこの山に忍かれる大猪ありと傳へきけり、吾其の猪を取らんと欲す得能ふや否やと、檝とれるもの答へて曰く得能ふまじと、かく語らひつゝ船既に中流に至れるころ和紀郎子舟子をして其の船を傾けしめ大山守命を水中に陷れたり、大山守水に浮き出で流れつゝ歌ふて曰く

ちはやぶる　うぢのわたりに
（冠）辭　宇遲之渡
さをとりに　はやけむひとし
棹取　將速人
わがもこにこん
吾許來

（右大意）　宇治の渡に棹取りて早く吾許に來りて助け吳れよといふ意なり併しこれは大山守王の歌なりとして解するときの意なり、縣居翁の說に曰く河に落ちて歌よみ給はんことは有べくもあらずこは宇治王の伏兵の起らんときの合圖の歌なりさればもと即見流歌曰とありけん云々これは大山守王の歌にあらずとして見るの說なり

河邊の伏兵一時に起こりて遂に王を殺ろし了んぬ、其の屍をかき出だせる時弟王歌ふて曰く

ちはやびと（冠詞）
わたりぜに（渡瀬）
あづさゆみ（梓弓）
いきらむと（伐）
いとらむと（取）
もとべは（本方）
すゑべは（末方）
いらなけく
かなしけく（悲）
いきらすぞくる（不伐來）
まゆみ（檀）

うぢのわたりに（宇治之渡）
たてる（立）
まゆみ（檀）
こゝろはもへど（心者雖思）
こゝろはもへど
きみをおもひで（君思出）
いもをおもひで（妹思出）
こそにおもいで（其思出）
こゝにおもいで（此思出）
あづさゆみ（梓弓）

（右大意）宇治の渡に立てる檀の木（山守王を譬へていふ）を直ちに斬つて捨てんかと思ひしかど、本には君の事を思ひ末には妹の事を思ひ、如何にも斬るに忍びずして躊躇してこの處まで流し來つるなりと、

昔し新羅國主の子に、天之日矛といふものあり、此の人皇國に參ゐり渡れり、彼のこゝに渡りける事の仔細は、彼の土に一の沼ありけり、名を阿具奴摩（アグヌマ）といふ、此の沼のほとりに一の賤女晝寢したりき、こゝに日の光虹の如く其の陰を指したるを、又一の賤夫之を見て怪やしと思ひ常に其の女の擧動を伺ひたり扨て此の賤女其の晝寢したりし時より遂に姙らみて一個の赤玉を生めりき、之を伺ひける彼の賤夫は此の赤玉を請ひ得て常に腰に着けたり、此人谷間に田を作くりければ、飲食を牛に負はせ耕人等に與へんと欲して往く途中、端なくも彼の天之日矛に出逢へり、日矛彼を見て曰く汝牛を率ゐて此の谷に入るこれ必ず此の牛を殺ろし食はんと欲するならんと、賤夫を捕らへて遂に囚獄に入れけり賤夫辨解すれども遂に許容なかりき、彼の賤夫即ち腰なる赤玉を解いて之を献ぜしかば、日矛遂に彼を赦るし玉を取りて之を床邊に置けり、既にして此の玉一の美女と化せり、日矛即ち之と

日矛妻を追ふて皇國に渡れり

霞壯夫美女を必ず得んと誓ふ

婚して嫡妻となせり、

馴るゝに從いて日矛の美人を嘗りけるに、美人曰く吾は汝の妻となるべきものにあらず、因つて祖國に歸らんと、小船に乘じて難波に逃がれ歸れり、日矛即ち其の妻を追ふて難波に來れるに渡の神塞いで彼を入れざりければ、更らに還りて多遲摩國に泊せり、こゝに同國前津見と婚して子を生めり、子孫遂に伊豆志遠登賣に至る、

伊豆志遠登賣美色ありければ諸神之と婚せんと欲すれども、皆其の意を達するを得ざりき然るにこゝに二神あり兄を秋山之下水壯夫（アキヤマノシタビヲトコ）と云ひ弟を春山之霞壯夫（ハルヤマノカスミヲトコ）と呼びけり、兄其の弟に云つて曰く吾伊豆志遠登賣に婚せんと欲すれども得ず、汝能く此の乙女を得んや如何若し容易に之を得ば吾れ汝に衣服清酒及び山海の珍味を以て睹せんと、弟即ち之を諾す、彼れ由つて母の許に至り、其の仔細を告ぐ、母即ち藤葛を取り之を以て一夜の間に衣服裾沓を作ぐり弓矢を製して彼に與ふ、彼れ之を着して乙女の許に至れば衣服弓矢は悉く藤の花となれり、霞壯夫其の弓矢を以て乙女の厠に繫け置きたるに、伊豆志姫は此の花を怪やしと思ひて持ち來れるとき彼は其の乙女の後ろに添ひて其の家に入り即ち婚して一子を生めり、

母の呪詛

霞壯夫既に約の如く成功したれども兄は約の如くに睹物を與へざりき、由つて弟之を其の母に訴ふ母の曰く吾が世の事は何事にも神世の事を倣ふべきに、徒らに人間を學んで約に違ふとは不届至極なりとて、乃ち伊豆志河の節竹を取り八ッ目の荒籠を作ぐり其の河の石を取り鹽に交へて之を竹葉に包み、呪詛して曰く『此竹葉のあをらむがごと、此の竹葉の萎むがごと、青み萎ぼめ又此の鹽の盈ち乾るが如、盈ち干よ、又此の石の沈むがごと沈み臥せ』と斯く詛ろひて之を竈の上に置きたり、呪詛の功空しからず、其の兄八年の間病枯したりき、兄悲しみて憐れみを乞ふ由つて其の前約のものを償はして病舊に復したり、

高津宮

大雀命――仁德天皇、

大后石之日賣命は嫉妬深かき御性なりしかば、召し使ふ女官達は宮中をも覗く能はず、少しだも常に異なることあれば、足摺りなして嫉たみ給へり、然るに天皇吉備海部直の女黑日賣の美なるを聞きて召し上ぼせけるに、大后の嫉妬甚しきに畏れて其の本國に逃げ下り

き、天皇即ち高臺に坐し瞻望して歌ふて曰く

おきべには　くろさきの　くにへくだらす
澳方者　黒埼　國下

おぶねつらゝく　まさつこわぎも
小舟連　吾妹

（右大意）沖の方には小舟連なりて黒崎の方に行くは戀しき妹の本國へ歸り行くなりといたく慕ひ給へる意を含めたり

大后此の歌を聞き給ひ嫉妬に堪へず、大に恐りて大浦に人を遣はし、黒比賣を船より追ひ下だし陸より追ひやりたりき、左れど天皇は深かく黒比賣を戀ひ給ひ、大后を欺きて淡路島見給はんとて幸行し遙かに臨んで歌ひ給はく

おしてるや　いでたちて　あはしま　あぢまさの
冠辭　出立　淡島　梶

なにはのさきよ　わがくにみれば　おのごろしま　しまもみゆ
難波埼自　朕國見者　島見

さけづしまみゆ、

即ち其の島より傳ひて吉備國に出で給へり、時に黒比賣大御飯（オホシミケ）を奉つれり、大羹を煮んとて青菜を摘めるとき天皇乙女の菜を摘む處に至り歌ふて曰く

やまかたに　きびゝとと
山方

まけるあをなも　ともにしつめば
蒔有菘　共採者

たぬしくもあるか
樂有哉

天皇歸へり上ぼらんとし給へる時黒比賣の奉つれる歌

やまとべに　くもばなれ　われわすれめや
倭方　雲離　吾忘乎

にしふきあげて　そきをりとも
西風吹上　退居雖

（右大意）西風吹き上げて雲の散り〳〵に離るゝ如く、君と妾とは離るゝとも妾は君を忘れ奉らじとなり

又歌